
蜜柑色の君

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜜柑色の君

【著者名】

N11625

桜

【あらすじ】

初恋をしたことがない少女・ココロ。友達は皆恋をしていた。そんな「ココロに今までなんともおもつてなかつた男の子が急に気になり始める。何年も想い続ける一途な女の子の恋のお話。

前から書きたかった蜜柑色の君！

ついに投稿です！

あらすじでは「ん？」と思つかもしませんが実際は「ゴチャゴチャ
です。
ではどうぞ！

one sided love-1 中学生

あなたは誰かを好きになつたことはありますか？

想いを伝える勇気はありますか？

きっとほとんどの人が無理だと思う。

けれど想いを伝えたならば、あなたにはそれだけの勇気がある。
傷付くのを恐れない人はきっと強く、美しいんだよ。

私はあの人出会い、たくさん涙したし、たくさん笑了。
辛かつたし、切なかつた日々もあつたけど後悔はしません。
恋をする……それだけで人を信頼するという勇気がいるんだから。

——初恋の相手があなたで良かつた……——

「髪の毛よしー制服ぱつちりーうん、大丈夫かな

私は鏡で上半身を見て、目立つところがないかチェックする。
少し髪の毛がしつぽ頭になつたので手のひらで軽く頭を押さえ付

ける。

いや、押さえ付けるところより、おいているところの方がいいのか
もしれない。

これは私の癖だ。

「用意できた? お母さんはできたけど」

「うん、私もできた! 時間はまだ早いね」

私は時計をみてまだ時間があまつていた。 今日から新しい季節
……暖かい春の始まりだ。

「今日は中学校の入学式ね。 誰と同じクラスになるのかしらね。
ねぇ、□□□?」

私は……□□□と呼ばれて母親の方を見る。 私の名前は□□□
だけ少し変わった名前だと思つ。
理由は『他人の□□□が考えられるよつ』といつせられた。

「私は……誰となつてもいいよ。 なりたくない人もいるけどね」

母親はそう、とだけ言い、しばらく沈黙が続く。

「あ、こんな時間。 もう行かなくちゃ!」

私は時計を見てはつと見る。
急いで靴をはき、通学カバンをもつ。

「お母さん、早く~」

「待つてーお母さん歳やから……」

はあ？ と少し呆れるけど突っ込んでいる暇はない。
でもこの母、いつも「私はまだ若い！」とか言つてゐんだよ？それが歳？なんだこの母親！…と思つ。

私は待つてられなかつたので、ドアを開けて、廊下のよつな細長いところへエレベーターのボタンを押す。

私の住んでいるところはマンションでまあまあ綺麗だと思つ。階段もあればエレベーターもある。

母を待つてゐる間とエレベーターがくるのを待つてゐた。

「ママ、ママ口は早いわね……若いつていいわね

ぐるつと後ろを向いて母に一言だけ言つた。

「遅い

また、沈黙が続く。ちょうどいといところにエレベーターがきたのでよかつた。

エレベーターにのり、一階までつくるを待つ。
すぐについた。

外に出ると、春の生暖かい風が髪を靡かしてくれる。
ブレザーを着てるから少し暑いけどシャツは案外薄くて寒そう。
学校につくと校門に誰かたつてゐる。
男の子だらうか？男子の制服を着てゐる。

「おう、星野ーー！」

「あ、ぬりちゃん! ひしゃぶりだね!」

校門にいたのは同じ学校だった音無 ルイ だった。ルイと「名前」だが、みんなルイのことをぬりちゃんと呼んでいるから私もぬりちゃんと呼んでいる。

星野といつのは私の苗字。

「ぬりちゃん、男子の制服なんだ? 女の子なのに」

ぬりちゃんは苦笑する。
ぬりちゃんは外見は男の子に近い女の子で、ショートカットの髪に少しほつちやりしている。
でもぬりちゃんは心は男の子らしい。
だから男の子っぽい言葉遣いになるみたい。

「ん? 星野、また髪のびた?」

ぬりちゃんが私に聞いてくる。

私はこくんと頷いた。

私の外見は少しぬねていて長い髪に茶色っぽい瞳。
体はやせている。

髪は少し茶色がかかつたぐらいで長い髪は少しの血塊だ。

「クラス表みたか? まだなら見てこよ。俺はこいで待ってる
奴がいるからや」

「うん、そうする。ぬりちゃん、またね

私は手をふり、クラス表を見てみる。

「わ、六組だ！ん？美咲と千恵は違うクラス！？ええ……」

クラス表を見てがっかりする。

小学校の時から仲がいい美咲と千恵は違うクラスだったから。

「いいじゃない、新しい友達つくれば」

「うん……やうだよね……」

私は六組の列に並ぶ。

その時に声をかけられたので振り返ると真琴がいた。

「ハハローーひせしづりーー！」

真琴……富内　　真琴は同じ学校だった人で、肩までつく髪に少しほつちやりしている。
でも、可愛いと思つ。

「み、富内　　真琴ーー！」

「…………どうしてフルネームなのかなあ？」

小動物みたいで可愛いけどな～。

「なんとなく……かな？エヘヘ？」

真琴が頬を膨らませる。

「もひー別にいいけど……でも新しい学校の人ってなんか……
おびえちゃうね……特に女子……」

真琴がなんだか変?

私はおびえるというより、緊張するよ……。

「私は不安だなあ。友達できるか……私、人見知りだもん」

真琴はああ、とだけ返事をしてニーンマリと意地悪な笑みをする……。なんだらう、嫌な予感が……。

「『』『』ロは人見知りだもんね~。初めてあつた人とか、そんなに仲良くない人と喋る時なんかのすゞくおどおどしてるもんね?」

「……仲がいい人だつたら、本当の自分でいられるんだけどね……」

私はテンションの低い声で言った。

だつて、仲がいい友達は違うクラスだもん!!

私はふうつとため息をついた。少し自信がない。このクラス（六組）で友達ができるか。

「じゃあ、並びましょうか」

真琴がからかうような、楽しんでいるかのような声をだす。
ひ、ひどい!!

並んですぐに体育館に行き、先生達の挨拶、校長の話で、その後に各クラスに移動した。

今、六組の自分の机に座つて、先生の話を聞いている。

「初めまして！このクラスの担任の 工藤 鈴 です。
担当科目は国語です」

工藤先生は女教師でまあまあ綺麗な方だ。 声も透き通つていて
綺麗。

「初めまして、このクラスの副担任の 中山 聖 です。
担当科目は理科です」

中山先生は男教師で顔は普通だなあ。

「では皆さんにも自己紹介をしてもらいます。一番からおねが
いします」

「俺かよー?えと……………です」

みたいな感じで始まった。

私は二十六番なのでまだまだだと思つていたけど、すぐに私の番
になつた。

「ほ、星野 ハハロです。よろしくお願ひします」

私の自己紹介は終わり、後ろを向くと真琴がいた。 私の次が真

琴なんだ。

「富内 真琴です。よろしくお願ひします。」

真琴はさつさと済ませて、ガタンと音をたてて座った。少し、落ち着いた……。

全員の自己紹介が終わって、さよならの挨拶をした。私は通学カバンにもらつた教科書をつめて、靴に履き替える。ここは学校では上靴で、学校にくるときや帰るときには運動靴に履き替えなきやいけない。 体育はグランドだつたら運動靴で体育馆だつたら上靴らしい。 当たり前だけだ。

「美咲と千恵は四組か……廊下で待つてよ」

駆け足で私は四組に向かう。 待つてる間暇だったのでミニーフラス表を見る。 一瞬、時が止まつたような感覚がした。

——大西 穂——

その名前を見ただけでチクン、と胸が痛む。 穂も四組だつたんだ……。 会わせる顔がないよ……。 だつて、私は一度穂に——

「ハハロー……ビーフしたの? ほーつとしとーーー」

私は考えるのをやめて、声のした方を向く。 大体予想はしてゐ

んだけどね。

「千恵か…… 美咲は？」

「美咲なら、まだ教室にいるよ」

美咲、おいていかれたんだね……。今、私の目の前にいるのは千恵。武内 千恵。外見は髪をポニー テールに結ついて、鋭い目、明るい性格かな。

「待つてよう～！千恵は早いんだから～」

美咲が来た。佐藤 美咲はのんびりした性格で髪はストレート、目は大きく、体重は普通。

「帰ろつか……！？」

誰かとぶつかつたのでぐるっと後ろを向いて相手を見ると……そこには……大西 棗が！？

「なんだ、星野かよ！」

「大西！？ぶつかって悪かつたね！」

私はそれだけ言つと大西を無視した。千恵はクスクス笑つている。私、笑われるようなことしたかな？

「ココロ、大西だけは惚れちゃだめだからね？」

はあ？と思いつつも黙つて頷く。実は私と大西は小学校の時に

両想いとかいう噂があった。勿論、嘘だよ？

「そういうえば、一人の初恋の相手は誰？」

美咲は顔を真っ赤にしてモジモジしてから言った。

「リ、リク…… 杉村 リク。今も好きだよ……」

美咲の後に千恵が言った。

「私は元カレだな。口口口はまだ初恋をしてないんだっけ？」

「うん。初恋……恋ってどんな感じなのかなーって思うぐらい」

私はこの時知らなかつた。私の初恋の相手はすぐそこにあることを見つめ、何年もその人を想い続けることを……。

蜜柑色の君は思い付きで書いてるので更新は早かったり遅かったりと不定期です。
けれど大体最後は決まっているので最後までよろしくお願ひします！

one sided love-2 クラブ体験（前書き）

テーマは「恋」なんですがまだまだテーマは書かずにだらだら書いてます。

だらだら書いていてもちゃんと恋と関係あって進んでいるので大丈夫なんですが問題は自覚なんですね。

朝。

目覚し時計が耳元で騒がしく鳴るので布団からもぐもぐと手を伸して力チツと小さな音をさせて時間をみる。

少しねぼけている私は目をこすりながら制服に着替える。時間はきつちりとした7時。

歯磨きをして、髪をととのえ、制服についている「」をなれたでつきで落としていく。時間にまだ余裕があるので食パンを手にとり私の大好きなチョコレートをぬつてぱくりと食べる。

飲み物は何にしようか迷う。

牛乳はアレルギーで飲めないし……。

考えた私はオレンジジュースにした。

オレンジは好きだ。

私は千恵が迎えにくるのを待つ。

昨日の帰りに千恵が私を迎えてきて、そのあと一人で美咲を迎えていくという話をした。

私と美咲の家は中学校に近いけれど、千恵は遠い。だから徒歩で私の家にくるには三十分ぐらいはかかる。いろいろ大変なんだよなあ、千恵つて。

そんなことをぼややんと思つていたらインターほんの音が家の中心によく響く。

きつと千恵がきたのだろうと思つて、私は鞄をもつてドアを勢いよくあける。

あけた途端に千恵の「あーー」とこづ驚いた声が少しだけ聞こえたような……。

「あ～、ビックリしたあ！」「はしゃぎやがじやない？」

「だつて…夢にみた中学生なんだよー？楽しまないとねー。」

私は鼻歌を交えて軽々と美咲の家についた。

美咲の家は少し花が植えてある。

なので春……今の季節は蝶が花に舞っている。

心癒されるから好きな場面。

千恵が美咲の家のインター ホンをおす。
だけど何の応答もないのでもう一回おそいつとすると美咲がでてきた。

美咲はのんびりしてるので遊ぶ時も遅れることが多い。
そこが美咲の好きなところでもあるんだけど……。

美咲は私と千恵の姿を確認すると安心したように笑んだ。
そして学校の門をくぐる。

美咲の家は中学校に近いから歩いて一分でつぐらい。

羨ましいと思つ。
そんなことを思つていたら美咲が私に聞いてきた。

「「」聞いてる？「」はノートもつてきた？」

ノートへ。どうして？…………あ！そつだ、今日から初授業なんだ。
ノート……いるよね……。

忘れたあー！

そんな私を見て千恵は大体予想がついたのだろう、鞄からノートを一冊取り出し、私にわたしてくる。

「口々口のことだから忘れたんでしょう？あげるよ。一冊だけなら

ら

それは大学ノートで緑色の綺麗なノート。千恵はいつも私を助けてくれる。

千恵は私の親友だ……。

美咲もだけどね！

いろんな話をしていたらもう教室の近くまできていた。

まだ話したいなあ、と思うけどしうがない。

一人に手をふって教室にはいろうとする美咲が私に言った。

「休み時間になつたらいくからね～だから休み時間まで我慢だよお？」

にっこりと笑い、美咲は私の頭をよしよしとなでる。

うう……なんか私だけが幼い子供みたい。

私は美咲にありがとう、といい教室にはいる。はいつた途端、誰かから声をかけられた。

「おはよおー！確か……星野さんだよね？」

「は、はい！？ほ、黒野ですか……」

その女の子は少し長めの髪に綺麗な顔、なんていつか……もてそ
うな女の子。

……この人は柴崎さん。

「」のクラスで少し目立っていたから名前もすぐに覚えた。

「やだな！そんな敬語はいらない！タメでいいよ？」

「人見知りなん……。じゃ、じゃあ」

私は逃げるよに席についた。

柴崎さんはにやりと笑っていたような感じがある。

私はふう、とため息をつく。

こんな人見知りじや、友達をつくるのが難しい。
いや、できるかな？

私はどうしようもなく不安になる。

そんな気持ちのせいかもう先生がいて、朝礼が始まる。

「田直は一番からです！男女ペアでやつてもらつので一番と二
番、おねがいしますね。日誌は前にあります

一番と二番が前にいつたと思ったら二番の女子は笑つており、一
番の男子は恥ずかしそうにしていた。

「げえー！お前とかよ！？」

「何よー？私だつてね、あんたとやるのは嫌なんだからねー。」

仲がいいんだな～。小学校が同じだったのかな？

中学校には違う小学校だつた人が沢山いるから知らない学校からきた人は誰なのかわからない。

……でも、男子と一緒に日直をしないといけないのは嫌だ。

私は……男の子が苦手。

こわくて、乱暴なイメージが強いから。

気がつくと朝礼はおわっていたようで先生の説明が始まっていた。

「日直は日誌を書いてもらいます。書き忘れたりしたらやり直しなので気をつけて下さいね。授業はほとんど受け方の説明だと思います。では頑張って下さいね」

そう言つて先生は教室をでていく。

入れ違いで英語の先生がはいつてきた。

そしてファイルを配つていく。

「そのファイルは授業で配るプリントをとじてもうつためのものです。なくさないようにー配られたら名前を書いてくださいー！」

私はファイルに名前を書く。

そしたら隣の男の子が話しかけてきた。

「へえ、ハロロかあ！いい名前だね」

「あ、ありがと～」

優しげに微笑む彼はなんだか素敵で。すぐにおとなしいな、と分かった。

私と同じ茶黒の髪に少しだけはねてるしつぽ頭。ほんのりと赤に染まっている頬。にっこり笑うとかっこよわそうな顔。全てがととのつた人だ。黙つてもきつとカツコいい。もてるだらうな~。

しばらく先生の話を聞いてチャイムがなる。私はやつとおわったと思い、廊下の方をみる。まだ、美咲達はきてなかつた。どうしようかな……。私、このクラスに友達いないし。知らない人ばかり……。

……このクラスになじまないといけないのに、なじめない……。凄く孤独に感じる。おねがい、はやくきて……。

「…… ハッ ハロー―――聞こえてるー? ハロー―――」

私は顔をあげる。
真琴がいた。心配そうに私を覗き込んでいた。
真琴が私に何の用だらう?

「さつきから美咲がいるの。ハローをよんでもほしいと頼まれて
ね」

「真琴は?誰かと喋らないの?……友達とか」

私がそういうと真琴は苦笑した。

「んー……私、このクラスで仲のいい人いないから。それに一人の方が乐じやない? 女子なんか……裏でねちねち悪口言つしさあ」

それは私も思つた。女子は男子のいるところでは女らしくするけど、裏では下品な人が多い。男子がいないと女らしくないんだよなあ。でも、裏表のない人もいるけれど。本当は、男子より女子の方がこわいのかもしねない。

だから私は男女嫌いだ。

「そ、う……真琴、ありがと。じゃあね」

私は廊下にいく。

美咲達を長くまたせるとなんだか軽く怒るような気がして。

廊下にいくと美咲がふあー、とあくびをしていた。
千恵は私を軽くバシバシとたたいた。

「ココロ、ぼーつとしてるーじうへそつちのクラスは? いい人いる?」

「それがね、気の強い女の子ばっかで。真琴以外苦手かも。……でも男の子では隣の席の人がカツコいい! 優しそうないい人……かな」

私は教室にいるその男の子の話をする。

千恵は羨ましい、とか言つてた。

私はなんでかな?、と思う。

まあいいか。

「今田さあ、クラブ体験だねえ？」「口せどい」を体験しにいくの？」「

え？クラブ体験なんかあつた？

話、きいてなかつた……。

私はうーん、と考えるじぐさをして少しうかんばりクラブがあつた。

「び……美術部は？絵を描くの好きだし。楽そうだし！帰宅部でもいいな」

「そうか～。口は美術部かあ！私も美術部にしようと思つてたんだよね。よししー三人で今日体験しにいこつか！いいよね？」

口、美咲？」

私は「ぐぐぐと頷く。 だつて三人の方がなんか安心するから……。

辛いことも頑張れる……から。

チャイムがなり、私達の声は打ち消されかわりに先生の声が響いた。

またね、と教室にもどつていぐ一人をさびしく思いながら私ももどる。

席につくと隣の男の子が私をじつと見る。

なんだろ、と思いながらも気にしないふりをする。

すると隣から聞こえないぐらの声で「やっぱり可愛いなあ、凄い好みだ」と聞こえた。

なんのことだらう？

終礼をしてすぐに美咲達と会流し、美術部のところへいく。
ドキドキしながら美術室にはいるとツワツワの髪を結った清楚な
女の子がきた。

「体験にきたのね～～あ、この子可愛い」

そういうて私にだきついてきた。
え……なんか想像^{イメージ}と違う。
もつと……控え目だと思つてた。

「こ～～困つてゐるでしょ～～あんたはもつと可愛い子ばかりだきつ
いて～～

奥の方から背の高い美人さんがくる。
なんか……個性豊かな人達だな～。

体験もおわり、帰る時間になつたので千恵と美咲と喋りながら門

に近付くと男子バスケットボール部がまだやっていた。

特に気にすることなく男バスをよけて門をくぐりついた。
あ、男バスって長いので短くしただけだよー。

「きめちまえーー！」

そう叫ぶ声が聞こえた。
私は思わず後ろを振り返り今……ショートをいれた人をしつかり
ととらえた。
するとまるで——時間がとまつたような感覚がした。
私に何がおきたのか分からぬけど……『彼』から目がはなせなくなっていた。
そこにいたのは……あの男だから。

one sided love-2 クラブ体験（後書き）

問題は自覚と前書きに書きました。

それは主人公の「コロガいつ恋をしたか自覚した途端恋になりました。

そのへんではまだまだ自覚はできないんじゃないかなー、と思

います。

one sided love-3 彼の笑顔（前書き）

次話からは夏にする予定です。
すいません、季節外れで……。

そしてココロと棗の絡みがあるかな、と。

全然絡みがないので、二人の絡みが書けるのはある意味貴重なんですよ！

そして重要な人物も少しづつ出て来ています。
ココロの隣席の男の子の名前はかなり考えました！
気に入ってくれたら嬉しいです

大西……。あの男があんな綺麗な笑顔、出来るの？今まで見たことない真剣な顔。

ショートが入り、嬉しそうにしながら友達と肩を組み、ハイタッチしながら喜ぶ君。

何時間していたのだろうか？服は汗でびしょびしょだ。

私は、初めて君の笑顔を見たよ。君でもあんな無邪気に笑うんだね。

そしてどうしてだるい？今、私の鼓動がドクン、ドクン、と高鳴る。

胸がきゅっとしめられた感じがする。
けど苦しくなくてむしろ感じたことのないくらい緊張して、ドキドキする。

感じたことのない、変な気持ち。

なんだろう、この胸の騒ぎは。名前があるならどんな名前？

何の感情？

どうして君から目が離せないの――？

「……『口口口』どうかしたの？誰を見ているの？」

千恵が心配そうに私を覗き込む。

私は恥ずかしくて顔をぱつとそっぽむいてしまう。

千恵はニヤリと意地の悪い笑顔をして、私はなんだか千恵に全て見透された気がして、顔をあわせるのが嫌になる。

「大西を見てたね？あれえ？『口口口』の顔、頬が紅いぞー？」

「そ、そんなことない！暑いだけ！」

暑くはなかつたけれど、今感じた胸の騒ぎはなんだか言えなかつた。とても嫌な感情のよつた気がしてーー。

私は夜も中々寝付けずにいた。

頭では寝ようと思っているけれど大西の笑顔が何度も繰り返し思
い出しては胸が高鳴る。こんなのがつして?
なんであいつにあいたいと思うの?
おかしいよ、こんなこと今までなかつたのに……。

学校でも寝不足だ。千恵からは「大西が気になる?」とからかわ
れるし……。

ため息を軽くして席へカタンと座る。
隣席の男の子はまだ来ていなかつた。

どうしようかなあ、と考えていたら後ろからついつんと制服が何
かに触れる。

予想をしつつ、後ろを見ると予想通り真琴がシャーペンを持ち、
「口つと笑つていた。

「今日の口つと、何か悩んでる気がして。何か役に立てればい
いな、と思つたんだけど……」

真琴は照れくさそうに頬を紅色に染める。 真琴なら言つてもいいかもしない。

真琴は誰にも言わなさそうだしね。 それに真琴なら知つてているかも……。

このわけのわからない気持ちが。

私は真琴にそのことを話した。

真琴はうんうんと分かつたように手を組む。

私は期待をこめて真琴を見る。

その時言つた言葉は信じられなかつた。

「それは『恋』だと思つよ? 分からないけど一日ぼれじやないかな? 一目見て惚れるつていうあれ。見たことない棗の笑顔に惹かれたんだね」

「そんなはずない! だつて……だつて、見たことない人の笑顔だつてあんな気持ちにならないもん!」

私は真琴の言葉を信じられなく、いつも人の意見に流されるのに今回だけは納得したくなかった。

否定したかつた。

真琴はやれやれ、と呆れたように私を見つめ、その目には「まだ認めないか」という意味が込められていた気がする。

私はそんな真琴の瞳から逃げたくて目をそらした。

タイミングよく先生が教室にきてくれて朝礼が始まる。

朝礼が終わると真琴は隣席の男の子と喋つていた。 安心しながら教科書を机に置くと私の隣席の男の子がじつと見る。

そして話しかけ、優しく微笑む。 この人は優しい人だな。

「星野さん、悪いんだけど……教科書忘れちゃつてさ。見せて

くれない？」

私は出来る限り笑顔をつくり、うんいいよ、と頷く。
その男の子はありがとうと笑いながら真ん中に置いてある教科書をパラパラとめくつっていく。 そういえば、私この人の名前知らない。 なんか聞きにくいなあ……。

「槙野 隼人。僕の名前。知ってるかもしれないけど」

先まで教科書にあつた視線が今は私をとらえる。

カツコいい顔がしつかりと私を見て顔が熱くなる。

真剣 そうな瞳。 目を逸らすのがなんだかもつたいないくらい。

私は急に恥ずかしくなり、ぱつと目を教科書に向ける。

教科書を見やすいようにか手が教科書にのつてあり、凄く見やすい。

なんか紳士のように優しい。

他の女の子にもこんなに優しいんだろうな。

何か……モヤモヤする。 今日、変なものを食べたかな？

なんか気持ち悪い感情。 隼人さんは「意地悪しすぎたかな」と

苦く笑う。

どんなことを意味するのか分からなかつた。

隼人さんがどんな気持ちだつたのかも……。

休み時間になると教科書を私の机に優しく置くと次の準備を始めた。

はあ、と悩みがあるわけでもないのにため息をついてしまつ。

心配したのか隼人さんが顔を覗き込む。
すつごい顔が近い！！

「隼人～？何してんのよ？星野さんが迷惑してるじゃん！」

「柴崎？……あ、ごめん！迷惑だよね」

柴崎さんは隼人の机に手をつき、まるで隼人さんを狙つているような感覚。

仲が良いのかな……。柴崎さんは隼人の腕を引っ張り、廊下へ出て行く。

「またかあ～！柴崎が隼人狙つてるよお～！いくら小学校が一緒で友達だからってえ！隼人は皆のものなんだからあ～！」

後ろの方で何か叫んでる人がいるけど、きっと隼人が好きなんだろうな。

柴崎さんと隼人さん、友達だつたんだ……。
だからあんなに親しいんだね。

真琴が私の手をひいて、机に座らせる。

私はどうして真琴がそんなことするのか分からず、真琴を不思議そうに見る。

真琴は私の肩にそつと手をおき、小声で私に伝える。

「……槙野は女子から凄い人気があるの。だから『口口口、気をつけて。女の嫉妬つてこわいから』

少し険しい顔。

どうしてそんな表情をするの？ 気をつけるって何を？

そんなの知らないよ。隼人さんが人気だろうと私に関係ないも

の。

それに隼人は誰にでも優しいからいいんじゃないかなって思う。

ほんやり考えていたら少し変な笑い方をした女の子が教室に入ってくる。

柴崎さんだ。柴崎さんの隣には隼人がいて楽しそうに笑っている。柴崎さんはチラリと私を見てニヤリと笑い、隼人の腕に手を絡ませる。

付き合っているみたい……。

女子のほとんどが悲鳴をあげている。

隼人は「どうしたの?」というように柴崎さんを見つめる。真琴はギュッと強く拳を握り締めていた。

私は今日も美術部にいく。

今日は真琴もいた。

フワフワの先輩は私が来るのを確認すると必ずだきつく。

そのたび美人さんがとめにくるんだけど……。

そんなやりとりをしていると千恵が「男バスがいるよ?見ないの?」と笑う。

私は千恵を軽く叩くと美術室の窓を見る。そこからは男バスがシートをしようとして練習していた。

私はなぜかあいつが見たくなり、他の男バスの男など全然見ず、あいつーー大西を見る。

シートをはずすと悔しそうに強くボールをとり、シートをすると以前のような笑顔を見せた。

私はまた胸がきゅっとしめられたようになり、高鳴る。私はこれが限界で大西から視線をはずす。

すると千恵が「あれ、隣席の男の子じゃない?」と私に知らせる。千恵が言つとこらを見ると隼人さんがいた。友達と楽しそうに話しており、出番がくるとボールを投げる。見事ショートする。

「きやあー口口口、あの男の子カツ口こいよ!」

千恵がわあわあと騒ぐ。

隼人さんも男バス体験してたんだ……。

確かにスポーツしてるとこらはカツ口いい。

足もしゅつと細いけど筋肉はついており、前から運動してたんだろうな……。

きつと足もはやいだらう。

私が窓を見るのをやめようとすると隼人さんが少しだけこちらを見て、手をふってきた。

あまりの驚きに私は混乱し、千恵はきやー、とはしゃいでいる。私の顔はみるみる熱くなり、きつと真っ赤になつていると予想がつく。

隣にいた千恵がクスクスと笑い「口口口は誰に惚れているのかな?」と面白がる。

私はまだ隼人さんがこちらを見ているので恥ずかしくなり、窓から離れる。

でも顔が熱いのは消えない。

いくらクラスメイトで隣席だからってそんなことしなくていいのに……。また女子がヤキモチやくよ?」

私はなんだか早く学校から出たくて小走りで門をくぐる。すると後ろには隼人さんが！！

「星野さんだ！ 美術室にいたけど美術部に入るの？」

「あ、まだ分からぬかな。今のところは美術部なだけで「隼人さんの隣にいる友達がジロジロと私を見る。な、なんだろう？ 私に何かついてるかな？」

「この星野つて奴、隼人の彼女？」

「は、はあ！？ 何言ってんだよ！？ 同級生で隣席なだけで！ 彼女なんかじゃない！ そんなこと言つたら星野さんに迷惑だろ！」

隼人は顔を真っ赤にして否定する。

別に迷惑じゃないけど…… そんなに全力で否定しなくてもいいと思つんだけど……。

でも彼女がいるなんて噂をたてられたら女子は嫉妬するし、むしろ隼人が大変な気がするなあ……。 彼女、出来るのかな？

「う、うめんね。 こいつに後でいろいろ話すから。 じゃ、また

明日」

その友達の背中をおし、私と反対方向に戻る隼人さん。もしかして私に声をかけるためだけに反対方向なのにきたの？ どうして？ 時間の無駄なのに……。

隼人が別れ際にみせた笑顔は無邪氣で綺麗でかつこよくて……。

また、胸が騒がしく高鳴るんだ。

隼人くんは個人的に凄い好きです

沢山ココロと絡ませてあげたいのです……。

隣席のお話が好きで蜜柑色でも書いてしました……。

「君と繋がる」だけにしようと思っていたんですけど。

とりあえずほんわりした雰囲気を出したいなあ。

o n e s i d e d l o v e - 4 相談（前書き）

一ヶ月放置……。

不定期更新なので遅れる場合もあるのであたたかい田で見て下さいね。

一ヶ月放置はなんとかしないよつこします！

あの日から数ヶ月が過ぎてもう真夏。

春とは違ひ太陽の光が強くなり、暑くなる。

夏が苦手な私は早く秋が訪れたらいいのに、と思つ。でもよく「夏は爽やかな恋の季節」と誰かが言つてた。どういう意味か全く分からないな。

私は手に握り締めているスケッチブックを鞄にしまい、美術室に向かう。

「あら～ ハロちゃん、来ててくれて嬉しい 」

「来るのは当たり前じゃないですか。美術部に入部したんですから」

私はもう何か月か前に美術部に入部した。楽しそうだから、というのもあるけど一番の理由は先輩に頼まれたから。

「美術部がこのままじゃなくなっちゃうーお願い、入つてほしいの！」と頼まれ断れなくなつた。でも千恵と美咲も入つてくれたからいいんだけどね！

「もうすぐ五時かあー。そろそろ帰る準備でもしようか～」

フワフワの髪の先輩は持つていたスケッチブックをなおし、鞄を机に置く。

私もすぐに鞄を机に置き、先輩にさよならと言つた。

今日も部活がある。

勿論楽しいのだが何か物足りない。

そんな気になる。

なんとなくだけど不意に教室に戻る。

そして隼人さんの机を指で軽く触れ、なぞる。

誰もいないから出来ただけで誰かいたら絶対に出来ないことだ。
そんなことをしたら隼人さんのファンの女子に殺されるのではな
いだろうか。

……こわい！ 考えただけでブルブルと震えちゃうよ……。

「……ほ、星野さん？」

慌てて振り返ると少し息を荒くした隼人さんがドアのところにた
つている。

え。み、見られた！？　は、恥ずかしいーーー！

「何してるので？そこ、僕の席なんだけど」

近くに寄ってきた隼人さんの声に私は震えてしまつ。

お、怒つてる……かな？

ど、ど、ど、じょ、うー！　あ、謝らなきや！

「い、い、めーーー」

「え？ なんで謝るの？ 僕の席に触つてただけなら全然いいけど
？ それに忘れ物を取りに来ただけだし」

隼人の言葉に驚き、私は隼人さんを凝視する。すると机の中からタオルを取り出し「これ、部活にいるんだよ」と笑う。

「そういえば隼人は何の部活してるんだろう？」

「何の部活してるか気になる？ そんな顔してるよ。……僕はバスケ部！」

「バスケ部かあ……体験してたしなあ。

でも隼人は運動神経抜群だからサッカーでもよかつたのに。

「バスケ部に入ったのはね、ライバルがいるからなんだ。名を棗。大西 棗。棗は運動神経抜群なんだよ？だからバスケ部のエースだよ。棗とはいライバルになれそうなんだ。あいつも僕のことエースと思っててライバル意識されてるしね。それに……棗は恋敵だし」

「ふえ？ 最後に言つた言葉、よく聞こえなかつた。

小さく呟くように言つたから。

「なんて言つたの？」と聞くと隼人は柔らかい笑みをして「星野さんは知らなくていいよ」と言うから余計に気になつて。

「星野さんは部活は？」と優しく問うから私もつられて笑顔になつて「美術部だよ」と言つた。

「楳野さんは大西と仲が良いんだね」

「……まあ。あのさ、星野さん。僕のこと『楳野さん』じゃなくて隼人つて呼んでもらえない？ その方がなれてていいんだ」

私は少し戸惑つたものの、他の人も呼び捨てだしいいかと思い、隼人さんを隼人と呼び捨てにすることにした。

隼人、と呼ぶと本当に嬉しそうに彼が笑うから。

私も幸せな気持ちになつてまた彼の名前を呼んでその笑顔が見たくなる。

「あー。もう戻らないと先輩に怒られるな。またね、星野さん」

君が手を振るから私も振替えして。

君が教室から出て行くと私は顔が熱いことに気が付いた。

見られてないかな？

見られてたらどうしよう？ は、恥ずかしいよ……。

私は鞄を見て部活のことを思い出した。

あ、行かなくちゃ！ 先輩がきっと顔を紅く膨らませて「遅いよ

！」と怒りそう。

先輩はそんなことをしても可愛いから羨ましいな。

廊下を歩くと曲がったところに先輩と見知らぬ男の人人が楽しそうに話していた。

先輩は俯きながらも必死に喋つているので可愛い。

先輩はその男の人と別れると私にこりと微笑みかける。

「見られちゃつたかあー。『口ちゃんなら言つてもいいかも
う。わ、わた、私ね、あの人の方が好きなのー！』

きゅうと恥ずかしそうにはにかみながら先輩は小さな唇を動かす。でもね、と悲しそうにも笑う。

「あの人は私を見てない。本当は私なんかより、あの娘の方がいいの」

先輩が見るのは美人さんだ。

先輩は『片思い』をしているのかな。だからそんなに切なそうに笑うの？

先輩の横顔は千恵や美咲の横顔とよく似ている。

千恵達も、好きな人のことを話すと嬉しそうにするけど、でも本当は深く悲しい笑顔。千恵も美咲も言っている。「アイツは私じゃなくて他の人を見ている」と。

先輩もそう言つてる。

「相談が、あるんです」

「ん～？ 私で良ければなんでも聞くよ～？」

私はその場では言ひにくいので裏庭に出た。

先生が花が好きらしいので育てている鮮やかな花が沢山。中でも好きなのは向日葵。

夏限定で先生が育てているんだ。花言葉は『あなたを見ている』。

私はその向日葵に近寄り、すぐ側でしゃがみこんだ。

「先輩、恋つてなんですか？」

先輩は驚いたように目を見開き、口を開けたままにする。

私は苦笑すると「恋がよく分からいんです」と付け加える。

先輩も向田葵に近寄り、向田葵を優しく見つめる。

「そりね、向田葵のよひ。いつも彼を見つめている、切ないくらごじうじゆうもなく想ひ。……喋れると嬉しくて、ドキドキして。でも他の女の子と喋つてると嫉妬しちやう。案外複雑ね、恋する女の子は」

先輩はにこにことしながら向田葵を撫でるよつに向田葵の上に右手を翳す。

私は先輩が幸せなつに話すから、もつと幸せになつてほしい。そして私はきつと酷いことを言つた。

「恋なんてしなければいいんじゃないですか？」

「そつ思うわよね？でも無理なのよ。恋は気付いたらしているもの。恋したら自分を成長させてくれる。強くさせてくれる」

先輩は少し表情を曇らせた。きつと私が無神経だから。先輩に失礼なことを言つたから。

恋をしたら強くなれる？ 分からぬけど、傷つくのは恐い。

「ハハハもいつかするよ。したら応援頑張るよ。恋は素敵だつて言つよ」

私には、そんな経験できますか？

先輩のように優しく相手を考えられる、優しい人になりますか？

私は相手のことを本気で想えるのですか？

先輩はその人を好きになつて悔いはないのですか？

そう聞こうと思つたけれど、私は自分で確かめたかった。

私にもそんな人は出来るのか。

それに本当に先輩があの男の人を諦めたら聞きたい。

「先輩は後悔しませんでしたか？」

そして先輩はなんて言つのか。

なんて、言うのかな……。

先輩は「ココロちゃん、部活に遅れても大丈夫だから」と私の肩を優しく叩くと裏庭には私だけになつた。

「星野？」

私はくるりと後ろを向く。

するとそこには……アイツが。

「なんだよ、んなところで」

私はアイツ、大西を見る。

大西は体操服を着ていて、片手にはタオルと水筒があつた。汗を凄いかいていて髪の毛が首に張り付いている。
確か……大西もバスケ部だよね。

部活じゃないの？

「部活はどうしたの？まさかサボり？」

「そんなことしねえよ。今は、その……休憩だ！」

「なんだ？」

私は少し頬が熱くなるのを感じながら大西に笑いかける。
そういうえば大西と喋るのは何年ぶりかな。

あの日以来まったく話すのもなくなつた。

あれは私が悪いんだって分かっているけれど。

「でもさ、星野と喋るの俺がフラれてから全然喋ってねえよな？俺が星野に告つて星野にフラれて……あの時はズタズタだつた」

やつぱり大西も覚えてる。

私は何も言えなかつた。これ以上言つたらまた大西を傷付けてしまいそうで、恐い。

「棗！お前部活サボつて何やつてんだよー？なかなか来ねえから心配したんだぞ？」

隼人が来て棗を軽く叩く。

え？やつぱりサボり！？

棗は隼人に引っ張られどこかに行つてしまつた。

私はまだ美術室に行けなかつた。

だつて、きつと顔が紅い。そしたら千恵にからかわれてしまつ。

「口口口～？こんなところにいたんだねえ～？」

あ。誰の声かはつきり分かつた。

私は声の主——美咲に抱き付く。抱き枕のよう。安心感を求めるように。

美咲は「どうしたの～？」と笑いながら聞く。そしてよしよし、

と私を抱えるように抱き締めかえしてくれる。

私は美咲に思い切って聞いてみた。

「七年も想えるのは本気の恋なの？」

美咲は「うん」と首を左右に振ると急に真面目で真剣な表情になる。

「そんなことないよ。何年も想い続けたからって本気の想いとは限らないよ。一瞬でさめちゃう恋もあれば一瞬で本気になる恋だつてある~」

驚いた。

だつていつもは幼い美咲がしつかりと自分の意志をもつていたから。

美咲はしつかりしてなくて千恵がいないとダメと思つていたけど全然違う。美咲はちゃんとしつかりしてるんだ。

しつかりしてないのは私の方なんだ。

私もちゃんとおどおどしないで自分の意志をもたなくちゃいけない。

美咲のように、優しく見守るような、そんな強さを。

「大丈夫だよ。恋は叶わなくても相手の為に出来ることが絶対にあるから」

美咲は「お見通しなんだから」とくすくす笑うけど、お見通しつて何が!?
ま、まさか……美咲も思つてるのかな?
私が大西のことが好きだつて……。

「わ、私は恋なんかしてない!」

「あれえ～？ 私、恋なんて言つてないけど～？」

は、はめられた！

美咲も千恵に似てきて……私が困つてゐのを楽しんでる…！

……うー、ひどいよ、美咲も千恵も。

「じゃあ、部活始まつてゐるから早く戻るよ～？先輩心配してたんだからね～？」

美咲が私の手をひいて早足で階段を上つて行く。
途中こけそうになつたけど美咲の優しさが嬉しくて。
私は美咲のよつにしつかりするよつとするからね。
友達を、支えられるよつ。

o n e s i d e d l o v e - 4 相談（後書き）

蜜柑色の更新ペースは月1更新です。

早かつたら月に何回かは更新出来ると思いますが。
わっていますがすぐに更新しません。
5話は書き終

探検隊の方もあるのでバランスを崩さないよう心していきます。
蜜柑色、次は六月更新かなあ……。

蜜柑色の更新日は28日か29日にしおりと毎回あります。

一ヶ月に一回更新で決まりですね……。

でも更新日は守りたいと思います！

読んでくれている皆さんも更新日の28日か29日に読みにきて
くれると嬉しいです。

「 ハロー。 次、 体育だよー 」

真琴が体操服を持ちながら私に言う。

私は昨日のことでもんやりしていた。

美咲や、先輩。 皆強いつてこと。

私はそうだね、と相槌をうち鞄の中に入れっ放しの体操服を取り出しお、長く茶色が少しだけまざつている髪の毛をポニー テールに結う。

長い髪はいろんな髪型にアレンジ出来るから好き。 でもくくつてないと邪魔になることもあるからせめて体育の時だけ結つようとしている。

「あ、 そういうえば今日の体育は四組とだね」

「…………はい？」

ぽかんとする私に真琴は知らないの?、と首を傾げる。
その時にさらっと揺れる髪はなんて可愛い仕草なんだろ?。

「なんかね、時間割りが変わつて四組になつたよ。 四組となるのつて初めてだよね」

真琴はうーん、と伸びをする。

私は四組に誰がいるのだろ?と思つ。

千恵、美咲、大西……。

お、大西! ? なんで出てきたの! ?

片手に持つているタオルを落としそうになりタオルを持っている

手に少し力をいれる。

「あ、暑いからお茶とタオル持つて行かなくちゃ。待つててくれる？」

「うん。美咲達のところに行つてるね」

そう言つと四組に向かう。

窓から覗くと千恵が机の中を必死に探つてゐる。ビラしたのかな？

我慢出来ずドアノブをきつく握りガラガラと開ける。

千恵はびっくりしたように固まり、淡く笑む。

「来て、くれたんだ？美咲は先に行つた。私も水筒を取つたらすぐに行く」

だから机をいじつてたんだ。

ふと机の上を見ると制服が綺麗に畳まれてゐる。ブレザーは椅子にかけてある。

千恵は私のタオルを見て、それは？、とタオルをじつと見つてゐる。

「このタオルは汗ふきだよ。夏は汗かくからね」

「へー、可愛いタオル！桜桃の柄だ。口口口らしい、可愛い柄」

千恵はふんふんと鼻歌を歌いながら水筒を片手に行つて、と笑いかける。

あ、真琴を待たなくちゃ！
でもまだいるかな？

「ハハロ、待つてくれたんだ！千恵、だつけ？宜しくね？」

ひよこ、と小動物みたいな真琴が顔を覗かせてはにかむように笑う。

千恵もにこりと笑うと宜しく、と言いつワインクをおくる。

活発な千恵は見た目とギャップがある。

男っぽいな、って思つたら意外に女の子らしい。

そこがお姉さんの存在なんだけど。

「ハハロー！ほーっとしてない！遅刻するよー！」

「あわわ……。行くから！待つてーー！」

千恵が軽く頭をポン、とたたく。

私は急いで千恵と真琴の後ろについていく。

2人は気が合つのか話が弾んでいる。

私には分からぬ、いろんな話。

あれこれしているとグラウンドに着き、皆並んでいた。

これは……遅刻だ。

急いで並ぶとそのままマラソン。

少し息を切らすと先生が満足したように笑顔。

「よしー走ったことだし、今日の体育はサービスして1500メートルを走るぞー！タイムはちゃんと覚えろよー！」

先生……。それサービスじゃありません。

タオル持つてきて良かった……。

でも走るのは嫌だな。 そういうえば大西の走り……見たことないな。 見て、みたい。

「隼人ー。棗いるぜ？ライバル対決だなー。どっちが速いんだろ
うな」

「プレッシャーかけないでほしいんだけどな。ま、対決つてそ
んな大袈裟なものじゃないけど」

男子の列から冷やかしにも似た声。

隼人は呆れたように笑う。

大西も隼人の近くにやつてきて肩に手をおく。

隼人もにやり、と楽しそうに笑う。

そんなに楽しみなのかな。ライバルと意識しているからその人
と勝負するのは嬉しいのだろうか。

私には分からぬ、ライバルの存在。

すぐに走る準備をするともういっせいにスタート。

後ろには千恵がいてくれて励ましてくれる。
で、でもしんどい……。

ゴールして、タオルで汗を拭うと隼人と大西は地面に座つて、胡
座をかいている。

そしてお茶を飲みながら笑い合つていた。

「あー。まさかまた同じタイムでゴールするとはな。やつぱり
ライバルだ！隼人は、俺のライバル」

「嬉しいこと言つてくれるね？僕のライバルも棗しかいないよ

そんな会話が聞こえる。

2人は信頼してる。

友達だけど、ライバル。 そんな関係なんだろうな。

「おしーもー一回勝負しようぜー！」

「うーん、いいけど先生が許してくれないとダメじゃん

隼人は冷静。 逆に大西は落ち着きがない。
モテるのはきっと隼人の方だろう。

私なら隼人の方がいい。 大西はなんか……無理かな。
2人は先生のところへは行かずにそこらへんのグラウンドにスタートラインをつくる。

そして次の瞬間……走った。

綺麗なフォームで走り、同じぐらいで横に並んでいる。
隼人さん、速い！

でも……目が追っているのは大西^{アイツ}でーー。

「こらー勝手に遊んでんじゃねえ！」

先生が気付き2人は途中で走りをやめる。
もう少し、見たかった。
君の、その走りを。

「へえーカツコいいじゃんーあの、四組の」

柴崎さんがくす、と笑う。

大西のことを言つてているのかな？

そんな不安に一瞬戸惑つ。 どうして私、こんなに不安になるの
……。

別に大西に惚れた人がいても関係ない。

アイツが、誰かと付き合つたつて……私には……。

「あー、あれは大西 栄 だよ。柴崎さんに似合わない。平凡すぎるよ、棗は。柴崎さんは槇野 隼人 と似合つよ」

四組の女子がため息1つ。

柴崎さんはふうん、と咳くとこつちに来て私の目の前でしゃがむ。す、凄い綺麗で整つた顔が私のすぐそこに……！
男子なら一瞬で心を奪われるんだろう。

「ねえ、星野さん。大西 栄 と隼人、どっちが好み？」

どうしてそんなこと聞くの？ 分からないよ。
私にはそんな話する必要ないでしょ。

柴崎さんがどうしたいのか分からぬ。
言つた方が、いいのかな……。

「うう んと…… おお、…… 隼人」

大西と言いそくなつて口を塞ぐ。
勘違いされると嫌だから。
アイツに気があるなんて思われたら、最悪。
だから隼人とした。
ごめんね。

「そうかあ。隼人紳士的だもんね！私つてカッコいい人より、
どこにでもいそうな平凡な人がいいのよね！だから私は大西 栄
が好みかもね」

柴崎さんの言いたいことはそれだけ？

なら、他の人に言えぱいんじやないの？

私だつて聞いて嫌なことつてあるんだから……。 柴崎さんは声を出すとまっすぐ迷いのない足取りで大西の前に行く。

そして笑つて話しかけている。

「棗だよねー！ 初めまして！ 六組の柴崎。 もつきの走りかっこよかつたじやん！」

「俺のこと知つてんだ？ 初めましてなんていらねえよ。 柴崎、か。 ありがとな」

照れくさそうに大西が笑う。

柴崎さんは、積極的だ。 気に入つたら手に入れようとアピールすると聞いたことがある。 それはきっと大西を気に入つたということになる。

チャイムが鳴つたので重い足を引きずるようにして教室に戻つた。 あとから真琴達に心配された。

大丈夫だよ、と笑つて誤魔化すけれど……。 今感じてるもやもやはきつと気のせい。

気付いちゃだめ。

この感情が何なのか、気付かないふりをして心の変化に目を瞑る。 それが今の私に出来る、卑怯なやり方。

帰る時間になり、四組で2人が来るのを待つ。 真琴も一緒に帰りたかつたけど別に帰る人がいるみたい。

なら邪魔したらだめだよね。

だから真琴と一緒に帰ろう、と言わなかつた。 言つたら邪魔してゐるから。

私は待つてゐる間暇だつたので窓からグラウンドを見る。 サッカー部か陸上部か知らないけど何人か走つてゐる。 私も部活したいけど、今日は活動日ではない。 だから大人しく帰るしかない。

「星野さん？ あれ、四組に待つてゐる人がいるの？」

声のした方を反射的に振り向くと隼人がいた。 体操服を着ていて、今から部活があるのだろう。 水筒を手に持つてゐる。

「うん。 今日は部活がないから友達と帰るの。 隼人は今から部活？」

「そうだよ。 夏に運動部は走り回るから辛いんだ。 吹奏楽部とか美術部はクーラーのきいてる部屋にいれていいいなあ」

私は思わず笑つてしまつた。 こんな暑いなか毎日のように大西と走り回つてゐるのかな。 そう思うと笑つてしまつ。

隼人も柔らかな笑顔を浮かべてゐる。

「じゃあね。 遅れると先輩に怒られる。 あ、今日雨降るかもよ。 気をつけてね」

隼人は階段を2段飛ばしでおりていく。

ちょうど四組のドアが開き、ぞろぞろと出でくる。 千恵が怒つたように大西と言ひ合つてゐた。 こうこうといふは

小学校の時から変わらない。

「棗……」

ふとアイツを呼ぶ声がして大西の元へ駆け寄つた女の子——柴崎さんを見る。

体操服を着たまま。
この人も運動部だ。

「ね、一緒に行こうよ！私、女バスだしさあ！近いからいいでしょ？」

「んー。断る理由、ないしな」

柴崎さんはやつたあ、と喜んで顔を綻ばせる。2人は仲良く私の前を通り過ぎて行く。

そんなこと、気にしない……。

大西は、誰のものでもない。今は。

「もーー！大西め！綺麗な子と幸せそうにして……□□□？大丈夫？」

「…………何が？わ、私は元気だよ。心配しないで」

作り笑いを浮かべ、窓をふと覗く。
するとさつきの晴れやかな天気とは比べられないぐらい雨が降つていた。

「傘、持つてない」

そんな千恵の話をすら聞いていた私。心は胸に濡れていった。

「口の心情はぐらぐら揺れます。

幼い子供じゃないんですが「恋」が分からず迷ってしまいます。

柴崎さんは……もう分かりますね（笑）

隼人も分かるんじゃないでしょうか？

秋のお話、細かく設定中です。

one sided love-6 2人の距離（前書き）

サブタイトルは関係ないかもしません。

さて、次回から秋話ですよ！

早くすいません！秋話も3話ぐらいで終わります。

だいたい3話を日安に季節を変えていきます。だから春も夏も3話で終わっていますね。

もつと長くかけたらいいんですがサクサク進んだ方が読者様には読みやすいのかもしれません。

私は鞄を頭の上に乗せて落とれなこよつと手を添える。
その状態で雨の中、走り中。 千恵達を待つていて気がついたら
降つていたもんだから。 傘、皆持つてないのでこつするしかない。
寒いし、濡れるし……。 風邪ひきやがい……。
千恵がちらりと私を見てため息。
どうしたんだろう?

「ハハロ、本当はもやもやしててたでしょ?」

「してない…そんなことない…」

もやもやしててるんじゃない。

胸の奥がさつきからイライラする。

なんて、いうんだね……。

何か、分からないけど見たくないものを見たような、そんな感じ。
何を見た? 悪いものなんて見てない。

「まあいいけど。でも、忘れないで。私はハハロの味方だから

「ね

千恵はいつものように優しく話す。

私は……強くなるつて決めたのに。

イライラしてるからつて友達にハツルたりなんていけない」と。

「ごめんね。千恵。

私は支えられてばかり。なら、私から恩返ししなくちゃ。

「じゃね。辛くなつたら電話でもしておいで。家に来ても私は

全然大丈夫だからねー

「ありがとー……『めん、千恵……』

泣きそうになるのを必死に押さえて言葉を紡ぐ。泣いたらまた迷惑かけてしまう。

だから2人の前では絶対に泣きたくない。

意地なかもしれないね。

2人と別れ、家にフラフラと帰る。

そしたら、誰かが家の近くのところに誰かが蹲っていた。声をかけようとして肩に触れるごびくり、と震えた。何かに怯えてるよ! 顔を覗くと……あれ? もしかしてこの子は真琴?

「真琴なの? どうしたの?」

その子は顔をパッと上げる。あ。やっぱり真琴。でもいつも顔じゃない。

目は赤くなってるし、涙のあとのようなものが1つ。

私が肩に手を添えると瞳の奥が揺れた。

泣くのを我慢してる? 目は潤んで今にも涙が零れそう。

「真琴、具合悪いの? 道路でこんなことしてたら迷惑になっちゃうから……とりあえず私の家に来る?」

真琴は反応しない。

ほつとけないし、家にいれるしかないよね。1人で泣いてたのかもしれない。

なら、私は傍にいてあげたい。真琴の不安や悲しみを支えてあげたら。力になれたら。真琴を擦りながらエレベーターのボタンを押し、待ってる間ハンカチを差し出す。真琴は震えてる手で

握る。エレベーターには人がいないから良かつた……。

家の鍵を開け、真琴を部屋の椅子に座らせて落ち着くよいつことを

茶を出す。あ、雨だったから私達、びしょ濡れだった……。

タオル、持つていかなくちゃね。

窓を見るとますます雨が激しい。

真琴のところに戻るとお茶をおいてタオルを渡す。

「悪いよ、こんなの……お茶だつて……」

「いいよ？ 真琴は友達なんだから。気にしないで。ほっとけないもん」

両親は仕事だから。やつひつと真琴はゆっくりお茶を飲んで「おこしこ」と落ち着いたように涙を拭き取る。

「何が……あつたの？」

はつきり聞いたらダメだけど。

でもそうしないと聞けない気がしたの。

隠すつていののかな。よく分からぬけど。

真琴は黙る。言いくらいのか、言いたくないのか。

言いたくないなら聞いた私が悪い。

「過去のこと思い出した。『あん、私長面するのはよくないからもつ帰るね』

真琴は逃げるよつに玄関に行き靴をはく。あ、真琴つて傘ないよね？ 今、どじやぶりだけど……。

貸したほうがいいはず。雨の中帰つたら風邪をひくからね。

傘を見ると私のお気に入りの花柄がモチーフの可愛い傘がある。

クローバー、椿、秋桜、梅などの四季の花がちりばめられていて
華やか。

真琴を引き止め傘を渡そうとすると真琴は暫く傘を見つめ苦笑。

「可愛い傘だけど私には可愛すぎるかな……。透明なのない?
シンプルなの」

「ん。そつか。待つてね……」

傘を見ていくとシンプルが少ない。いや、ない。

……しうがない。透明はないけど全体が青ならある。

これでいいのかな? 真琴に似合ひの色は分からない。

小動物みたいだから……自然色。

その色が似合う。

私の勝手な想像でよく間違えるけど。

「青? わあー。シンプルでいいね!」

嬉しそうに真琴はきやつときやつと笑う。

真琴はパン、と音をさせて傘を開くと雨の道を帰つてくる。

その時の後ろ姿は寂しそうに見えた。

錯覚……かな。

とりあえず私は宿題でもしう。数学とか苦手なので分かるようになければ。

得意とすれば社会だらうか。いや。それは小学校の話。
社会は難しくなるだけ。得意科目……ないかも知れない。
それはそれでだめだらうなあ。

宿題したらお風呂に入ろう。今入つてもいいけど宿題で手が汚
れてしまつ。

テキストを出してみると……「うん?」

あれ、なんだこれ？ こんなのが知らない……。

計算式？ うーんと……。…………やめよう。 明日美咲に聞

こう。 美咲、あんなにゆっくりでも賢いからなあ……。

羨ましいなー！

お風呂入ろうと。

私はシャワーを浴びて冷えきった身体を温めそのまま布団に倒れこむように寝転ぶ。

眠い……。 少しなら寝てもいいよね……？ 少し、だけ……。

「んー……。 何か眩しい……」

起き上がって窓を見る。 太陽が出ていた。 私、あれからずつと寝てたんだ……。

太陽の光は眩しい。 思わず目を細める。

「ゴゴロー！ いつまで寝てるのよ？」

お母さんが朝食を作りながら叫ぶ。

制服に着替え、味噌汁を飲み、ご飯に鰯のふりかけをかけていた

だぐ。

うん。 美味しい。

…………ん？ 待つて。 私、日直だった……？

「ご馳走さまー！ 行つてきます！」

小走りで学校に向かう。 隼人、来てるかな？ 仕事してたらど

うしょー……。

隼人だけにさせるのは酷い。 日誌を書くのは私でいいかな?
男の子って書くの嫌がるしねえ。

「あー。 星野さん、 来た」

隼人がいつもの笑みをして花瓶の水をかえていた。 男の子って
こんなこと嫌がると思ってたけど……違うのかな? それに嫌みな
く似合つてる。 隼人は何をしても似合つから。
カツカツいからかなあ。

「ごめんね。 忘れてた!」

「いいよ。 僕も忘れてたしね」

え! ならなんで……? いるんだろう?
たまたま早く来て思い出したとか?

「朝練だよ。 朝練があつたから早く来れたんだ。 で、 思い出し
たわけださ」

なんだあ……。 朝練かあ。 私とかにはないから分からないけ
どきつと大変なんだろうな。 朝は何時起きなんだろ……。
考えただけでゾッとするよ。

私は教室に鞄を置いて黒板を綺麗にする。 あとは…… 口令とか
日誌ぐらいかな。

隼人の仕事も手伝いに行こうっと。
さすがに恥ずかしいと思うから。
教室を出ると笑い声が響く。 この声は誰かすぐに分かった。
——柴崎さん。

柴崎さんの笑い声は癖があるから分かる。でも柴崎さんはどうしてこんなに早いの？特に用事もないはず……。笑い声のした方を見ると4組の前。そこには小さなシルエットが一つ。誰のか分かった。朝練。4組。小さい。大西しかいない。

「棗……それはダメでしょ。バカじゃん」

「るひせえなー。仕方ねえじゃん！ならどうすれば良かつたんだよ？」

何の話……？聞きたい。2人が何を話しているのか。気になつて仕方がないの。こんな気持ち、嫌だから。聞いたところはどうにもならないかもしないけど、それでも……。

「うーん。あんまり話したことないんでしょ？なら女友達としてすればよかつたのよ……私じゃダメ？……みたいな冗談を言える関係にね」

「ふうーん。柴崎はそんなふつに言われるのがいいのか？」

柴崎さんは顔を少し紅くさせ、皿を泳がせる。少しだけ手をパタパタと動かし何かを伝えようとしているのは見て明か。

「わ、私は…自分から言ひ派…告白は自分が言いたいの！」

「そーか。俺はなかなか言えねえよ。フラれたら最悪だし？」

告白……。私もしたことがなかつた。

ううん、好きな人がいないからする機会もなかつたんだ。好きな人が出来たら嬉しい……？

告白したい……？

そんな想い羨ましい。

「星野さん、そんなところでなんで蹲つてているの？」

横を見たら心配そうに私を見る隼人が映る。私は立ち上がり出
来るだけ笑顔を作つて「何でもないよ」と話す。隼人はそれでも
心配のまなざしをやめなくて。言つたことを信じてないな。
そこが隼人の優しさでもある。他人を心から心配して。この
人は誰からも好かれる。そう思う。花瓶をそつと窓側に置いて
窓を開ける。空気の入れ替え。

皆が来る前にはやはり綺麗にしておきたいものだ。

「そりいえば美術部つて文化祭何を体育館に飾るの？」

油絵のことかあ。もうすぐ秋だから文化祭には体育館に絵を飾
ることになつているんだよね。私はまだ油絵を完成させてないけ
ど先輩達の絵は上手い。さすが部長さん。
でも何を飾るか教えたらつまらない。
文化祭まで秘密。

「秘密。文化祭で見てほしいから」

隼人はそうだね、と苦く笑う。苦く笑う理由は分からぬけど
私が気にしてたらだめだろ。筆箱を取り出してノートに絵を書
く。スケッチブックがないときはノートに書くようにしてる。
それはそれでいけないなあ……。
ノート、すぐに減るし。すると隼人が後ろから覗き込んだ。
びっくりして持つていたシャーペンを落としそうになる。
隼人の整つた顔が近くにあると心臓に悪い。知つててやつてる

なら性質^{たち}が悪い。

「星野さん、頼みがあるんだけど、いいかな？」

「出来ることないうじよ？」

「こつこつ笑いノートをとる。
そして自分を人差し指で顔のあたりを指すと「僕を描いてよ」と
言ひ。え……？ びひして？」

「星野さんの絵つて柔らかいけ。優しいつて言ひのかな」

ノートをペラペラとめくり私が今まで描いた絵をゆっくり見てい
く。褒められた……。優しいなんて言われたの初めて。
未熟だ、とか荒削りつてよく顧問の先生にも言われた。
だからずつとスケッチしてたの。時間があつたらいつでも。
そんな絵を、好きだと黙りてくれる人がいる。もつたいなくて
泣き出しそうになるよ。

「描いてくれますか？」

わざとらしい言葉に思わず笑う。

私の返事を分かつてているんだろうね。君は。だからそう言つん
でしょう？ 私も嫌ではないよ。むしろ嬉しい。君を描けるな
んで。勉強にもなるから、ありがとつ。

「油絵が、終わつてからでいい？ 今は油絵に集中したいから」

「いつでもいいよ。油絵、楽しみにしてる」

そうだね。君に喜んでもらえるよつに良い作品になるよつ、頑張るよ。だから待つてね？君の柔らかな笑顔を描けるまで。

one sided love-6 2人の距離（後書き）

棗との絡みがなくてすいません！

なんだか棗より隼人の方がココロと恋愛関係になりそうですね。
今のお話を展開で例えると起承転結の「起」なんですよ、まだ。

「承」の部分はまだ先……。

ココロと棗の絡みはいつなのか？

それは……まだ先です

one sided lover 7 描くと決めたから（前書き）

蜜柑色更新ですね。 蜜柑色は書いてるといふんぢゃ「口と棗が絡まないような……」。

次回かそのまた次回に絡ませる予定です。 7で秋になりましたが冬あたりで蜜柑の意味が少し分かつていただけるかと……。

one sided lover 描くと決めたから

私は隼人と約束してから熱心に油絵に取り組むようになったと思う。自画自賛かもしれないけど前よりはやる気が出たの。綺麗な絵にしたい。隼人が褒めてくれた優しさがある絵に仕上げたい。

「あら～。上辺の部分、綺麗に出来てるよ～。ん……でも少し悲しい絵ね。青が沢山あるからかしら～」

ふわふわの先輩は片手に細筆、もう片手には絵の具を持っているという構図。

先輩、少しだけ表情を曇らせるけどそんなにいろも可愛い。やはり、可愛い人は何でも似合ってしまう。先輩の隣に美人さんがいても負けないくらい可愛いけどな。

ちらり、と先輩のエプロンを見る。音符や星が散らばっている可愛いエプロン。

それにくらべて私は黄緑と白のチェック柄。油絵の時は制服が汚れないように、と先生がエプロンを持つてくるようにと言ったので持つてきたのだが……。なんでそんなに可愛いんでしょ～う?

「ハロちゃん、聞ってるの～？」

先輩がふくつと頬を紅く膨らませ赤風船のようになつていて。こんな可愛い仕草、真似出来ない。うん。可愛い人しか似合わないね。すると美人さんがふわふわの先輩の肩を数回叩き呆れたように先輩を見る。

「あのさあ……アイツが呼んでるわよ」

ちょい、と人差し指を廊下にあてる。

ドアから覗いてる男の人がいた。 ああ、前にみた先輩と話してた人。 先輩は紅い顔をさらに紅くして油絵の具と細筆を机に静かに置き、恥ずかしそうに、でも嬉しそうにその人の傍に行く。

「お? エプロン似合つてんじゃんか」

「か、からかわないでよ! な、何か用事でもあるんでしょ? さつさと言つて」

先輩は冷たく言い放つ。 照れ隠し?

男の人はちえ、と残念そうに背を向け、鞄を背負う。 先輩はぎよつとし、慌てて男の人の腕を引っ張り足をとめさせる。

男の人は「何?」とでも言つまうに先輩をじとり、と見る。

「用事は何なのよ? なんで帰るのよ」

「あー。俺ね、お前に逢いに来ただけ。別に用事なんてない。逢いに来るのは、迷惑?」

先輩は男の人の腕を放し、戸惑つているのかな。 瞳の奥が揺れている。 なんて言おうか迷つてているんですよね? 先輩。 素直になることは大切ですよ? 意地を張つてたらきっといつか後悔します。

「そんな冗談やめてよ……。私じゃなくてあの娘に逢いに来てるんでしょ! ? あの娘に聞けばいいじゃない! 」

先輩は叫ぶように。すると泣いたのかその場にしゃがみこんで震えた。 美人さんがやれやれ、と先輩に近付く。先輩が言つてる「あの娘」は美人さんのこと。

男の人はため息をついて美人さんをじりり、と睨む。 美人さんも男の人を負けずと怖いくらい睨む。

「てめえ、泣かせんじゃないわよー約束が違うじゃないー！」

「お前こそそいつに何か言つたんじゃねーのー？俺がお前に逢いに来るとか絶対無いしー！」

なんか激しい言い合いに……。 と、とりあえず先輩にも話を聞いてもらわないとダメだよね？ もしかしたら先輩が言つてることは誤解かもしねりー！

先輩に近寄り肩を何回かぽんぽんと叩く。 先輩は顔を上げて潤んだ紅い目で私を見る。

「だあーー！誤解すんなよ！俺は好きな女を泣かせたくねえよー！」

その瞬間、美人さんの顔がふつと和らぎ先輩の方へ向けられる。先輩は顔を上げたくない、と訴えるように首をぶんぶん振る。

「はつきり言えばいいんだろー？俺はお前が……好きだ！泣かして悪い！」

先輩はがばつと顔を上げて呆然と男の人を見る。 みるみる先輩の顔が紅くなるとつられたように男の人も紅くなる。 美人さんは先輩を抱き締めるように包み込み、また男の人を睨む。

「あんたが早く言えばよかつたのよ！好きな女の子泣かせて…

…何やつてるの…？」

美人さんが男の人を殴りそうな勢い。

男の人は「う……」と申し訳なさそうに下を向いて頭をぽりぽりと搔く。 美人さんはなんていうか……わいぱりしてゐるな。 千恵と似てる。

先輩はまだ顔が紅くなり、口をぱくぱく動かす。 先輩はほつとかしですかー？

「あの、そのー……わ、私……のーす、好きなのー？」

「そのことについて今から話すわね。いろいろと誤解してゐるみたいだから」

——「コイツと私は単なる近所で、顔見知り程度。けどいつからかな。コイツに話しかけられたのよ。ふわふわの髪の女の子は誰だつて。紹介してほしうつて言うから。それであんたに紹介したのよ。んで、数日後に「好きになつた」て報告してきたから応援するから約束を1つ。「あの娘を傷付けないこと」それが、条件。まあ、よつするに「泣かせるな」つてことね。

それが美人さんが語つたこと。男の人の相談役だつたみたい。先輩と話す機会が出来たのも美人さん繫がりらしい。

「あとはあんたに任せると。上手く伝えなさいよね」

さあ、戻ろう? 美人さんはにこやかに笑つて言つものだから私も2人をちらりと見て美術室に戻る。

大丈夫。あの2人なら。不器用で壊れそうな恋だけど。きっと伝え合えば。気持ちは、繋がるよ。

「ココロちゃん。ありがとう」

美人さんは嬉しそうに言うからなんだねって思う。けど理由は教えてくれない。

誤魔化すように油絵に取り組んで美人さんはあの2人の、幸せそうな絵を描いていた。

暫くすると先輩が戻りまだギクシャクとした歩き方。その途端、上手くいったんだなって分かった。

先輩はさつさつと油絵を片付けスケッチブックを取り出す。

「約束、したの。油絵が終わったら……描いてあげるって」

描くつて決めたから。そう言う先輩は幸せそうで。羨ましい。それにその約束は隼人と私の約束にそつくり。先輩は、あの人を好きになつて後悔はありませんか？

その問い合わせはもう分かつたような気がする。だつてあんなに幸せそうな人が後悔なんてしない。

きつと笑つて、ないよ、と言つだらう。

私は窓をじつと眺める。外では男バスがいた。その中から隼人を見つけることが出来た。ゼッケンと後ろ姿で。けどアイツがいない。元気で、少しやんちゃで、隼人のライバルのアイツがーー。

「棗ー！こつちだ！」

誰かが叫ぶ。すると真つ直ぐにボールが叫んだ人の元へ。この投げ方は見覚えがある。遠い日の、アイツの投げ方。くるりと違う方へ目を向けるとアイツが。それを見て少し頬が緩んだ。君を、描きたくなりました。

君の彩はどんな彩ですか？

あるとしたら。

元気な君には太陽色ですか？ 少し優しい君には自然色？
でも一番似合うのは……。 苦い色が混ざった、あの色。

「口口口ちゃん。油絵終わったのかなー？」

先輩が私の絵を覗く。 すると、うん、と笑いながら満足そうにする。 理由が分からずにはいると「口口口ちゃんらしさが出てる」と言つ。 それは褒め言葉なんですか？

なんかすつぐダメだしされてるよつな……。

「嫌味じやないよー？ あのね、口口口ちゃんみたいに優しい絵だなあ、つて思つてね」

それは隼人と同じ。 どうして優しいと思うの？ 私は全然優しくないのに……。

臆病で周りの人を振り回す、そんな性格なのに！ 勿体ないよ、

私にそんな優しい言葉。 先輩の方が優しいです。

「口口口ちゃん……。 つまらないこと考えていたら怒るからね」と？

「つまらない」と……。 そうなのかもしれない。 今氣にしていいたつてダメ。

油絵に集中しなくちゃ。 そして隼人に喜んでもらえるような絵にするんだから。

今はそれ以外のことを考へない。

「あ。 いの絵は……。 ありがとう」

先輩は美人さんの絵を見て一瞬とまる。

美人さんは面白いのかそれとも別の理由なのか、微笑みながら返事を返す。

美人さんに何か言われたのか先輩は顔を固ませ目に涙を浮かべる。先輩の顔、忙しいな。今日はころころ変わって。

先輩が他の人の絵を見に行くと美人さんは私に教えた。なんて言ったのかを。

「私をふつてあんたを選んだアイツと別れるとか言わないでよね。もしそうなつたら私、奪いにいくわよ？」

それは美人さんもあの男の人が好きだつたということ。告白したけど男の人は美人さんじゃなく、先輩を選んだということになる。でも、美人さんは先輩と男の人を心から応援してた。応援するだけで辛いと思うよ？ 私には……よく分からぬけれど。

「最初はね、くつつかなければいいって思つたわ。でもどうしてかな。応援したくなつたのよね。いつまでも友達のままの2人にイライラしてたかもしれないわね」

笑いながら話す美人さんは遠い日のことを思い出すように、振り返るように話す。美人さんはもう吹つ切れているんですね。態度からしてもう男の人は「前の好きな人」になつていて。今は「友達」の関係なんだろう。

美人さんはため息をついて少し嬉しそうに笑つた。

「でもこれで終わつたわけじゃないわよ？あの2人だもの。喧嘩も沢山するわ、きつと。そうしたら絶対あの男は私に泣き付いてくるのよ。相談役は、まだまだ続くわね」

「面倒よ、と美人さんは言つが言葉と違ひ顔は嬉しそう。それは

どうしてなのかな。

相談役はそんなに楽しいの？

美人さんはくすりと笑い「2人を応援してるので感じられるの」と言いキャンバスに色を塗り始める。

「さあ、完成させるわよ。あの2人の絵を描くつて決めたんだから」

幸せそうな2人を描くとね、吹っ切れたんだって思えそうよ。そう言って美人さんはまた柔らかく笑った。私も自分のキャンバスに戻つて色を塗る。秋の風に秋の蒼空。絵を描き始めてから自然の微かな変化も気になり始めた。

絵に影響するの、と風景画を描いていた誰かが呟いた言葉。

風景画を描いたことがないから分からなければ風や蒼空に変化があると風景画を描いていた人は消しゴムを持って蒼空を消す。それほど気になるみたい。絵を描くと先輩達が言った言葉を思い出す。私は風景画じゃなくて果物や花、瓶だけ。でも次の油絵を描くとしたら私はきっと人を描くだろ。美人さんのように幸せそうな絵を描くなら。

「アイツ、なのかなあ……」

不意に大西が浮かんで呟いた。描きたいけど。もう一人ほしい。隼人とか？ それとも……。

「そこ、サボらない！」

注意されたので色をぐりぐりと塗る。文化祭まであと少し。何回言い聞かせるんだろうね？

今は油絵に集中するんだからーー。

one sided lover 7 描くと決めたから（後書き）

先輩みたいに好きな人の前じゃ素直になれない人はいますよね。
照れ隠しとか。

ついつい思つている」と逆のことを言つてしまつ。よくありますね。

だからこそ「口口口」のように素直で無邪気な女の子が書きたくなる
んです。こんな娘がいるんですよって。

冬は書きたい話が沢山あります。
隼人や棗の友情も書きたいですし。
ココロと棗も増やしたい……。一応冬は大きく動きだします。

先輩が好きな人と結ばれてから数日経つてすぐに文化祭に。私はなんとか油絵を終わらせて体育館に飾られてある自分の絵を見ると恥ずかしい。

隼人も見てくれるかな。ドキドキした中で文化祭は始まる。最初は吹奏楽部の演奏。知ってる曲から知らない曲まで。凄いなあ！私は吹きっとあんなに覚えられないよ……。

吹奏楽部の部員は動きながらふくので大変だらうな。

でも、みんな喜んでいるから良かつた。

私が心配するのも変だけど。演奏が終わると拍手が大きい。それだけ凄かつたからなあ。

吹奏楽部がいなくなると私は隼人と感想を言い合つ。

「凄かつたねー。隼人はどれが一番良かつた？」

「一番最初の曲かな。やっぱり最初だから曲が賑やかで良かつたと思うよ」

隼人の感想を聞くと後ろにいる真琴にも感想を聞く。文化祭の時も出席番号順に座るので隼人と真琴は近い。だから話せるので嬉しいな。

「あ、1組の始まつたよ！」

舞台の方を見ると確かにライトがあたつていたので口を閉じる。台詞は聞こえないところもあるけれどだいたい場面が変わると同時に展開が分かっていく。

「私は……あなたを、……好きが分かりません……」

舞台上に立つてこむ女の子の台詞がはっきり聞こえて耳に残る。今私の気持ちのようで。女の子は泣きながら去つて行くといつ場面だつたけど女の子の役は涙を流していなく、顔を隠しながら裏舞台へ消えていく。中学生で役で泣くのは難しいもん。演技を上手く出来なくて当然だよね？ 演技で思つたけど大西は出来るのかな。そもそも役をやつているのかな。きっとしてないんだろうな。してたらそれはびっくりするけど……。舞台を見るとまた女の子が出てきていた。

「好きが分かりませんがあなたに逢うと嬉しくて。話すだけでも楽しくて。この気持ちは何か分からないんです。……あなたは、こんな想いを抱く私をどう思こます？」

「別にどうも思いません。ただはつきりしているのは僕は君を好きなだけです。僕に振り向いてくれるまで諦めるつもりはありますよ」

逢うと嬉しい、話すと楽しい……。

それは大西にこつも思つこと。逢うと嬉しくなるし、時々話しただけで楽しくなつちやう。この想いは分かる気がして分からぬの。これが恋なのかな、つて思つたり。でも否定してる、心の中で。これが恋なら楽しいだるう。今まで以上に大西を意識するだらうな。恋と認めたら。でも認めたら自分らしくなくなるかもしれない。それがこわくて認められないよ……。

「私ね。あなたが他の女性といふと心がモヤモヤしてイライラするの。あなたが他の女性を見ついても。違う女性の話を私にされても。胸が苦しいの。どうすればいいんでしょうが……」

同じ想い。大西が柴崎さんといふとイライラして。他の女の子といふと苦しくなる。どうすればいいのかな……。こんな想い消えたらしいのに。そういうえばイライラしたり苦しくなったり……大西に振り回されることもないのに。

「僕が治しますよ。だから僕と一緒にいてくれませんか？」

「ふふつ。嬉しいです。そうですね。あなたといふのも良さうです」

恋が全て上手いくなんて思わない。辛いこと、嬉しいこと、悲しいこと……。

きっと嬉しいことも多くて。悲しいことも多いのかかもしれないね。でもきっと恋をしたら何かを得られるよね？　きっとなにか得られるよ。そう思つたら恋をするのもいいかもしないな。でも今の私じゃ不安もあるから……少し時間がかかりそうかな。

何が不安かよく分からぬけどね、何か変わるような気がして。

「星野さんー？」　　具合悪いの？」

隣を見たら心配そうにする隼人がいた。

いろいろ考えていたせいか劇は進んでいて今は3組の終わりぐらい？

「だ、大丈夫！　考え方があつただけで……。心配しなくていいよ？」

「そつか……。星野さんって身体弱そうに見えるから。ほつとけないんだよ」

ま、まずい……。今、きっと顔が赤い。『ほつとけない』なんて言われたら……。隼人は分かつて言つてるの？

隼人の方は見れなくて心を落ち着かせる為に深呼吸をしてみる。少し落ち着いたような気もして、緊張も和らいだ。

「はい。半分のクラスの発表が終わつたので少し休憩にしたいと思います。後ろには美術部の絵が飾られているので見て下さいね」

先生がマイクで言うと元々高い声がさらに高い。
隼人は席を離れて後ろに行き、美術部の作品を見ていく。約束したから見てくれるのかな。

で、でも……じっくり見られるのも改めて恥ずかしい……。
真琴を見ると後ろで作品を見てるし……。

そ、そういうえば先輩や美人さんの絵はどんなのだろう。
後ろに行くとみんなの絵があった。

美人さんは先輩と男の人と一緒にいる絵。

先輩のは青い澄んだ蒼空そらに何かが浮かんでいる不思議な絵。

恥ずかしいけど自分のも改めて見た。

ビンに黄色い花に花瓶に葡萄ぶどうがあるシンプルな絵。よく見ると荒削りだと思う……。色はゴチャゴチャしてるし、物も立体的じやくてきじゃない。

私の絵つてまだまだ未熟みじゅくだなつてよく分かるくらいに。

「星野さんの絵、それだよね。前と同じ、優しいよ

「そうかなあ？ 未熟すぎて飾るのが恥ずかしいよ。でも、隼人は優しいね。ありがとう。もっと上手くなるように頑張るよ！」

隼人は一瞬固まると顔を片手で隠しながらどこかに行く。

あ、あれ？ ビうじたんだわ？ 変なことでも言つたかな！？

「ハハローー！」

後ろに抱き付かれるような感覚があり、後ろを見ると千恵が抱き付いてた。

美咲はのんびりと絵を見てる。

「ハハロって隣席の男の子と仲いいね……。羨ましいな～」

千恵は隼人のことになると寂しそうにするなあ。

隼人がどうかしたのかな？

千恵はそつと離れると作り笑いを浮かべて真琴と何やら盛り上がる。

「この2人は仲良くなれるよね。性格が少し似てる気がするよ。

「席について下さいー！」

体育館に凄く響く。マイクで喋らなくても聞こえるんじゃないかなあ。美咲と千恵は4組の列に急いで戻る。次は4組か……。大西は……どうしているんだろう……。

「ハハロ。大西ね、役してるみたいだよ

真琴が席についていたずらつぽく笑う。

いつも思うけど私って分かりやすいのかな？

それとも顔でてるのかな。舞台を見ると背の低い男の子が立っている。少しきせのある髪に細いのに筋肉がついてる体。大西だつてすぐに分かった。服というか衣装というか……。私服っぽい。

でも演技は個性が出るらしいから大西らしさがよくでてる。ギクシャクした歩き方。苦い表情。なんだか可愛いしくて目が離せない。男子に『可愛い』なんてダメだけど……。

少ししたら大西が舞台にいなくなる。ビリやで終わつたみたい。もう少し見ていたかつたな……。

「うわあ～。4組、面白かつたね」

「え？ ああ、うん。面白かつた、ね？」

しつかり見ていなかつたから面白いか分からぬ。大西が可愛いかつたなら頷いて「そうだね」と言えるのだけど。

「ああ～。『口の』ことだから大西しか見てないんでしょう？」

「な！？ そ、そんなことは……」

否定は出来ない……。

だつて大西のこと本当に見ていたから……。
で、でも、認めるのも嫌だ。真琴に絶対にからかわれる。
いや、真琴だけじゃなく千恵や美咲にも。
だから少しの間、秘密にしておこう。この胸の熱い想いは。

「次は6組だね……。あー。緊張する……」

真琴は衣装に着替えながら裏舞台に行く。私は背景係で背景を塗るだけだったから別に緊張はしないけど、真琴は役をしてるから緊張もするもんね……。裏方は裏舞台で見るだけだから。うん。劇が始まると真琴はすぐに舞台に立つ。裏舞台でそれを座りながら見る。

「星野さん。」こんなところにいたんだね

「え。隼人？　あ。そうか。隼人はナレーターだよね？」

隼人の手にはマイクが握られている。おまけに片手には台本がある。ナレーターは台本見れるから楽、なんだよね？

「星野さん……。あのわ……」

「へ？　どうかしたの？」

暗くてよく見えないけど何か言おうとして言つていいのか迷つている様子に見える。言いにくいのかな。

「僕……星野さんがーー」

「おい！　隼人！　ナレーターの台詞だぞ！」

隼人の言葉はかき消されてよく聞こえなかつたな。『僕は』までしか。小さい声だったから。大きな声でもだめかもしねいけど。

「あ……。ごめん！」

隼人は謝ると台本を見ながらマイクを顔に向けて声を出す。

それから少しして6組も終わると先生の話や後片付けをして、教室に戻つて給食。

隼人と話しながら給食を食べるとなんだかドキドキした。意識しちゃつた……。裏舞台の暗い時に隼人の顔を見たらすごく男らしくて。男前がさらに男前になつたような。心臓に悪いです。本当に……。

one sided love-8 文化祭（後書き）

次回は29日更新です。順番に更新していくと思っています。
29日に更新したら次は28日に更新。一年生の時の秋は次回で終了です。

「口と棲みがやつと絡みます。
隼人は出ません。
美咲と千恵がたくさん出るので友情要素が盛りだくさんのような
感じです。

部活は今日、あるかなあ……。文化祭が終わつたばかりだからな
いかもしれない。

先輩にも逢いたいし……。とりあえず美術室に行つてみようかな。
言いたいことも沢山ある。

美人さんにも「上手かつたです」と言いたい。早く、逢つて言
たい。

「ハロウちゃん? ビーツだの? 部活ないよ?」

「せ、先輩…」

ふわふわの髪をいつも結つていてるのに今日せめおつしていた。肩
につくつかないかぐらこの髪の長さ。結つてもつづじ長いと
思つていた。

「先輩は髪をあらしたんですね。似合つてます」

「あ、ありがとうございます。ハロウちゃん、本気で愛しています」

ぎゅっと抱き付かれる。せき込むと腕の力を緩め
てくれた。

それでも手をほどこうとしない。

先輩の様子がおかしいから不安になる。

「本当にハロウちゃんが大好き……。妹が出来たみたいで……。
いつもしていらっしゃるのも今までだね……」

震えてる手。泣きやうなほどに弱々しい声。

先輩は……何を言つてるの……？ 今日までつて最後つてことへ、どうして……そんなこと言つての……？

「私も……もつすぐ受験だから。三年生はもつ引退なんだよ。運動部の方がはやく引退するけど……。文化系も今日で引退。今までありがとうございました。」口をちやんも頑張つて、

先輩と逢えなくな……？ あんなに沢山喋つて沢山恋愛について教えてもらつて……。話したいことがあるのに、言いたい言葉は出ない。頭が白い絵の具に塗りつぶされたように真つ白。先まで先輩の顔が見れたのに今は先輩の顔がよく見えない。滲んでいく……。

「もー……。そんな顔しないで。もつたく逢えないわけじゃないから。学校ですれ違うかもしれないし……。卒業したら遊びに来るから……。だから、その……」

先輩が励ましてくれてるのは分かる。

でも先輩だつて……泣きそうな顔、しますよ……？

先輩にお礼を言いたいのに出でこない。「ありがとうございました」とこいつ言葉。

でも……言わなくちゃいけない。声が震えていたつて泣きやうになつたとしても。

先輩に感謝しますから。感謝の言葉くらい伝えなきや……。

「先輩……。ありがとうございます。私も、先輩の」とへ
大好きです」

声が震えて情けないな……。顔はきっと涙のあとがあるだらう。

先輩はにっこりと笑うと耳に顔を近付ける。な、なんだろ？
何か言つのかな……？

「ハハロちやんの恋も……叶うといいね」

……え？ 恋なんてしてませんよ？

先輩はうつすらと笑うと彼氏さんと一緒に帰つていつた。泣いたばかりなのにまた涙があふれていく。逢えないわけじゃない。話せないわけじゃない。

けど……先輩の恋を見てから少し羨ましくなったのに。

「ハハ……。先輩……」

その場にしゃがんで声を出さないよう我慢する。幸い人がいないので人目を気にすることもない。

「…………何してんの？ 目立ちますよー」

…………氣のせいだらうか。誰かさんの声が頭上から聞こえた。声は知つてる人。

まさか……アイツ？

でもこんなところにいるはずがないよね。とつぶに帰つているはず。

「聞いてんの？ 星野ハハロ」

「な！ ふ、フルネームで！ 大西 栄！」

顔を上げると大西が私をじっと見ていた。大西はなんでここにいるの…？ 美術室に用事なんかないはずなのに。迷つた……とか

ないよね。うん。

「お前だつてフルネームじゃねえか。……それよりこんな廊下で泣かれたら迷惑ですけど?」

「泣いてなんかない!……どこが泣いてるの!?」

ムツとして言い返す。泣いてはいたけど……大西が来たからすっかり涙がなくなつたよ。

「ふうん。泣いてないならいいけど。お前はいつも笑つとけ!
笑うかどには福来たりだぞ?」

心配……してくれてるの?

大西は口は悪いし意地悪だし……。
でも、いざという時優しいんだよね……。小学生の時、アレルギーで目が赤くなつたら心配してくれた。優しいから大西は人気があるんだなあ。

「あ、ありがと!」

「それになあ。こんなんで落ち込んでたらこの先やばいぞ。引退なんて気にしたらダメだ。俺らなんて……もうとっくに先輩はいないんだから」

大西は顔を少し歪める。あ……。悲しくないわけないんだ。
私が落ち込んでいるから慰めてくれたんだね……。ごめんね、大西。元気を出さなくちゃいけない。
いつまでもうじうじしてられない!

「あー。星野。お前、隼人と……その、あの——」

「棗——」

階段から柴崎さんが下りて来て大西の腕をとる。

大西は言いかけていた言葉をやめると柴崎さんに顔を向けた。困つているような迷惑そうな……なんともいえない顔。

「棗ー。こんなところにいたんだー。4組にいなかつたから焦つたわよ」

「しば、柴崎……。悪いけど先に行つといてくれない？ 星野と話したいんだ」

柴崎さんは私を睨み付けて大西の腕を引っ張る。え……。大西と柴崎さんの距離が近い……。

大西は柴崎さんをじっと見ているし、柴崎さんは私を睨んでいる。イライラする……。田の前でそんなことしなくてもいいのに……。

「何言つてるのよ棗ー。 部活まで時間ないのよー。 話なら私が聞いてあげる！」

大西は私を見たが目で「助けてくれ」と言つているのは氣のせい？ 柴崎さんと仲がいいんだから柴崎さんに聞いてもらつたらいいと思つ。

わざわざ私に話す必要なんてないと思つし。

「じゃあね。星野さん」

柴崎さんに腕をとられながら大西は歩いて行つた。胸の奥が棘に

刺されたように痛い。苦くて酸っぱい、蜜柑のような想いが広がる。最近、こんな想いが多い。

柴崎さんと大西が一緒にいると蜜柑のような想いになる。気にしてもしようがないか……。

でも、なんだか歩きたくない。美術室の前にしばらく……。

「ハハロ。ビニにいたの～？」

美咲が階段から下りて私の前に立ち、すっと手を握られた。美咲がなぜここにいるんだろう。

千恵はいないのかな。先に帰ったとか？

「どうして……そんな顔してるの～？」

美咲が小さな鏡を鞄から出して私に渡す。鏡で自分の顔を見ると泣き出しそうな顔……。悲しいことなんてないのに。どうしてこんな顔してるの……？

「……。大西だね～？ 大西も女の子泣かせなんだから～」

美咲……。冗談はきついです……。

大西じゃないよ。

大西のことでなんで泣かなくちゃいけないの？

「こんな時は千恵だよね～。千恵になら話せる～？ 呼んでくるよ～」

千恵……。大切な友達。

なんでも言える、なんでも話せる友達。本気で泣いて笑ってくれる親友……。

「いた！ 二人とも…………え？ ハハロ、どうしたのー？」

「千恵、ハハロと話して。私はそのへんうわうわしてたから

」

美咲は鞄を背負つと離れていく。

千恵はそれを見たあとに私の隣にゆっくり座る。

そつと髪を撫でてくれた。指先から千恵の優しさがあふれてる。

「…………ハハロ。言いたくないなら言わなくていいけど、いつから涙が出たの？」

「お、大西が…………柴崎さんと一緒に部活に行つて…………せつかく大西と、話せたのに…………また、話せなくなる。そしたら…………涙が出てよ」

千恵はハンカチを差し出してくれた。涙をふきとり、落ち着かせるために深呼吸を繰り返した。

千恵に話したら楽になつた。心が軽くなつたのかな…………。

「悔しかつたんだよ、きっと。大西を独占してるその子が羨ましかつたのかな」

「そう、なのかな？ 確かにもやもやしたけど…………。
どうして柴崎さんが、つて思つたけど…………。独占されたから？
大切なものを？
大西を？」

「混乱してるならいいの。まだ気付かないのなら仕方ないけど、認めるのも勇気だからね」

何、を？ 気付かないのは何に気付いてないの？ 認めるつて何を？

千恵がいいたいことは「恋」のこと？ 大西が好きかもしないって思つたことはあるけど……。時々、胸の奥で何かが叫びそうなほど想いがあるのは知つてるよ。だけど、それが恋なのかは分からぬ。それが今のは気持ち。

「帰るよ。部活がないんだからはやく帰りたいんだから」

その時の千恵の顔は切なげで悲しげな顔だった。

どうしてそんな悲しげなの？

千恵の方が辛いんじゃないの？

今の私には聞く勇氣すらなかつた。

美咲は階段に座つていた。待つてゐる間、宿題をしていたらしい。

「帰るの～？ もつ少し時間かかると思つていたのにな～」

残念そうに宿題をしまつ。鞄を背負い、立ち上がる。

千恵は美咲を見てため息をつく。

どうしたんだらつ？ 美咲、変なことしてないと思つけど。

「美咲……。あんたはいつものんびり屋さんよね？ テキパキしてる人を見習つといいんじゃない？」

「むう～！ のんびりかもしれないけど、これがちょうどいいんだもん～！ テキパキすぎてもダメだと思つけどな～」

「Jの2人のやりとりが面白くて好き。ずっと変わらないやりとり。次はどんなやりとりをするのかな。握っている鞄をもちながら千恵に笑いかけた。

「千恵と美咲のやりとり好きだ。いつまでも見てたいな」

千恵は少し顔が固まつた。肩も小さくはねた。聞いたらやいけないことを聞いたかな……？

「そう、だね……」

千恵の様子がおかしい。今のは言っちゃだめだったかな……。聞きたいけど、聞けなかつた。

美咲は千恵の変化に気付いてないらしく、呑氣にしている。気にしてもどうもならないし、考へても仕方ないよね。気付いてないふりをしておこう。

「うわあ……。今日、風が冷たいよ~」

美咲が「ブレザー着ればよかつた」と言つたが、そんなに寒いかな？ 普通だと思うけど……。

「美咲は寒がりね。ブレザーは冬に着るもの。今着たら暑いに決まつてる」

「む~！ 千恵、おかしい~！ 寒くないなんて~！ ねえ、口口口、寒いよね~？」

なんて言えばいいんだろう？ 寒いか寒くないかと聞かれたら微

妙。冷たい風じゃなくて、微風のよう。

「寒くないかな。むしろ微風?」

「え~!? ハハハまでひどいよ~」

美咲はふくつと頬を膨らませて私を睨み付けるように見る。

美咲は私より身長が低いから睨み付けられても可愛い。睨んでな
いように見えるのだ。

「美咲はいいよねえ。身長低いし可愛いし

「千恵が高いの~! ハハハだつて低いし可愛いよ~!」

千恵がこつんと美咲をたたく。本当に2人のやりとりを見ると元
気になれる。

ずっと、見てみたいと思つんだ。

今回はどうだったでしょうか？

棗の慰め、柴崎さんの行動。慰めはやつてほしくない時とかありますが、好きな人ならどんな言葉でも嬉しいですよね。

one sided love-10 冬の訪れ（前書き）

ついに冬です！ 冬は切なさがありますよね。冬の海は特に。イ
メージカラーでいうと水色っぽいです。

冬は、苦手。寒いものもあるけど、なんとなく……切ない季節だから。

千恵が帰り道の時に言つた。冬が苦手とか言つたのを初めて聞いたので驚かずにはいられなかつた。

千恵は雨が嫌いなら聞いたことはある。雨の時、すこく嫌そうな表情をしてるから。雨は、気分がのらないのは分かる。晴れが好きだけど、晴れすぎても暑いから、曇りがちょうどいい。

「ううー。寒いなあ……。はやく春にならないかな……」

「春かあ。春になれば中2になるね。後輩、出来るかな」

千恵は年下が好き。弟のようで可愛くみえるらし。

私には弟や妹がないので年下と関わる機会なんてない。小学校の時は、交流会とかなんとかで、3歳年下の子と遊んだ。

でも、私と遊んだ子は元気いっぱいの男の子で、あちこち走り回るので、捕まえるのに時間がかかつた。田をはなすといなくなるので手を繋いでいたっけ……。

あの時は、走ることに必死だったから、可愛いなんて思う余裕なんてなかつた。弟がいたら、こんなことをしてたかな、と思つただけで。後輩がくるなら、女の子なのかな。美術部つて男の子いないから。

「口口口！　なに考えていたの？　私の話も聞いてほしかつたな」

「え、あ、『』めん。年下の子つてどんなかなつて

千恵はしづらへ田を空中に彷徨わせて、ぼんやりした。年下の『』となり、こつも楽しそうに話すの。

「弟は可愛い。大きくなつてきたらぜんぜん可愛くなつたが、後輩が出来たとしても、それほど小さくないから、可愛いくと思わない」と私は思うな」

「千恵は弟、2人いるもんね。後輩の相手とか得意そつだから、よろしくね」

「う言つたら、千恵はうつむく。

また、だ……。最近の千恵はこれからのこと話をすると元気がなくなる。

まるで、自分だけがいなくなるよつと。元気がなくなるのは、千恵がいなくなるから?

そんなこと、考えさせない。

「千恵がぼーっとしてざつわるのー、元気じゃなきや、笑えないよ」

私に出来る励ましなんて、こんなこと。精一杯考えても、綺麗な慰めなんて考えられないから。

千恵はしづつむいていたが、にっこり笑つとまたいつものように、喋り出した。

「そつだね。笑えないね。先のことを気にしたつて、ざつてしまないし。今を楽しまなきやー」

いつもの千恵。お姉さんのように大人びていて、優しい……。たとえ、千恵がいなくなつても、繋がることは出来るから。楽しい思い出を、今だけでも……つくれり。

「じゃあ、また明日」

私の家に着くと、千恵は手を振りながら帰つていいく。後ろ姿をずっと見ていたが、寒くて立つていられないので、家にそそぐと入つた。家には兄がパソコンをいじりながら宿題をしていた。パソコンに夢中で私に気付いてないのだろう。

私は部屋に入つて私服に着替えた。制服つて動きにくい。ブレザーは着ていたら身体が重く感じる。

「ハハロ。今日は早かつたのね」

「ん……。お母さん? 買い物してたの?」

玄関から顔を覗かせる母。父はまだ帰つてきていない。

いつも夜中に帰つてくるけど。母も夕方の6時から仕事に向かう。6時になるまで買い物やら掃除やら洗濯やら……。皿洗いは私が担当。母がここまで頑張つているのだから、せめて水仕事はやってあげたい。

「今日は部活ないからね。今日の『飯なにー?』

「ん? 今日はね、ひじきに唐揚げに野菜の炒め物に、魚の煮付けよ。栄養、バツチリね」

うわあ……。兄ちゃんが好きなものばかり。ひじきは私とお父さんが好きだけど、魚は私以外みんな好き。魚の煮付けは苦手。揚げ

物なら好きなんだけどなあ……。

「 ハハロは野菜も食べなさいね。身長伸びないわよ」

「 ……小学生に間違えられたからって。童顔だと聞こたいの?」

身長もあるだらうけど、顔が幼ことよく言われる。小学生に間違えられても文句は言えない、と。

よく間違えられるけど……そんなに言わなくともここのこな。身長が伸びないので親の遺伝かもしけないし。

私はお母さんを部屋から出すと椅子にもたれた。今日は……疲れた。部活もないんだけどな……。ひとつひとつしてきたので皿を瞑る。いい夢、見られますよに……。

「 ……あて、早く。早く、起きなさい……」

誰がここの? 耳の近くで聞こえる細い声。厳しめの令嬢みたい。おしゃめな声は……こつも聞こてる声だ。眠い……。もう少し寝たい。

「 千恵ちゃん、来てるわよ。待たせるつもりなの?」

「 お、母さん……? もつ朝、なの?」

くしゃくしゃの髪を撫でながら聞いたり、呆れたよつて見られた。時計を私に見せぶりにして、田舎まし時計をたたかれた。時計を

見ると……完璧に遅刻。用意は急がなくちやー。

「早く着替えて髪を整えなさい。時間がないし、千恵ちゃんも待ってるから、早くしなさいね」

私は洗面所へ向かい、洗顔してから歯を磨く。制服を着て、ボサボサの髪をくしで梳かして鞄を持ち上げる。朝ご飯を食べてるひま、ないよね。

千恵を待たせてるんだもん。待たせたくない。

「ハハロ！……遅いー。相変わらずなんだから」

「『めん！……寝坊しちゃって……。これでも急いだ方なんだよ』

千恵はくすくす笑いおえると、私の頭をみてまた微笑した。髪の毛がどうかしたのかなあ……？　急いでやつたからまだはねてるかな？

「ハハロ、髪がはねてる。動かないでね、なおしてみるから」

千恵は手櫛でなおしてくれたが、髪の毛先だけはねたまま。癖毛だから諦めではいるんだけど、もうちょっとストレートにしてみたいとは思つ。みんな、さらさらしてストレートで羨ましいもん。

「ハハロ、最近太った？」

「ええー？　うわわ……。ダイエットしようかな……」

確かに最近、肉がついたかなっては感じてたけどー。

やつぱり太つてたんだ……。揚げ物ばかり食べてるからかな……。
太つた姿なんて、見せられないよ！

「冗談だよ、冗談。口口口が体重氣にするなんてね。前は全然
氣にしなかったのに。大西を好きになつてから変わったよねえ」

「違うー！　年頃だから氣になつただけで……。大西はまつ
たく関係ありません！」

千恵のばか……。

そんなこと言つたらまた意識しちゃうじゃんか！
私の考へていることを知つていて言つてるの？　わざとなの？

「口口口……。もう認めてもいいんじゃない？　いつまで、
認めないつもり？　みんな、辛くても頑張ってる。逃げるの？」

違う。否定したい。

でもそう出来ないのは、心のどこかで認めてるから。
私が恋を認めないのは、辛くて傷付くのがこわいだけかもしれない。
い。こわい、辛くなることが。変わつてしまつ……変化することが。
私だけ、美咲や千恵みたいに恋話したい。惚氣話だつてしてみ
たいんだ。

でも……」わくて出来ない。矛盾、といえばそうなのかもしね
い。

「認めるのだつて勇氣だからね。私は全力で口口口を応援する」

「うん……。ありがとう、千恵。頑張るから」

認めるね、と言いたいけど私にはまだ勇氣が足りないから。時間

を下さい。頑張つてこの想いを育てるよ。

だから、それまであたためさせて。初恋は、人生で一度しかない。初めての想いを、大切に、壊さないようにしてみたいから。

「星野さん、おはよう」

隼人が席について挨拶をしてくれた。

隼人とは仲が良かつたけど、文化祭をきっかけに距離が近くなつた。女子たち……隼人ファンは私に目を光らせるけど、隼人とは友達なんだもん。何の進歩もしないし、下がるわけでもない。

第一、隼人から話しかけてくるので、私は遠慮しなくてもいいと思つんだけど……。

「おはよう。そうだ！　あのね、隼人……。文化祭の前の約束、覚えてる？」

「ああ……。僕を描いてくれるんだよね？　今、描いてくれるの？」

いたずらっぽく笑つた隼人はかわいらしい。普段、にっこり笑うと爽やかな笑顔で、女子たちが騒いでいる。いたずらっぽく笑う姿は、女子の前では見せない。

私が見れてるんだ、と思つとなんだか嬉しいような。

「隼人がいいなら……。文化祭が終わつたから、暇になつちゃつた」

「そつかあ……。そつだなあ。僕も部活暇になつてきたしなあ。今日、顧問の先生が出張なんで休みだから……。放課後、教室で待つてくれない？」

「いいよ。

そう返事をしたら、隼人は嬉しそうに笑つた。

隼人の笑顔つてなんていうか……キュンとする？ キュンつて漫画みたい。

私も部活はない日だから、帰つても暇だし。休み時間に美咲と千恵に言つておかなくちゃ。今日は先に帰つててね、と。

五時間目が終わつて、すぐに教室を出て4組に向かう。4組に行く時つて、なんとなく緊張する。普段、4組行つてないからかな……。

「ココロ～？ 逢いに来てくれたの～？」

「あ、美咲！ ごめん、今日先に帰つてて！ 私、用事あるから！」

美咲は嫌な表情をなにひとつしなくて、きょとんとした表情で、分かつたよ、と頷いた。何も聞こうとしないので、よかつた……。

「じゃあ、先に帰つてるけどね～、用事つて槇野くんでしょ～？ 千恵に言つたらヤキモチやくねえ～」

「ええ!? 知つてたんだ……。千恵がヤキモチ? まさかあ~」

千恵のヤキモチねえ……。

隼人と関係あるのかな?

隼人の話をすると千恵は、いつも寂しそうに笑うから。知り合いには見えない……というか一人が話してるところなんて見たことがない。

私は美咲に手を振りながら教室に戻り、放課後を待遠しく感じていた。

約束までなんとか書けました。冬は運動部、辛そうだなあ……。
夏も辛いと思つんですけど、運動するなら秋ですね。

やつとここまで書けました。のんびりなのか、早いのかは分かりませんが、口の認めないシーンは意外に苦労します。好きじゃないつて想定、上手く書いてみたかったんですよね。

授業終了を知らせるチャイムがやけに大きく響いた。今日の授業は……これでお終いかあ。疲れたあ……。

「今日はここまで。次の授業までにちやんと予習をしてくるようにな」

社会の先生が教科書を閉じると、クラスのみんなも同じように片付け始める。

私も片付けようと教科書や地図帳を机に押し込む。中から出たのは、大きめなスケッチブック。あ……。そつか。隼人を描くつて約束したんだつけ。すっかり忘れてた。楽しみにしてたんだけど、社会の授業で眠たくて……。あくびなんでしたら絶対に怒られるから睡魔との闘いだった。授業内容は全く聞いてなかつた。

「星野さん。眠いのに頑張ったね」

「ふああ……？ 隼人？」

どうして知つてるのかな……。

私つて分かりやすいのかなあ？

隼人が鋭いとか、そんなのじゃないのかな。

「星野さん、授業中に頭がゆらゆら揺れてたから……。うとうとしてたし」

「んんー。社会つて苦手で……。頭に入らなくて

少し前まで頑張つて聞いていたんだけど、そのうち分からなくなつて……。言い訳にしか聞こえないよね、これじゃあ。

「星野さん。このあと、大丈夫？」

「全然大丈夫！　掃除して、挨拶が終わつたら描くから…」

隼人を描けるといつことに眠氣は吹つ飛ぶ。本当に楽しみで仕方ない。

私は掃除場所に向かう。廊下なので少し冷えるが、ひんやりとした空氣にほんのりと心地良さを感じる。ほうきを持ってゴミを掃いでいると、柴崎さんと大西が仲良さそうに話しているのが目にに入った。もやもやする……。痛い、見たくない。一人を見たくない……。一人に背を向けて気にしないように、掃除に集中した。

ぼーっとしてたらすぐに放課後になつた。嬉しいはずなのに、喜べなかつた。心配かけたくなくて、隼人の前ではなるべく笑つてみせた。

「どこまで描いた？」

「え、あー……。まだ顔の輪郭しか描けてない」

五分も経つのに、輪郭しか描けてないつてどういうことなの、私は失礼すぎるよ、モテルになつてもらつてるのに……。

「体調、良くなかった？ 今度にする？」

「大丈夫だよ。そんなに心配しないで」

再び描こうとした手を隼人に強く掴まれる。痛いわけじゃないけど、力が強くて振り払えるはずがない。

「嘘はだめだよ。今日は家に帰つてゆっくり休んで。また別の日に描いづ。ね？」

「…………」

不満そうな表情をして隼人は意見を変えようとはしない。渋々頷いて、教室を出ようとして隼人を見た。にっこりと笑つたかと思つたら、独り言のように呟いた。

「僕は諦めないよ。僕の想いに気付いてくれるまで、ね」

なんのことだろう？

私に向けたのか、単なる独り言なのか。体調が優れないのも本當なので軽く頭を下げる。帰り道を一人で歩いた。ズキズキと痛む胸をおさえて、目を瞑つた。

「私の、ばか……」

やつと氣付いた、本当の気持ち……。目を逸らしてた、熱い想い……。立ち上がりつて、親友の家に向かつた。

千恵の家つて、相変わらず遠い……。肩で息をして乱れを整える。必死で走ってきたからか、髪の毛はあらゆるところがはねてまわる。

る。

でも、髪を気にしてゐるひまじやない。

千恵に言いたいことがあるんだから―― 家に足を踏み入れると家の中はがらがらだ。どうしたのかな……。

「おや、ハハロちやん。千恵に何か用かい?」

「あ、おじさん。こんなにちわ。千恵…… いますか?」

おじさんは「待つててね」と笑うと階段を上つていった。待つてゐる間、おじさんが手に持つていた茶色い箱……段ボールを見た。どくどく、と嫌な予感がさつきからずっと頭の中に流れる。勘違いだよね、千恵……?

「ハハロ、どうしたの? 珍しいね」

「千恵! あの、ね……話したいことと、聞きたいことがあるの」

場所を変えようか、と千恵が言つたので私は千恵の後ろについていく。人目が少なく、秘密話にはもつてこいなのかもしれないな。

「んーと。話したいことから聞こつかな?」

「う、うん! 私、やつと分かつたんだ……。私ね、大西が

好き。恋なんか分からぬいけど、そう思うんだ……」

柴崎さんと仲良くしているところで嫉妬して、話せると嬉しいのは……大西に恋してるからだと思った。今日でその思いが確信に変わったから、千恵に伝えたい。

「自分が恋だと思ったら、それはもう立派な恋なんだよ！」

にっこりと笑つて千恵が髪を柔らかく撫でてくれた。

「で？」
「聞きたい」とつて？」

「う、うん。私の勘違いならいいんだけど……千恵、なんで家の中の家具とかないの？ ひ、引越しとかじやないよね……？」

笑つて遙うよと語つて平恵。勘違いだよつて。

二馬を見る。目にはハヤーの聲で和の言
がこゝを聞いた。た
疑うくらいに。

「あーあ。ばれちゃつたか。さすがに分かるよね、私の態度とかにも出てたと思うし。引越しなんだよね」

……嘘じやないの？ 本当なの？ 嘘だつて言つてほしかつ

た
・
・
・
。

私が「行かないでー！」って言つてどうにかなる話じやないのは分かつてゐるけど、でも……。

「ねえ、口。恋つて気付いてどう思つた？」

「え？ 確か……。こんなに辛いのかなあって」

あれ？ 本当にそう思つた？ 辛いだけじゃなによつな……。楽しいことや嬉しいこともあつたはず。確かに、大西が柴崎さんと仲良くするのは嫌だと思つし、そんなことを思つてしまつ私自身も嫌だつた。

でも、この想いは譲れないから……。
だから私は、頑張つて成功させたい。

「私ね、もしかしたら……怖かつただけかもしれない。周りのみんなのよつに傷付くのが怖かつた。恋に臆病になつてたんだ」

「うん。それに気付いたら、もう大丈夫。口口口は口口口らしく、焦らなくともいいからね？」 私も応援してるから

ぎゅっと千恵に抱きつく。

千恵はいつも応援してくれてたんだね。
だからいつも私に、恋してるつて気付かせようとしてくれたんだ。
私、全然気付いてなかつた……。

「ありがとう、千恵。私は頑張るよ。大西に振り向いてもらえないかもしぬないけど……後悔しないためにも、精一杯のことほしいたい」

「それでこのコロコロ！ それに私、夏休みとかに逢いにくる
し、手紙だつて書く。だから悲しがることはないんだよ？」

そつか……。

そうだよね。手紙だつて書けるし、逢いにだつていける。一度と
逢えないってわけじゃないんだ。

「それじゃ、私は手伝いがあるから。口口口も早く帰った方がいいよ？」制服のままだし

あ……。無我夢中だったから家に帰らないでそのまま来ちゃったんだ……。

これは寄り道だなあ。

でも早く帰らないとすぐに空が暗くなっちゃう。

「うん。帰るね。また明日」

「また明日！　あ、口口口」

足をとめて顔だけ千恵に向ける。

千恵はぱたぱたと駆け足で走つてきたり、くすくす笑いながら呟いた。

「挨拶とかしなきゃダメだよ？」大西にも、槇野にも」

槇野？

槇野つて……隼人！？

な、なんで千恵が知ってるの！？

私……隼人のこと、千恵に話したつけ？

「槇野は女子から人気があるから有名だよ。爽やか男子ってね」

ああ。

真琴も前に言つてたような……？

隼人は確かに爽やかという言葉が似合つ男子だと思つ。周りにき

うきうきした光とか飛んでそづ。

「じゃ、またね！ 気をつけてねー」

千恵がぶんぶんと手を振つてくれるの、私も負けないくらいに手を振つた。制服で、しかもこんな時間に何をしてるんだろうな、私。時間は六時を過ぎていいし。帰つたらきっと『ご飯が用意されてるだろ？』みんなは食べてるはずだから温め直さないと。冷えたご飯は好きじゃない。苦手な方だ。ぱさぱさして、美味しいねとか言えない。食べようと思つたら食べれるけど、普段は好んで食べない。好みがあるんだろ？

「ただいま」

返事は求めているわけじゃないので、早足で服を手に取ると、制服をハンガーにかけて吊つておく。ブレザーにしわとか寄せたくない派なんだよなあ……。

「ノンロ、『ご飯食べるだろ？』 今、温め直すな」

お父さんがおかずを持つて電子レンジで温め直す。帰つてきたばかりなのだろう。仕事着を着ていて、顔は疲労といつものが浮かんでいる。

お父さんが家族のために一生懸命なのは私にも分かる。だけど、なぜか好きになれない。幼い頃に遊んでもらつたことがないから？ 家にいてもそんなに会話しないから？ 私つてひどい娘だな……。

「はい。温め直したから冷えてないと思つが……。残さずに食べるんだぞ」

「分かってるよ。私も、もつ中学生なんだから」

箸を取つてホウレン草の炒め物を食べる。味付けは変わってないと思う。……「うん。」」飯を食べ終えると、風呂に入つて布団に倒れ込む。今日は……いろんなことがありすぎて、疲れた。恋を認めたり、千恵が転校することを知つたり。疲れを癒すために目を瞑つた。

今日の朝はどきどきと胸が高鳴る。隣で歩いている千恵はにやにやと面白そうに笑つてゐるし。

「あ！　あれ、大西じゃない？」

見てみると、隼人と並んで歩いている小さな影がある。隼人と大西は友達であり、ライバルだと言つていたから仲良し。一緒に登校するよね。

「頑張れ！　ハハロー！」

強く背中を押されて、目の前にはにこやかに笑う隼人と、びっくりしたような大西の表現が目に映る。

「、ここで勇気出さなくて、この先どうするの私！

「お、おはよう……大西と隼人」

千恵が後ろで微笑んでいるのがなんとなく勘で分かる。挨拶も出

来なくて、この先の恋をどうやって頑張れるというのかな。見ているだけじゃ、きっといつか後悔する。見ているだけじゃ、満足出来なくなる。

大西はしばらくきょとんとして、瞬きを繰り返すと爽やかとはいえない、きらきらした笑顔で笑った。

「おはよ。星野」

その笑顔は隼人とはまた違う、綺麗な笑顔。ほんのりと頬を紅くさせて、嬉しそうな笑顔。

私が見てきた大西の中で一番好きな笑顔になつた。前に好きだったのは、部活の時の笑つた表情だった。夕日と重なつて、かつこよく見えた。

この笑顔をまた見たい。

これが大西と私の、最初の始まり。

「口がついに認めました。挨拶から始まるって素敵です。後悔したくないって思つて行動るのは良いことだと思います。私の場合はなかなか積極的に出来ないので、積極的な人が羨ましいです。

o n e s i s d e d l o v e - 1 2 癒えない傷（前書き）

冬が終わります。中一編はだらだらしただけですね。進んでいるのかな？

冬に「蜜柑色」の意味が微妙に出できましたが、分かった人っていますかね？

さつきの朝は最高だつたなあ……。会話を挨拶でも出来るなんて。顔、にやけてないかな？ 口元が緩んでいるのが私でも分かつた。また大西と朝逢つて、挨拶出来たらいな……。

「……さん？ 星野さん？」

隼人の声で現実に戻される。朝に逢つたのは隼人も同じで、行くクラスが同じだから別々に行く理由もないから、隼人と一緒に六組へ向かっている最中。

千恵たちの四組も同じ校舎で、すぐ近くなのだけど……けんかのようないい合いを無視しておいてきた。

隼人が「棗はほつとけばいいよ。僕、星野さんと話したいし」と言つので、一人きりで階段を上つている。

大西が気になるけど、千恵が変なことをいうはずないので、黙つて隼人とクラスへ行つてゐる。

棗は……どう思うんだろう？

付き合つてると、思うのかな。

隼人と私つて恋仲つていうか、恋愛感情なんて全くない。

隼人はかつこいいし、人気があるから女の子なんて選び放題じゃないのかな。ん？ 選び放題？

隼人つて好きな女の子、いるのかなあ……？ 聞いたこともないし、聞く気も全然なかつた。関係ないから、で終わつていた。一度くらい、聞いてもいいよね？

「隼人つて好きな女の子、いる？」

何気なく聞いたつもりだつたのに、隼人は驚いた表情を向けると、考えるようにして黙り込んだ。動揺しているのか、聞いてほしくな

かつたのか……。き、聞かない方がよかつた?

「そうだな……。いるといえぱいるね。前から気になつてしまふがないんだよね」

「へえ! どんな女の子?」

隼人にもいたんだ! 好きな女の子つてどんな女の子なんだろう?

隼人が惚れるつてくらいだから、可愛くて優しい女の子なんだろうな……。

「うーん。初めて見た時に一目ぼれつてやつ? 可愛い子だなあ……つて。仲良くしてゐうちにどんどん惹かれていつたんだ」

「うわあ。隼人なら、きっと振り向いてもらえるよ! 応援してるね!」

隼人は「ありがとう」と言って笑ってくれた。爽やかだなあ、本当に。上手くいくといいな、隼人の想いも。

「でもね。その女の子は僕じゃなくて、他の男の子が好きみたいなんだよなあ。僕がいくらアピールしても、相手は鈍感な子だから気付いてくれないし。そこがまた燃えるけどね」

他の男の子が好き、か……。辛いな、隼人。好きで仕方ない人が、自分じゃなくて違う人を見ていたら……。自分でその人が振り向いてくれないと分かつてしまつたら……。

私はきっと、耐えられない。

隼人はいつもそんな想いでその人を見ているのだろうか。悲しい

想いで、その人と話すのだろうか。

私に隼人をどうやって応援出来るのかな。下手な励ましじゃ、だめだ。

「隼人は……頑張ってるんだね。私も頑張るから……隼人も頑張ってね？」

上手く言えないけど、私にはこれしか言えないから。

隼人の想いは実ってほしい。実って、幸せな表情をして「上手くいったよ」と笑ってほしい。

「ありがとうございます。僕も頑張るよ。……最後まで、諦めたくないんだ。あの子は、譲りたくない」

よかつた。

隼人が諦めないって言つてくれた。譲りたくないって、すごく好きなんだな。

そんなふうに強く想われるってとっても幸せなことだよね。幸せ者だな、その女の子。

「よし。教室に着いたから、この話はお終い。秘密にしといてね？　好きな人を知られるの、騒がれそだから苦手なんだ」

「うん。隼人と私だけの秘密だね。また、時間があつたら話そうね」

上靴に履き替え、教室に入った。がやがやと騒いでる男の子のグループを避けて、自分の席に着く。鞄を置いて後ろを向く。後ろの席は真琴の席。

真琴は机に伏せて、寝ているように見える。朝早くに来てるのか

な?

真琴は私より断然早い。何時に家を出てるんだろう?

「おはよー、「口口……」

「おはよー、真琴」

顔を上げた真琴に、きょととした。耳は赤いし、潤んでいるし……泣いていたんだつてすぐに分かった。

こんな真琴、前にも見たことがある。

いつだつたか、マンションの前で蹲つていた。泣き顔で、理由を聞いてもかわされたつけ。

とりあえず、このまま教室にいれば真琴が泣いたつてことに誰か気付くだろう。場所を移動して、話を聞こじつ。

「真琴。少し話を聞かせてほしいんだけど……いい?」

確認してみると、真琴は小さく頷く。顔を隠しながら、保健室に向かう。保健室の先生は、悩みをなんでも聞いてくれる。精神的に辛い人や人間関係で困っている人……そんな人の悩みを聞いてあげることで本人の心は軽くなるんだとか。

「誰もいない。先生もいないや。中に入つて、話を聞かせてね?」

ソファに真琴を座らせ、その隣に私が座つて背中をそそて落ち着くよに、何度も何度もわかる。耳が潤んだと思ったら、ぽたぽたと下に落ちて行く。

「こわ、こよ……。女子が怖いよ。私の傷が……また出来る」

「うん、うん。ゆっくりでいいよ。少しずつでいいから」

真琴は精神的に疲れているかもしれない。女子が怖いって、どんな過去があるんだろう。想像していたよりも深く、たくさん傷ついた過去かも……。

「わ、たしね。小学校の時に……仲良かった女子が、急に私を無視して。とっても怖くて、人と……特に女子と関わることが苦手になったの。クラスの、女子を見るとそのことを思い出しちゃって。時々、泣きそうになっちゃって」

真琴の、心の傷。癒えない深い傷はどうやらいいのだろう。私は、何の役にも立たない……。

真琴はこんなにも辛い思いを一人で抱えていたといつのこと。どうして気付いてあげられなかつたんだろう。

「聞いてくれてありがと。私のことほいいから、教室に戻つた方がいいよ」

時計を見ると、チャイムが鳴るまであと五分。急いで走つたら何とか間に合つ。

でも、真琴を一人にしていいの？ 不安定なのにほつといていいの？ いいわけないのに……。

「あら？ お客がいたのね。あらあらー。そこの可愛い女の子！ どうしたの？」

保健室の先生が帰つてきたみたい。先生が手招きをして先生の目の前にある椅子に真琴を座らせる。先生が手招きをして先生の目

真琴はおとなしく椅子に座ると、顔を俯けた。先生は真琴を心配そうに見ながら、私に微笑むと「戻りなさい」と穏やかに言った。真琴を不安に思いながらも、頭を下げて教室に戻った。教室に戻つて担任の先生に事情を説明すると、自分の席に座る。
私には何が出来るんだろう……？

「ココロ！　ビビしてそんなに上の空なの？」

帰り道、千恵が怒つた表情をして聞いてきた。

真琴のことを話してもいいのかな？　人の傷つて簡単に話していいわけない。

どうしよう……。

千恵は信用してもいいんだけど……勝手に言つていいの？　本人のいないところで。

「真琴でしょう？　ココロって嘘が下手。そんなに深く考えないでもいいよ？」

「で、でも…」

どうしてそんなこと言えるの…？　真剣に悩んでいる真琴の力になりたいのに……軽く考えても、どうにもならないはずなのに。

「私が言いたいのは、そんなに深く考えても仕方ないってこと！　真琴の力になりたいのなら、ココロが真琴を支えればいいんだよ。うじうじしないで、いつも通りにしてあげればいいの」

それは納得。誰だつて急によそいへられたら心地良いとはいえないよね。

いつもよつこ、何もなかつたよつこして。辛いなり、傍にいてあげればいい。

それだけでも、少しあは心が楽になると信じて。

「ありがとう。千恵には助けてもらつてばかりだね」

千恵、いつもありがとう。助けてもらつた分、今度は私が千恵を助けられるように。

千恵に何かあつたら、すぐに飛んでいく。絶対に。

「じゃあね」

千恵の後ろ姿を見送り、冷たい風が頬に触れる。

私もそろそろ帰るつ。雪とか降つてきたらどうしたらいいのか分からぬし。最後に後ろを振り返つて、足を進めた。

それから一週間くらいい経つた頃、だらうか。

千恵が引っ越した。見送りに行つたけど、時間がないから話すことさえあまり出来なかつた。手紙を書こうにも、住所が分からぬ。私つてどれだけ抜けてるんだろ……。

「あ。見て見て、桜の木が蕾をつけてる~」

美咲が学校の校庭にある桜の木を指差した。綺麗な桜の花。日本では歴史があるんだよね。花が咲くのは、あともう少しかな。

「まだ冬だけど花も負けずに頑張ってるんだねえ~」

もうすぐ、別れと出会いの季節がやってきます。

o n e s i s d e d l o v e - 1 2 療えない傷（後書き）

隼人にも好きな人はいたんですね。可愛いのか美人なのか……。隼人は笑顔が可愛い子とか、優しい子が好みな気がします。

冬では棗とココロが仲良くなつたかなあ？

友情も多くかけてよかったです。

ちなみに次回は中一編が始まります！ 起承転結でいうと「承」の部分になります。

o n e s i s d e d l o v e - 1 3

名前呼び（前書き）

つこに一年生編です。一年生編の時は隼人と「ココロ」でしたが、二年生編は棗が多くなるかな、、と思います。

春つてとても素敵な季節だと思つ。生命の誕生もある春は、素晴らしいんだけど……今はそつ思える余裕がない。

「……嘘」

春になつて学年がひとつ上がつたのでクラス替えというものがある。三年間、同じクラスでもいいと思うけど、たくさんの人と関わるためにもあるし、苦手な人とも仲良くやつていかないとダメだということ。今日がクラス発表の日だったから、少し不安だつたんだけ……。

「大西と、一緒のクラス。隼人は違うクラス。美咲とも同じクラス、かあ……」

美咲とは嬉しいけど、大西も一緒なんて。好きだと意識してから目を合わせるのも恥ずかしいのに。同じクラスなんて、緊張するに決まつてゐ！

「良かつたね～。大西と一緒にだねえ」

美咲、絶対からかつてゐな……。嬉しいといえば嬉しいんだけど、照れくさい……。

せめて隼人がいてくれたら助けを求めることが出来たのに。隣席になることはないだろう。

そこだけが救いかもしれない。好きな人が隣席つて……。授業どころじやない！

でも、頑張らなきや。後悔はしたくないんだから。

「柴崎さんも違うクラスみたい。これなら、大西と思いつきり話せるね~」

にやにやしてる美咲に軽く「そうかもね」と返事をしておく。柴崎さんが、大西に近付くことだって出来るんだから、油断出来ない。

「さつきからなんだよ? 大西、大西つて」

横を見ると大西が不機嫌そうに立っていた。聞いてたんだ、すっかり聞こえないのかと思つたよ。

「別に~? 大西には関係ないもん~! 女子の話なの~、女子の~」

美咲はゆっくりして言つてるからかもしれないけど、私には美咲が大西におちよくなつていてるよう見える。美咲がゆっくりからかもしれないが。

「ふーん。まあ、関係ないし。とりあえず名前を嫌がらせのように大声で言ひうの、やめてくれよな」

声、大きかつたかな? 普通だと思つんだけどな。。。確かにみんなに聞こえてたら恥ずかしいよね。こそこそ話していくても悪口を言つてるよう見えるから、一人だけの時に今度話そつと。美咲は「「めんねえ」と軽く謝ると再び話を掘り返す。

大西がどこかへ行つたから良かつたんだけど.....本人いたらどうなつていたのだろう?

「とりあえず~。これはチャンスなんだから! いっぱいア

ピールするんだよ～？」

美咲はそう言つて大西に田線を向ける。ジッと見ているものだから、気になつて振り返つてみる。

そこには、柴崎さんと仲良く話す大西の姿があつた。

「早く大西を口口口のものにしなくちや、他の子とくつこちやうかもね～」

前から思つていたけど……この時になつて思い知らされるなんて。私からも、積極的に話しかけないといけないな。本当にこのままじゃあ、柴崎さんにとられけりやつから。

「教室に行こ～。席とか確認したいし～」

美咲はことんマイペースだな……。

でも、席を見たいのは事実だし、早めに教室に行つておきたいのも、また事実。時間は余るだらうけど……その分余裕が出来るからいいか……。

「うん。行こ～！ 隣席、気になる！」

階段を上り、三階に着くと私たちの教室に入る。綺麗に並べられた机に、ピカピカな黒板。教卓にはどつたりプリントがある。

「あ！ 黒板に席が書いてある紙がはられてるよ～！」

美咲が覗き込むと残念そうに表情を崩す。嫌な席だつたとか？ はたまた、別の理由？

私も席を確認するため、紙を覗く。見方があつてゐのなら、私の

席は真ん中の列の後ろから一一番田。

大西は右側の廊下側の、前から二一番田。距離は離れている。

美咲は廊下側の列で、後ろから一一番田。班は違うものの、かなり離れてはいなく、安心した。

「大西とは離れてるね……。」いつなつたら、こっちから何か仕掛けるしか……」

美咲、何を考えているの？ 気のせいだつたらいいのだけれど、変なことを考えてないよね？

ましてや、大西と私に何か仕掛けるつもり……？

そ、それはだめ！

「美咲！ 計画立てなくていいよ！ 私自身で頑張るし。チヤンスだつてあるし」

美咲が大きな目を細めて私を見た。一ヤリと笑つて、悪戯をしたくてたまらない小さな子供に似ている。

どうしてそんな表情になるのか分からなくて、首を傾げた。

「計画なんて立てるわけないじゃない。」口々口がどんな行動とるのか気になるし、大西がどんな表情するかも楽しみで仕方ないのに！ 私は黙つて見守つてゐに決まつてる~」

思いつきり、はめられた……。楽しみにしてるつて、すくなく目を輝かせて言つたけど、それはそれで大西に悪い気がする。

どんな表情をするのかを楽しもれでいるのだ。悪趣味だといふか、好奇心があるといふか……。

「星野？ 教室にいたのか？」

大西の、声……。

私の焦がれている声。

その声で名前を呼ばれたら、気付かずにはいられない。

『星野』と呼ばれるだけで嬉しいのに、『口口口』と呼ばれたら……顔が真っ赤になるんだろうなあ……。

「ああー。捗してもいなかつたから、焦つた。教室にいたんだな」

「捗して、た……？」

大西が私を？ 本当に捗していたの？

それはどんな意味？ 普通に受け取つてもいいの？

大西の言葉を信じていいの？ お願い、その意味を教えて——

「え、あの。俺何言つてるんだろ。と、とりえず……たまたま話したくなつたつていうか……」

「ふうん。でも顔が真っ赤だよー？ 息も切れているし、走つてきたんじゃないのー？」

美咲が鋭く突つ込みながら一いや一いや笑うと、大西が美咲を睨み付けた。

美咲は怯えた様子はなく、知らん顔をしている。満足そうな表情。人をいじるのが好き、なんだな……。

私も気をつけなきや美咲にいじられる……。

「クラスが気になつただけだ！ ……俺の席は、ここか。ま

あ悪くないかな」

席につくと、顔を伏せる。眠いのかな？

私も自分の席について、やることがないので外の景色を眺めた。桜の花びらが満開で風が少し吹くと少しだけ花が下へと散る。

それだけでも綺麗なんだから、桜吹雪になつたらどれだけ綺麗なんだろう。桜吹雪は風が強く吹いて、たくさんの桜の花びらが舞う。前に見たのは五年前。授業中に窓を見ていたら、桜吹雪が起こつてあまりの綺麗さに声が出せずに、しばらく見入つていた。

また見れるかな。今度見るなら……大西と見たいと思つるのは私のままなのかな……。

「あー。ここが新しい教室かあ。心機一転、また頑張らないとね」

「好きな人と離れちゃつたあー！　彼が他の子を好きになつたらどうしようかなあ！？」

声に反応して見てみると、教室には人がさつきより多い。

私が窓を見ている間に来ていたみたい。声を出していた女の子は髪が長くておとなしそうな子と、派手な茶髪の子だった。

「はい！　席着くー！」

担任の先生であろう、髪を結つた女教師が威厳のある声を響かせ、みんなは慌てて席に着く。

私は元々座つてたから慌てる必要はなかつたわけだけど。

「進級おめでとう。このクラスになつたからには、クラスのルールをしっかりと守つてもらおう。いいな？」

厳しそうな先生だなあ……。眠い、けど寝たらだめだ。頑張れ、
私……。

いつの間にか話は終わっており、みんなは帰る準備をしていた。
私も軽い鞄を持ち上げ、美咲の席に行こうとするべく呼び止めら
れた。

「悪いが星野、これを大西に持つていいでくれないか?」

先生がゼッケンを持ちながらため息をついた。先生の目に映った
のがたまたま私で、だからこれを渡せと。

それだけなのに、顔が緩むのが分かつた。話すチャンスが、早速
訪れたのだから当たり前といえば当たり前。

「分かりました。大西に渡せばいいんですね」

「悪いな。あいつ、持つて帰るのを忘れたようだ。迷惑かける
が、頼んだぞ」

受け取つたゼッケンを握り締めて、美咲と一緒に大西を捲す。
美咲は眠そうにあくびをして体育館前に立つた。

ここで男バスが練習しているんだな。中へ入ると、大西がボール
を転がしていた。

私に気付くとボールを手にしたまま、「どうかしたのか?」と問
い掛けてくる。

「ゼッケン。忘れてたでしょ?」

ゼッケンを見せつけるために手を出すと握り締めていたためにク
シャクシャしていた。怒る、かな……?

「んなにクシャクシャにしたんだもん。謝つておいた方がいい！」

「大西、『めん』。クシャクシャにしちやつたね……」

キヨトンとした大西の表情に目を逸らす。恥ずかしくなつて、目を合わせられない。意地悪く笑うのが見えて、背筋に冷や汗が流れた。

「気にすんなつて。でも、悪いと思つてんなら……ひとつ聞いてほしいことがあるんだけど」

「な、何？　出来る限りのことない」

「うしてそこまでしないといけないのか、疑問に思つたけど言つのはやめた。少しば反省してるけど、言つことを聞かなくてもいいのじゃないのかな。嫌われるのが怖くて、言えないけど。

「俺のこと、『棗』って呼べよ。これからは『大西』じゃなくて『棗』だからな」

「は、はあ？　なんで……名前で呼ばなきゃいけないの？」

大西を名前で呼ぶ？　好きな人の名前を？

緊張し過ぎて倒れそう……。幸いなことに体育館には大西と私しかいない。一人だけの空間は静か。

「隼人のことだつて名前で呼んでるだろ……。なんか氣に入らないから。俺のことも呼べよ」

単なる気まぐれか……。

でも、これで大西と近付けたと思つていいんだよね？

友達関

係になれたつて少し自惚れていいんだよね？

「ほら、呼んでみろよ」

「な……なつ、棗」

自分でも分かるほどに声が小さく震えていた。名前を呼ぶつて、こんなに緊張することだったかな……？

隼人の時は戸惑つたものの、こんなに緊張しなかつたのに……。私はやっぱり、大西のことが……。

「小さくて聞こえない。俺に聞こえるまで呼ばせるからな

「な、棗……。棗。棗！」

必死になつて大声で叫ぶと、相手は満足したよつて笑つた。その表情が少し真つ赤で嬉しそうだったのは、きっと私の見間違い。

「ちゃんと、呼べるじゃん。これから俺を呼ぶ時はそつやつて呼べ」

「うん。おお……じゃなくて、棗」

顔が熱を持ちながら逃げるよつて走つた。恥ずかしい、恥ずかしい……。

彼は、いつも私を惑わす。泣きたいほどに幸せで、苦しいほど切なくて……。

もう私にはどうすればいいのか分からぬ……。

「大西、棗」

もう一度呟いてみると、甘く響いて驚いた。大西……じゃなくて、
棗の名前ってこんなに甘かつたかな？
棗の声が聞きたいから、用事がなくても名前を呼んでしまいそうだよ。

「大好きだよ」

名前を呼ばずに、落ち着くために息をついた。

やつと名前呼びまでの仲になりました！

隼人だけ呼びすてなのは特別な気がしたので、棗も名前で呼べる
ように話を調整しておきました。今回は棗とココロですね。

いつかココロ視点ではなく、棗視点や隼人視点を書いてみたいで
す。

一年生編になつて、隼人と棗の会話です。話を書きながら、爽やかな人つてどんなのだろうと思いました。

私は『隼人』という人物は好きですが、中々性格を掴めないでいます。優しいのか、意地悪なのか……。棗は分かりやすいですが。

私が美咲の元へ戻ると、待つてましたと言わんばかりに笑顔が咲く。鈍感なはずなのに、棗と私のことに関するては妙に鋭い。何かあると棗の話をして、私を動搖させるのが楽しいと言つてはいる。

「口の焦つた姿を見るのって楽しい～。からかうのも楽しいけどねえ～」

美咲からしたら、初恋でこんなに戸惑つてゐる私を見るのは楽しいんだろう。何せ、ずっと冷めた思いで恋なんて出来なかつたんだから。

でも、棗を好きになつてひとつ分かつたことがある。分かつたと いうより、気付いたこと。恋は人を信頼しないと出来ないんだつてこと。信頼してない人を好きになれるはずがない。例えば、苦手な人がいるとしてその人を今すぐ好きになれる？ 簡単に、好きになれるはずがないんだ。少なくとも私は、棗を信頼してゐるんだ。他の人の見方で変わるけれど。

「大西と何かあつたんでしょう？ 一人きりの時間は楽しかつた？」

「な、なんで二人きりつて知つてゐるの？ 棗に聞いたの？」

ううん。

棗が言えるはずない。体育館を出でないはずだし、出たとしても私と会うはず。なのに会つてない。一人きりなのを知つてゐるのは……棗と私だけのはずなのに。

「戻つてくるのが遅いからだよ～。勘で言つただけ。それより

……大西を棗つて呼んでるんだ～？」

美咲の質問があまりにもしつこいので、経緯を話した。話さなかつたら、明日また聞かれることは想像出来たから。

美咲はこんな調子だけど、口は堅いから誰にも言わないって信じてる。学校の人も、私が棗を好きなことは知らない。知ってるのは美咲と千恵。学校の中では美咲だけのはずだけど、真琴も薄々感づいてるみたい。一年生の時に相談したことがあるからだろ？

「棗も攻めるねえ。うんうん、楽しくなってきたなあ」

美咲が楽しそうに鼻歌するので、考えることはやめておく。今は今で楽しもう。いろんなことを考えるなんて、私には合わないって分かってるから、ただ突っ走るしかないんだ。計画性がないともいえるけどね……。

「じゃあね。また明日」

「またね？」

分かれ道を曲がり、息をつく。頭から中々離れないでいる、棗との場面。

棗にしてみれば、そんなに考えないで言つた言葉かも知れないけど、私にしたらそれは希望。彼の名前を呼ぶことが出来るんだ。ずっと気になつていた、柴崎さんが棗と親しくする」と。付き合つてるんじゃないかつて疑つほどに。

私の気のせいなんだって思えた。

今日はいつもより早めに学校へ着いた。何となく、早めに起きて早めに来ただけ。静かな通学路。同じ制服の人が全くいない。朝の風景つてこんなものなのかな？

私は足を急がせて学校に向かった。不安になつて、教室でみんなが来るのを見たかつただけかもしない。教室を覗くと、誰もいない。八時前には来たんだから当たり前かもしない。

「あれ？　誰かの鞄が置いてある……。この席つて、誰だつけ？」

「そこは俺の席ですけど？」星野さん

ん？　今、『さん』付けした……？

私をそんなふうに呼ぶのは、限られている。女の子からは『口口』つて呼ばれてて、男の子からは普通に『星野』だから。

隼人？

でも声が違う。嫌味の敬語は使わないだろつし。

「おい！　俺だつて！」

「棗！？　な、なんでこんなに早いの？」

慌てて後ろに下がる。早い時間にいるなんて思わなかつたし、鞄を置いてるからてつきり違う人なのかなと……。

「朝練だつて。教室来たら、誰もいないからさ……。暇だから他のクラスに遊びに行つてたんだよ」

他のクラス……。

それって、柴崎さんのところへ 朝練が終わつたらこつも柴崎
さんに入つてゐるんじゃないの?

柴崎さんが、好きなの……?

「どうした? そんな暗い表情して」

心配して顔を覗き込む。嘘を言つてもどうせばれてしまう。
でも、嫉妬してゐからって言えないし……。
まして、柴崎さんのことを話題にする勇氣すらない。気になるも
のは気になるけど……聞いてもいいのかな?

「そーだ、これ貸してやるよ」

そう言つて片手に持つていた本を差し出す。何の本? シンプルなツルツルな表紙。特に絵が描いてあるわけでもなく、鳥の羽か天使とかがやつてる羽。受け取つてページを捲ると、文章ばかりが書いてある。小説……なんだろうけど、表紙からして恋愛小説か何か? タイトルからしてもそつだし。

「そんな難しい顔するなつて。今、小説にはまつてゐんだ。それ、面白いから読んでみろよ」

「ありがと……。棗が小説を読むなんて、想像出来ないよ」

状態で言つてみると棗がそつぽ向く。

そのままからかいのけど、せつかく借りたんだからゆっくり読もう。感想だつてちゃんと言つておきたいもの。ページを最初に戻して、目を通す。恋愛小説かと思つたら、アクションシーンやファンタジーっぽい、男の子にも読みやすい物語だ。

「これは、確かに面白いなあ……。」

「おはよつ。星野さんもおはよつ」

「あ、隼人！　おはよつ」

読んでいた本を閉じて、廊下側に歩く。

棗に会いに来たのかな？　去年、隼人が棗に会いに行くのはそれほど見たことがないよつな……。

「隼人？　何しに来たんだよ？　特に用なんてないだろ？」

「酷いなあ、棗は。いいじやん。僕がこのクラスに来たつて。それより星野さん、早いね」

いきなり話を振られたので頷くことしか出来ない。今日はたまたま早く起きちやつて、なんて私がいつもギリギリまで寝てるようにな聞こえるし。黙つていれば、棗と隼人があれこれ話すはず。

「星野さんはこれから早く来るの？　なら僕も早く学校に来ようかなあ。朝早くに来て一人だけで話すつて楽しいだろつな」

「んー。これから早くに来れたら来るよ。静かな教室つて好きだから」

理由はもうひとつある。朝早くに来たら、また棗と話せるかもなんて。

隼人と話せるのも楽しいけど、それ以上に棗の方が楽しくて嬉しい、仕方ない。

「あ、僕そろそろ教室に戻るね。誰か来てるかもしれないから
さ」

「早く戻らないと、女子が探し回るんじゃねえの？」 爽やか
男子の隼人くん」

棗の嫌味にも隼人は笑つて「そんなことないけどね」と受け流した。新しいクラスでも人気者になることは予想出来る。顔が整つて、なおかつ爽やかで優しいんだから。去年もすぐ女子に呼び出されてた気がする。

「あ、槙野くん！」 にこにいたんだ！ 捜したよ」

ほんわかたな雰囲気の女の子が隼人に駆け寄り、はにかむ。同じクラスの子なんだろうなって、何となく思った。

それに隼人を見る女の子の目が輝いているのは、気のせいじゃない。隼人のことが好きなんだろうな。

「ごめん。棗といろいろ話したくて。今から教室に戻ろうと思つてたんだ」

「そ、そ、うなんだ……。安心したよ。もしかしたら彼女がいて、彼女に会いに行つてたのかと」

安心したのか、さらに笑顔が輝く。彼女なんて隼人はいないのに。好きな女の子がいるつて言つてたのに。もしかしてこの女の子なのかな？

「隼人の好きな女の子って、あの子？」

廊下を歩いていく一人を見て呟いた。爽やか笑顔を女の子に向ける隼人と、はにかんでいる女の子。中々お似合いだよなあ。

「はあ？ 隼人に好きな子がいる？ デビの噂だよ」

「ほ、本当だつて！ 隼人から聞いたんだもん！」

棗は疑つていたけど、何かを考えているみたいで、黙つたまま。好きな子がいるつて隼人から聞いてなかつたのかな？ ライバルだから黙つてた、とか関係ないだろうし……。

「部活の時に聞いておく。そんなの聞いたことないし。隼人が惚れるほどの子だ。どんなに可愛いんだろうな」

「きつと、すつぐ可愛いよ！ どんな女の子かな？」

好きな子がいるのは教えてくれたけど、誰が好きなのかは教えてくれなかつた。

でも、きつと可愛い子なんだろうな。

棗にも教えてないつてことは、横取りとかされたくないとか……そういうのかもしれない。

そういうのかもしれない。そういえば、棗には好きな子や付き合つてる子はいるの？ 全く知らないし、いたとしたら？ 付き合つてる子がいるのなら……どうすればいいの？

「棗は付き合つてる子とかいるの？」

「は？ 付き合つ？ そんな奴、いねえよ」

とりあえず付き合つてはないんだ。次は好きな人がいるか聞きた

いけど、聞きにくいやなあ……。

もう、流れに任せて聞いてやおうか。

棗が好きだつてこと、分かるはずないから。

「好きな子は？　いるよね？」

聞いた瞬間、棗がこれまでにならうに真っ赤になつて、取り乱す。

こんな反応するつことは……いるんだ。

私、ばか？　笑つて「いるわけないだろ」って言ってくれるのを期待してた。好きな子は、柴崎さん？

「俺、他のクラスに行つてくる。ぐ、変なこと聞くなよ」

慌てて廊下に走つていく棗。隠したつて態度からして分かるのに。棗はきっと、柴崎さんのが好きなんだ。美人だし、仲が良いし……付き合つてると誤解するほど、一緒にいたし。でも……敵わないかもしれないけど、私は後悔したくない。振られると分かつていても、いつかは告白したいって思つてる。今はまだ告白なんて出来ない。告白する勇氣すらない。

「あ……本、借りてたんだ。読んでおこつかな」

机に座つて鞄を置いてからページを捲る。読んでいるのだけど、棗はこんなジャンルが好きなんだなあ、とか小説を読むんだとか棗のことばかり。

「棗……」

好きだと言えば君はどんな表情をするのかな。笑つて「冗談はや

めろよ」と言うのかな。

それとも真っ赤になってくれる? 微笑んでくれる?

私は、どんな反応を期待してなんて言ってほしいのだろう。

「ばか棗」

微笑みながら「ありがとう」なんて……。いつかは言ってくれるのかな?

「俺を好きになってくれてありがとう」
言つことはないと分かっていても。

君が迷惑に思つても、私の想いは止められないんだ……。

「口口が可愛くて仕方ないです！」 一途だけどいろいろ考えて前に進めなかつたり、後戻りしてしまつたり。彼女は『柴崎さん』という人が離れないんでしょうね。

棗といふと楽しいけれど、柴崎さんが頭を駆け巡つてゐる、といった感じでしようか。今は出番がない柴崎さんですが、後々登場しますので

一年生編の春、最後です。次は一年生編夏に突入です。夏は少し変化があらわれる予定です。

柴崎さんと棗に異変が……？

口々口に対する気持ちの変化も？

そして隼人との友情に穴が！？

のような話を予定しています。

時間が過ぎると、クラスに人が集まってくる。席に着いて話したり、宿題したり。さつきまで棗と隼人と私で話していたのは嘘のよう。

美咲の席に目を移すと、まだ来てない。家が学校に近いからいつも遅く来るのは分かっているのだけど。暇で読んでいた棗の本はもう読み終えた。最後の展開がまさか！と思いつアクション。小説って面白いなあ……。今度、買おうか。

それがきっかけで棗とまた話せるかも。

「星野さん。その本なあに？ 可愛い表紙だね」

派手な女の子と一緒にいた女の子が顔を覗かせ興味深そうに、私と本を交互に見る。前に見た時は気付かなかつたけど、この子は背が低い。長いスカートに長い睫毛。少しオシャレをしたらかなり可愛くなるつて私でも分かる。

「は、わ……？」これは棗から借りたもので…

「棗？ ああ、あの……んーと柴崎さんの人だよね？」

柴崎さんの人……？ 何、それ。付き合つてるとか、そんなの？ でも棗は否定してた。有り得ないよ、付き合つてるなんて……。好きならまだ分かるのに。ううん。この子が誤解してるだけかもしれない。

「なんだ？ それ。柴崎の人？ ばかじやねえの」

「あわわ！？ 大西くん？ 聞いてたの？ ただの噂だから気にしないでね？」

女の子は急いで違うところへ行く。彼女を田で見ていたかと思うと、苦笑。

どうして苦笑するのか分からなくて強く本を抱き締めるしかなかつた。

「誤解するな。柴崎とはただの友達。付き合つてるとかないから」

「『』、誤解された方が嬉しいんじゃないの？ 柴崎さんって美人だし。あんな人が彼女なら自慢できる……だろ？」

棗は「はあ？」と不機嫌っぽい声を出して首をポキポキ鳴らしていたが、何を思い付いたのかニヤリと意地悪な表情をする。この表情の時つていつもドキドキする。緊張して、上手く息が出来ない。見られてると思つと変に身体に力が入る。

「柴崎じやあ好みじやないんだよな。俺にだつて好みがあるの。美人だから彼女にするとか、無理があるつて」

お腹を抱えて大袈裟に笑う棗に呆れながらも、ホツとした自分がいた。胸の奥に棗の彼女というのが気になつて仕方なかつた。柴崎さんじやないのが救い。幸い棗は柴崎さんが好みじやないんだし……。

なら、棗の好みつて？

「じゃあ棗の好みは？ 可愛い子？ 優しい子？」

「そこ聞いちゃう？ んー……。背とか関係なくて、一緒にいたら楽しいやつかな。もつと言つなら髪が短い子がいいかな……。ま、長くても好きな子ならなんでもいいけどね」

それは分かる。

私だって棗が好きだから、背が低いのだってバスケに打ち込んでいる姿だってかつこいいと思うの。かつこよさでは隼人の方が何倍もいい。

でも、私には……誰よりも棗がかっこよく見えるの。

「星野は？ 好きな奴とか

「秘密。でも、かつこよくないかもしないけど、私にしたら世界で一番かっこいいと思わせる人」

それくらいに惚れているんだよ。気付いてるの、棗？
君への想いはこんなに強いのに。誰にも負けないのに。
どうして見てくれないのであらう――。

「ふーん。べた惚れかよ。惚気は面倒だからバスね

「惚気なんてしない！ あ、小説読んだから返すね。面白かった

抱き締めていた本をゆっくり緩めて返す。わがままになつていたんだ、私。話せるだけで十分だったはずなのに……。

棗が誰と付き合おうと私には関係ないもの。応援する必要もないし、邪魔する必要もない。好きな人と付き合えたら……どんなに幸せなんだろう……。

「おうーーー」それで小説に興味が湧いてきたら嬉しいな……なんつって！」

「あ、うん。小説って面白いね！ 何か買おうかなあつて

それは正直な感想。次の休みにでも、ファンタジー小説や恋愛小説、ホラー小説を探しに行こうかな。話題の映画小説とかでもいいかも。

そう考えると次の休みが楽しみで仕方ない。ああ……わくわくするー！

「おはよう～。ハハロ」

「わあー？ み、美咲！？ 驚かさないでよ

美咲、本当に心臓に悪いんだから。驚かされるのは慣れないものなんだから、少し優しくしてほしいものだ。

「何話したの～？ 朝から仲良いねえ～」

「秘密だよ。棗と私の秘密の話」

だつて、棗と私を繋ぐものがひとつもないんだもん。だからせめて、これくらいの秘密くらい、いいよね？ 例え棗が私以外の人に教えたって、それでいいから。少しの間だけ……！」

短い一日が終わり、カレンダーに日をやつた。明日は三連休だ……。長いなあ、三日間も棗に逢えないなんて……。

そういうえば棗は隼人に聞いたのかな？　好きな人のこと。隼人が教えるのは想像つかない。

もしかしたら、勝負をして教えるか教えないかを決めるのかも。

「…………」

頭に流れるのは、ただ君の無邪気な笑顔。

目が覚めたのは午前十時。遅く起きたなあ。八時とかに起きるんだけど。

とりあえず顔を洗わなきや。タオルを持って洗面所に向かう。洗顔をして歯磨きをして。服を着替えようかなあー、と服に手をかけた瞬間に家のインターホンが鳴った。誰だろう？　遊び約束なんしていないし、彼氏なんてもつてのほか。訪ねてくる人はいないけど……。

「はい！　どちら様ですか？」

「千恵です。ココロいますか？」

お母さんが振り返り、目で何か言つてゐる。言いたいことは分かるよ。早く着替えて用意しなさい、だろ？　少しばはつてほしい。服に着替えようとしてたんだから。

でも、千恵って言ったよね？　本当に千恵？　三連休を利用
してこっちに帰ってきたの？

そう思つと早く逢いたい、という思いに駆られて財布を持つ手や
動く足が妙に震えた。玄関に立つて、深呼吸をしてからドアを開け
た。目の前には髪を切つて、天然パーマになつてゐる髪型に大きめ
の服。ズボンにスニーカーというシンプルな服装。
私を見て微笑んでいる千恵がいる。

「千恵！久しぶり！　たくさん話したいことがあるの。聞
てくれる？」

「口口口久しぶり！　勿論！　私からも聞きたいことはあ
るんだから」

自転車に乗りながら買い物をしようとした決めるが、前からよく行つ
てた店に向かう。向かつてゐる間、いろいろな話をした。新しい学
校や部活のこと、友達のことや楽しいこと。

私からは一年になつてからどうなつてゐるのか、部活の後輩のこと
と美咲のこと。

あんなに相談して、後押しまでしてもらつた。好きな人のことを
話しているとこんなにも楽しくなつて、とまらなくなる。いつの間
にこんなに好きになつていたのかな……。

「ねえ。口口口に聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ん？　話せる」とならなんでも話すよ

「話せた」とはないはず。変なことを聞かれても、教えなきゃ
いいんだし。

千恵のことだから変なことは聞かないとは思つけど。

「槇野について聞きたいんだけど……。その、槇野から何か言
われてない？　『付き合つてくれ』とか」

「言われてないよ。隼人が私にそんなこと言つはずないよ」

だつて隼人には好きな人がちゃんといるんだから。好きでもない
人に「付き合つて」なんて言う軽い人じやないもん。
それになんで私？　名前で呼んでるのは呼んでるけど、そこま
で仲良くないしなあ。

「鈍感だな。隼人も苦労するね、これじやあ」

「何言つてるの？　苦労するつて……部活はそんなに忙しく
ないはずだよ」

額に手をあてて、呆れた表情の千恵。退屈ならそれでいいけど、
顔に出すことないのに！　久しぶりに逢えて、遊べて私は嬉しい
のに。

とりあえず小説を買いたい。

千恵にも言つておいたから賛成してくれると思つ。多分。

「小説買いたいから、見に行つていい？」

「そうだつたね。本屋に行こつか。小説好きなんだよね」

すっかり上機嫌な千恵を横目に、どんな本を買おつか本当に迷つ。
アクション？　感動？　はたまたホラー？　ホラーつて面白
いんだけど、一人で読んだり見たり出来ない。夜の風呂とか怖くて

後ろを見ながら髪を洗うし。中々寝付けないし。明るい話にしようつ
か。

なんて考えていたら本屋はすぐそこ。遠いわけではないので、すぐ
に着く。周りを見ると人が自転車で道を行き来している。
私たちも自転車だけね。

「ああ。これもいいなあ！　これは映画の小説版だし。どれ
も欲しいやあ」

千恵は輝かせて小説コーナーを見るけど、私にはさっぱり。分厚
いものや小さいもの、上下巻があるもの。

どんな話なのかも知らないのにどれを選べばいいんだろ？

棗が興味のある小説にしたい。戦闘ものかな、やつぱり。

このすごい数の中からひとつだけを選ぶ……。骨が折れる作業。
しんどいかもしぬないけど、棗との会話になるのなら苦痛だとは思
わない。

千恵だつているんだし、手伝つてもらおう。小説に詳しいみたい
だし。

「ねえ。小説選びたいんだけど、千恵も選んでくれない？」

「いいよ。どんなのにする？」

棗との会話になりそうな、そして読みやすくて続編などないもの。
詳しく述べると上下巻がないもの。大きさはあまり大き過ぎない
ものがいい。

千恵は難しい表情を少しうると、手前にあつた本を取り、押
し付けてくる。

「これがいいよ」

「て、適当じゃないの？　これ」

押し付けられた本を見ると英語が並んでいて、表紙はツルツルしていて水色の光が描かれている。疑問に思いながら千恵を見ると「大丈夫だから」とピースサイン。

千恵のことだから何か考えてこれにしたのかかもしれないし。覚悟を決めて、本を買った。

本を買って学校に行くのは久しぶり。教室には誰もいないので、前に買った本を取り出して田に通す。読みやすいな。読んでいると話に引き込まれていく感じ。

「お？　星野もこれ好きなんだ。俺も好きなんだよな」

いつの間にか棗が来てた。本の話……。良かつた。棗も読んでた。好きだと、言つてくれた。

それから棗との本の貸し借りが始まつた。廊下とかを歩いていると「星野！」と呼んで息を切らしながら「これ読んでみるよ」と笑つて言つてくれるんだ。

「ありがとう。棗」

もうすぐ頬との裏がきます。

どうでしたか？ 今回の話は、好きな人と共通な話を出来るのも楽しいですよね。日常にありそうな、じつは普通の会話かもしれません。

ですが人生に一度しかない中学生の青春を感じていただけたら、と思います。

柴崎さんがやつと登場します。美咲は出でこませんが、その分に柴崎さんと「口がたくさん話しています。書いていて楽しかったお話でした。
では、お楽しみトやこせー。

夏は君への想いが増す季節。焦がれて焦がれて、手にしようとしたら夢く消える。大切だから急いではいけないのに。大切だから時間をかけていかないとダメなのに。気付いた時には手遅れ。私の選ぶ選択肢には、間違ばかり……。

夢から田を覚まして、夏服に手を通す。真夏だから太陽が眩しくて、日焼けする肌。健康的かもしだいけど、白い肌には憧れたりしている。漫画とかでよくある……。

「じゃあ、行つてきます」

マンションを飛び出して学校へ早足へ向かつ。朝早く学校に行つて、みんなに内緒で棗と隼人と話す。ささいなことでも、私にしたらとても楽しいし嬉しい。一人と話せるのは、特別だから。教室に着いたけど、誰もいない。棗もいない。朝早くに来ても、一人には朝練があるから話せない時だつてある。しようがないことだし、部活で頑張つてほしいことも事実。でも、寂しいと思う自分がいる……。何考えているの！ 私つたら！

「あれ？ 星野さんだけ？」

声に凍り付く。どうしてここにいるんだろう。校舎は同じだけど、クラスは違うしあの人は私たちのクラスより一階上にいる。私が三

階にいるとしたらあの人は四階なの。」「

でも、あの人はここにいる。きっと彼に会いに来たんだ。そういうやなきや、来る理由なんてないもの。

「ねえ。棗知らない？　捜してるんだけど」

「知らない。朝練じゃないの？」

あの人——柴崎さんに目を向けた。相変わらず美人。何ヵ月ぶりに見るだろう。一年になつてから全く見なかつたし、会わなかつた。このクラスに来ることもなかつた。

なのに、なんでこんな時間に……？

「そう。棗が遅いっていったら朝練しかないものね。ああ。そうだ。棗が来たら言つておいてくれない？　柴崎が会いに来てつて言つてたつてね」

「別にいいけど。柴崎さんに聞きたいことがあるの」

私は決心して聞いてみる。柴崎さんは私を振り返りながら無表情になつた。こつちを睨んでいるようにも見える。そんなことを無視して、気になつていていたことを聞く。

「柴崎さん。棗どどんな関係なの？　付き合つていてるわけじゃないんだよね？」

核心を突いてみた。棗からは聞いたけど……信じていいけど確認しておきたい。付き合つてないのに、付き合つてているような素振り。そんなの、卑怯だ。動搖させるためにこんなことをしてゐなら、柴崎さんに何か文句でも言つておきたい。

「なんか変わったよね。一年の時は人見知りとかで、言いたいことをひとつも言えなかつたくせに。棗がいるから強気になつたの？ ふざけないでよ」

「確かに前の私は、言いたいことも言えずひたすら我慢してた。柴崎さんに棗を取られても、仕方ないんだって。一人は似合つてるから」

柴崎さんは美人で、肩につくかつかないかくらいの髪の長さで前髪を分けていて、白い肌にまいていて短いスカート。鍛えられた筋肉のついた足。強気な目元。いつも何かを企んでいるような口元。柴崎さんに敵うなんて、無理だけど。私は特別可愛いわけじゃないし、美人なわけでもない。

でもね、好きな人が出来たら誰でも可愛くなりたいんだ。似合うようには頑張りたいんだ。棗に似合うためには、凛々しくて優しい子にならないとダメなんだって思つて。可愛い子じやないとダメなんだろうって。私は、棗のために変わりたい。

「そ、う、よ。私と棗は似合つて。棗を必ず私のものにするんだから」

「でも！ 私だつて棗が好き！ 譲れないし、譲りたくない！ 棗は……棗に似合うかは本人が決めるから、私は最後まで諦めない」

柴崎さんには負けたくない。棗をもの扱いしてた人に。まるでゲームの中のキャラを何日で自分を好きにさせられるか、そんなふうに棗を見ているんだろう。

だからって私には邪魔をする資格はない。なら、私は私なりに出

来ることをするだけ。棗が柴崎さんを選んでも、彼は彼にしか分からぬことがあるはずだから。

「あつそう。棗のことが好きなのは前から知つてた。あんな態度をするんだから、丸分かり。私も棗を諦める気は全くない。確かに、棗とは付き合つてないし、友達関係。私にこんなことをいつの納得いかないかもしないけど、棗はあんたを選ばない」

「な、なんで……。なんでそんなことを柴崎さんに言われなきゃいけないの！？ なんでも分かつたような言い方、やめてよー。」

私を選ばない？ 柴崎さんがなんで分かるの？ 棗の想いで分かつていいような言い方……。何を知つてると書つての？ 棗が誰を選ぶのか分かるの？

そんなの、冗談にもほどがある！

「今のは勘。棗は星野さんを選ばないとと思つただけ。私がなんでも知つてゐわけじゃない。じゃあね」

冷めた目で私を見たあと、柴崎さんは廊下を歩いて行く。誰もいなせいが、柴崎さんの歩く音が響く。私はまだ聞きたいことがあるので柴崎さんの腕を引っ張つた。驚いて振り返る柴崎さんを無視して、一番氣になつていることを口にした。

「柴崎さんは……棗が好きなの？」

聞いた途端、柴崎さんの口元が怪しく笑つたのを見逃せなかつた。本当は、棗のことが好きじゃないんじよ？ 私から棗を奪つて悔しい姿を見たいがためなんじよ？

「さあね。私が棗をどう思つていいが私の勝手。星野さんに
は関係ないわ」

「…………」

確かにそうだ。柴崎さんの気持ちは私がなにか言つて変わること
はないし、変わる必要もない。気持ちは自由だから、誰かが勝手に
操つていいものじゃない。また、邪魔をすることも人の勝手だから。

「手、離してよ。星野さんと仲良くなんてないんだから」

「やつ、だけど！　お願ひだから約束して。棗を傷付けない
で……」

柴崎さんが棗をどう思つていても、私がどうにか出来るはずがな
くて。私はばかだから、棗のことを傷付けてほしくないって思うだ
けで精一杯で。お願ひなんて、そんな綺麗なものじゃない。私の勝
手な思いを押し付けてるだけ……。

「棗を傷付ける？　そんなことしないわよ。棗とは付き合つ
てないんだから。それに棗が私を好きにならないとダメじゃない」

「分かつてる。でも棗は柴崎さんを気にしてるから……」

だつていつも一緒にいる。前に見ないふりをしてたけど、一緒に
下校しているのを見たことがある。一人ともバスケ部だからまた
まだつて、見た時は無理矢理そう思つていたけど、時間が経つにつ
れて分かつたんだ。あれはどちらかが待つていたのだと。信じたく
ないけど、棗が柴崎さんを待つてたんだ。あの日は男バスの方が早
く終わっていたから。柴崎さんは遅かったのに。もう、棗の気持ち

は柴崎さんに傾いているんだって、私でも分かるよ？

「星野さんはそういうふうに見えるだけ。強気はどうしたの？
諦めないんでしょう？」

私の反応を楽しんでいる柴崎さん。強気なんじゃなくて、あれは勢いで言つてしまつただけといつか……。本当には思つてたんだけど。あんなに強気で言えたのは初めてかも知れない。いつもは流れているから。

「柴崎さん。ありがとう。私、棗にアプローチしてみるよ」
「応援もしないけどね。棗が来たら伝えといで。柴崎が待つてた、つて」

柴崎さんは優雅に微笑むと階段を軽く上つて行つた。後ろ姿を見ながらなんともいえない気持ちになり棗の机に触れた。授業中はいつも伏せて寝ている君。寝てる時に思い浮かべているのは、誰？君の笑顔も君の全ても……全部、私が独り占め出来たらいいのに……。

「棗は、誰が好きですか」

机に座つて君と同じように伏せてみる。誰も来てないからいいと思う。少しだけなら……。

そんなことを思いながら、机に問い合わせてる自分がおかしくなつて、自分の席に戻つた。手を机の中に突つ込むと人が描いてある紙を見つけた。柔らかい笑顔で、優しい雰囲気を漂わせている男の子。去年の冬に描いた、隼人。輪郭しか描けてない中途半端な絵は、何ヵ月も放置されたまま。

「私、何忘れていたんだろう……。描くつて言つたのに」

廊下を走つて階段を素早く上る。隼人に会つて話して……。それからのことは全く考えていない。ただ、会いたくて仕方なかつた。柔らかい口調で私を呼んでくれる、あの男の子に今すぐ会いたい。

「…………隼人！」

教室を覗いたけど誰もいなかつた。朝練？ それにしては遅い気がする。長引いているだけなのかな？

教室に戻ろうと、階段を下りていたら大好きな声が聞こえた。

「隼人ー、俺疲れたから来るならお前から来いよな」

「朝練で？ 今日はまだ軽い方だつたじやん。それに僕は言われなくても、棗のクラスには行くよ。会いたい人がいるんだから「棗と隼人だ……。そつか、朝練だつたんだ。あんなに不安になつてた自分はなんだつたんだろう……。」

それにしても、隼人の『会いたい人がいるんだから』つて……隼人の好きな人つて私のクラスにいるつてこと！？ そうしたら、隼人がその人に会いに来てたつてこと……なんだ。

「あれ？ おはよう。星野さん」

「わあ！ お、おはよう。隼人」

急に声をかけられたので、隼人に変な声を出しちやつた……。いつもと同じ笑顔を浮かべているから、それほど気にしてないみたい。

隣に棗はいないから……教室に戻つたんだろうな。

「隼人！」「これ！」

「ん？ あー、絵？ 嬉しいなあ、ありがとう」

はにかまれて恥ずかしくなつて、顔を真つ赤にしながら教室に戻る。机に座りながら寬いでいる棗が、いた。

「おはよ。棗」

「おひ。おはよ星野」

笑顔を浮かべられて何も言えずにいると、棗が何か思い出したのか「あ。そういえばさあ」と声をかけてきた。

「隼人の好きな奴、教えてもらえなかつた。でも、大体予想はついた」

「え！？ 隼人の好きな人、分かつたの！？」

大声で言つてしまい、慌てて口を手で隠す。興奮して、つい……。でもやつぱり隼人は教えてないんだ。知られたくないから言わないんだよね？ なら、私も黙つていた方がいい。

「あ。柴崎さんが棗を呼んでたよ」

「は？ 柴崎が？ 一体なんだろ」

本を机に置くと、慌ただしく走つていく。私はその後ろ姿を、引

を止める」となんて出来なくて、ただただ黙つて見つめていた。

一年生編の夏とは少し違う心情を感じていただけたら嬉しいです。棗と一緒にいて気付くこと、傷付くこと。成長していく口々口をあたたかく見守つてくれたらありがとうございます！

棗が少しずつ、口々口との距離が近くなっています。それは隼人も同じで、口々口も一人の間で揺れています。棗が好きだけど、隼人にもドキドキさせられちゃいます。でも、恋愛っぽくもっと甘くしてみたいですね。

棗が柴崎さんのところに行つて、何分経つのかな……。軽く十分は過ぎてる。なにを話しているの？ 棗は柴崎さんの想いに気付いているのだろうか。

あの時はごまかしていた柴崎さんだけど、私がからしたら柴崎さんは棗が好きなんだと思う。だから、棗に振り向いてもらおうと頑張るんだ……。

「柴崎さん、綺麗だから鼻の下を伸ばしているのかも」

「そう？ 棗はそんな軽い奴じやないよ。多分ね」

横を見ると、隼人が笑顔で机に座りながら顔を手に乗せていた。いつの間に、とか思つても私が気付いてない間に来たのだろうと思えば、それほど不思議じやない。

隼人はあぐいをしながら棗の席の教科書を捲る。細くて白い手から目が離せない。隼人は手まで綺麗。全てが綺麗な人……。

「星野さんも気になるの？ 棗の教科書」

私を見ては、微笑む彼。どうやら勘違いしてるらしい。私が見ていたのは棗の教科書じやなくて、隼人の手なのに。

隼人の隣まで行くと、私も席についた。隼人と隣席。去年も隼人と隣だつたな。いろんなこと、話して先生に注意されたこともあつた。その度に隼人ファンの女の子から痛い目線を受けていた。今は、隼人の隣は私じやないけれど。

「星野さんと隣席なのは久しぶりだなあ。よく先生に怒られた

よね

「うん。授業なんて耳に入らなかつた。……隼人」

名を呼んで、教科書を持つている指に手を伸ばす。少し冷たい指と手。静かに隼人の手を握つた。

隼人は困つた笑顔をしていたけど、意地悪な笑顔になつて強く握り返してくれた。

「星野さんの手、小さいね。女の子の手はこんなに小さかつたかな？」

「隼人が大きいんだよ！　バスケしてたら手も大きくなるの？」

私よりも大きい手は、男の子の手。こんなに簡単に握つてしまつたけど、隼人が嫌がらなかつたから嬉しい気持ちと安心する気持ちが私の心を揺さぶつた。

負けないようになると私もさつきより力を込めて、強く強く隼人の手を握り締めた。

どれだけそうしていたのか、分からぬ。棗が声をかけてきたから隼人と繋いでいた手を離した。さつきまでお互に強く握り合つていたのに、驚くほど簡単に隼人の手は離れていつた。

目の前で怒つた表情の棗に隼人は気付いてない素振りで「おかげり」なんて言つてゐる。私は棗に目をやりながらも、隼人と繋いでいた手が熱を持っていることに気付いて、その手を片方の手で握つた。

「なんで、隼人が俺の席に？　なんで星野が隣に座つてゐるんだよ？」

「怒らないでよ。いろいろあつてさ。内緒だよね。星野さん？」

いきなり私に聞かなくても……いいのに。内緒、と言えばいいのかな。隼人は手を握つていたこと、言つつもりはないみたいだし……。私も出来れば恥ずかしくて、言いたくないし。話を合わせていた方がいいよね。うん。

「な、内緒だよ」

「ほら。星野さんと僕の秘密だからね。これ以上、触れて欲しくないなあ。怒られても困るかな」

ひ、秘密……？　そこまで大袈裟なものじゃないんだけど。
それより、怒るってどうして？　柴崎さんとなにかあつたの？
喧嘩でも……したのかな？

「隼人、教室に戻れ。今は話したくない」

不機嫌な棗が隼人を睨んで、今にも喧嘩しそうな勢い。なんだか恐くなつて、二人から少し距離をとつた。特に棗が……とても怖い。逆に隼人は肩を竦めて息を吐くと、廊下に出て小さく私に微笑んだ。ドキリ、として隼人がいなくなるまで見ていたら、乱暴に教科書を机にしまう棗と目が合つ。

「…………」

「…………」

長い沈黙。目を合わせていても、棗はなにも言わない。私もなに

も言えない。隼人のことがあつたから余計に棗とは気まずい。

棗が怒りのオーラ全開で、話しかけることすら怖い。

棗の目線が怖くて、私は隼人を追いかけた。

足音に気付いた隼人が振り返る。私を見てから駆け寄つてくると、背中を優しく叩いて「大丈夫？」と聞いてくれる。多分、私が息を少し切らしていたから。早く隼人の傍にいたい、そういうふた想いが私をここまで走らせた。

おかしいかな、私……。私は棗が好きなはずなのに。隼人と一緒にいたいと思うなんて……。

「棗が怖かつたよね。大丈夫だよ。みんなが来るまで僕と話せばいいから。僕のクラスに来て、僕の隣席に座ればいい」

手を触られたあとに、強くまた握られて手を引かれる。反抗も出来なくて、おとなしく歩いていたら隼人のクラスに着いた。中に入つて隼人が肩に手を置いて座させてくれた。

「みんなが来るまでここにいていいよ。棗にも困るよね。あんなことくらいで怒るんだから」

「あんなこと……？」

首を傾げて隼人に向き合う。隼人はなにも言わずにただ私に笑顔を向けるだけ。きっと、言うつもりはないんだ。態度だけでそれが分かる。直接棗に聞けつてことか……。

「ま、槙野くん！　話があるのー。」

隣のクラスの女の子がドアに立つて、顔を真っ赤にさせながら俯いている。

きっと、隼人に告白するつもりなんだろうな……。

「行つてくるよ。星野さん、退屈かもしれないけどすぐに戻るから」

私のことは、気にしないで。すぐに戻らなくていいから、ちゃんとその子と話してあげて。返事を考えてしてあげてね。心中でそう呟きながら黙つて一人を見送つた。

少し時間が経つたので、隼人のクラスから出て自分のクラスに戻る。

この時間なら、誰か来ていると思う。棗と一人きりになることもない。棗のことは、どうしてあんなに怒ったのか分からぬ。でも、柴崎さんとにかくあつたから……。柴崎さんは、棗の態度まで関係するほどに特別な人なのかな……。

「あー　おはよー　口口口ー」

美咲が教室から飛び出してきて、肩がぶつかつた。痛いけど、美咲に悪気はないんだから、笑顔で美咲に話しかける。

「そういえばねえ、大西がおかしいんだよ。怒つてるつていうか、考えてるつていうかー」

まだ、機嫌が悪いんだ。顔を合わせても睨まれそうな気がする……。

…。隼人とは少し仲が悪くなつてたし。

しばらくは、棗と隼人は会わない方がいいんじゃ……。でも、どうすればいいの？ 私から隼人に話しかけるにしても、女の子の目が気になる。彼女、なんて誤解されたら大変！

「ああ。ごめんね星野さん。話が長くなつて。また話しに行くよ」

「ま、待つて！ 話しに来たらいろいろ大変だから！ 来なくとも大丈夫だよ」

あれ？ 私、今なんて……？ 言葉の意味は、来ないでと言つてるようなもので……。

隼人の様子を伺つてみると、見たことがない悲しい笑顔。

「そつか。ごめんね。周りに誤解されて迷惑だよね。分かつたよ。もう、行かないよ」

私はなにをしてるの……。隼人を突き放すなんて、出来ないくせに。好きな人は棗でも、隼人にもドキドキしてる私がいるから。

「わ、私が隼人に会いに行く。朝しか……会いに行けないかもだけど」

隼人はみるみる明るい表情になつて、頭に手をのせて撫でてくれる。優しくて、この人に思われる人はどれだけ幸せなんだろう…。隼人の彼女になれたら、毎日が幸せで楽しくて。羨ましいなつて少し思つた。

「嬉しいよ。星野さんから会いに来るなんて。待つてるからね。

……あ、もしかして棗とのこと気にしてる？ 部活でも会つから
そんなに気にしないでね」

あ……。部活でも会つんだった。それならなんにも変わらないかも……。

でも、一人はライバルだしすぐに仲なんて戻るよね。さつきの棗は嫌なことが会つただけなんだし。

「気をつかわせてごめんね。僕がなんとかしてみせるよ。あんな空氣、苦手だし」

「私にも手伝えることがあつたら言つてね。喧嘩とか……しないでね？」

手を振つて隼人がいなくなるまで見送る。一部始終を見ていた美咲は口を大きく開けて固まつていると、目を細めてニヤリと笑つた。

「あの槙野と恋仲なのかなあ～。女子を敵にまわすんだね～。私は興味ないけどね～」

「へ、変なこと言わない！ 恋仲じゃなくて、友達だからね！」

美咲を軽く叩いて教室に戻る。棗を盗み見ると、静かに本を読んでいる。

棗から怒りオーラが見えるのは……私の目がおかしいのかな？

「おい。星野。話がある」

棗と目が合つたついに呼ばれ、肩を震わせながら棗に近づく。

黙つたまま廊下に出て棗の田が私を映す。君が怒つてゐるのは……
私が原因？ 失礼なことでもしちゃつた？

「星野！ お前は簡単に触り過ぎなんだよ！ 男に気安く
触れたらだめだ！ 隼人にも！」

「はあ？」

何を言つのかと思つたら、手を握つていたこと？ 男に気安く
触れるなつてどういうこと？ 女の子に気安く触れたらだめなの
は教えられたけどねえ……。

「どうしてだめなの？ 棗にも、触れているのに」

棗の手を静かに触つた。温かくて、私と変わらないくらいに小さ
な手は、隼人とは反対で。

触られていたことに気付いた棗は、顔を俯けて手を離そうとしな
い。私の心臓の激しい鼓動が、棗にも聞こえるんじゃないかつて思
つた。手に触れているだけで……私が熱をもつことをしらない君。
君に、私の想いは伝わつていますか……？

「温かいな。星野の手は。……他の奴には触られたくないって
思つただけだ。隼人と手を握つてたのも、イライラしたつていうか
……」

「な、つめ？ どうしたの？ そんなこと言つて……。じ
よ、『冗談はやめてよね！』

手を離して肩を思い切り叩いて、早足に教室に戻つた。

棗の言葉……棗は分からぬかもしれないけど、あれは私にとつ

て最高に嬉しい言葉です。嫉妬じやないはずだけど……嫉妬に聞こえるんだよ？

「手、熱い……」

棗と繋いだ手が熱い。汗もかいていて、微かに震えている。

棗は私と手を繋いでも、平気なのかな……。私だけこんなに緊張して、身体が熱くて……。

でも、これから隼人に触れない方がいいのかな？　他の男の子にも？　それは難しいな……。

プリントを配る時とかに手がたまに触れることがたつてあるもん。

「棗はばかだけど……私はもっとばかだなあ」

だつて、あんなにドキドキさせられる人に恋をしたんだから。例え、君が違う人を選んだとしても……私は、君に何かしてあげられるように、頑張るからーー。

隼人がメインのような今回でした！ 次回は棗と隼人がどうなつたのか、隼人に会いに行くココロを見てどう思うのか、を予定しています。

今回も隼人メインです。一人しか出でいませんが、恋愛らしく甘くなつた話ではないかと思います。

私にしたらこれで甘過ぎたと思うほどですが、他の方の小説を見ているとこれで甘過ぎとこつわけではありませんね。調整が難しい恋愛小説です……。

棗が嫉妬に似た感情を私に見せてから、数日経つた。相変わらず隼人とは仲が良くないみたいで、みんながいない時間……つまり朝に隼人に会いに行っている。隼人には触れてないけれど、時々触れそうになる。その度に棗を思い出して慌てて引っ込めるんだけど……。

「どうかしたの？　考え方でもしてた？」

隼人が私の顔を覗き込んで、肩をビクリとさせながら後ろに下がる。

隼人はクスクス笑いながら宿題をしている。もう一、本当に心臓に悪いんだから！

「あまりにも静かだからさ。いつもなうよく話すのになあ、って思つただけだよ」

「棗とはどうなったのかなって。仲直りしないの？」

指をいじりながら顔を下に向いて聞いた。隼人のことだから怒らないとは思うけど、念の為に。棗に聞いても無視されるし、機嫌が悪くなる。だから隼人に聞いた方がいいし、どちらが謝った方がいいんじゃないかな。棗は、絶対に謝らないと思つけどね。

「特に変わりはないな。見たら分かると思うけど、どうなつたもこうなつたもないよ。仲直りつていうか、棗には棗で時間が必要だと思うから。頭を冷やしてもらえるまで待つよ」

すごい……。気の長い人つてこんな人のことを言うのかな？相手のことを考えて待つ人、かあ……。隼人はやっぱり優しい人だなあ。

「それとも、棗が気になる？ いつも棗に戻ってほしい？」

「え！？ そんなことは……」

棗が気になつていてるんじやなくて、ただこのまま気まずい空気が流れるのかと思うと……神経がもつのかなあつて……。はやく仲直りして、前見た走り対決とかしてほしい。ライバルなら、いつも対決してるんだよね？ 一人は……今もライバルなんだよね？

「ねえ隼人。二人は今もライバルだよね？」

隼人は「うーん」とあぐびをしながら伸びをすると、顎に手をついて黙つた。考へているんだろうけど、この緊張した空気……気まずい。

「そうだなあ。ライバルかもね。意味は星野さんとは違うかも」

「え？ 一緒にじゃないの？ 私が考へてるのは宿敵の意味のライバルだよ」

なにが違うんだろう？ ライバルって他にどんな意味があつた？ 友情とは違う意味のライバルなのかな？

答えに困つている私に隼人が笑うと、「やつぱりね」と言つ。

「とりあえず恋敵は恋敵つてことだよ」

ライバル

「ええ？ 教えてよ！」

抱き付く勢いで隼人に近寄ると隼人は爽やか笑顔で頭を撫でてくれた。それで自分がなにをしようとしたのか分かつて、隼人と一分距離をおく。そうでもしないと、抱きつくかもしないし。それにまた隼人に触れてしまうかもしない。

隼人に触ったことなんか女の子ファンに知られたら私、どうなるのかな……。ましてや、見られたら大変……。

隼人と話せるだけで羨ましがられるのに、隼人は自分の魅力に気付いてない。かつこよくて、優しくて紳士で。彼氏にしたら自慢はできるし友達と取り合いになるかも。私には有利得ない話。

「教えてほしいんじゃないの？ そんなに離れようとしてしないで、もつと近寄ってほしいな」

動けない。隼人に近寄つたら、棗をまた怒らせる気がして……。

第一、隼人に触れそだから距離をおいてるのに、本人は全く気付かないんだもん。これじゃあ、私だけばかだよ。隼人はきっと私の女の子として見てないんだ。だから簡単に近付けるんだ。妹的存在なの、私って？

「これ以上近付くのは無理だよ！ 教えてほしいけどこれ以上近付いたら……」

隼人に触つてします。

なんて言えるわけがないので、最後の部分だけ濁す。触る触らないを気にしないと思うけど、軽く触れちゃだめなんだって棗に言われたから。

だから触つてしまふ前に引いているのに、隼人から近寄ってきたら……何の意味もないじゃんか！

「なんて？　これ以上近付けないって？　なら僕から寄ればいいんだね」

「そ、そうじゃなくって！　隼人に触つてしまふかも知れないから距離が必要なの！」

「ああ……言つちゃつた。勢いに任せ過ぎだよね私。隼人はどう思つたのだろう？　「星野さんから触つてきたのに？」と思う？」

顔を上げると、目の前に隼人が微笑しながら立つてゐる。こんなに近くに来たら……きっと隼人に無意識に触つてしまふかも……。足を後ろにして、また一步下がるうとしたら、私の腕を隼人が握つた。

「へえ。僕に触るかもしれないんだ。僕にしたらそれは嬉しいことだけど、どうして拒むの？」

「……男の子に簡単に触れたらいけないって。隼人にも触るなつて言われて……」

触りたくないって言つたら嘘になる。手だつて繋ぎたいし、スキンシップだと思ってやつてゐること。

棗にはそうは見えなくて、不快感を与えてしまふなら……棗以外の人には触れないように我慢するから。

隼人は目を大きく見開いたけど、すぐに細めて「ふーん」とか「なるほどねえ」と呟いている。

「あいつも中々だよね。ねえ、星野さんから触つたらだめなんだよね。なら、僕から触つたらいいの？」

「よく分からぬ……。私からは触れたらだめとは言われたけど、異性からとは聞いてないかも」

男の子には触れるなって。よくよく考えると、異性から触られそうになつた時とか聞いてないよ。こんな時、なんて言えばいい？ どんな反応をすればいいの？

「なら良いよね。僕、結構我慢してた方だから思い切りするか

「う

「隼人……？ 我慢つてどうしたの？」

手を伸ばして、隼人の頬に髪に触れようとして、また引っ込める……のに、引っ込めようとした時に柔らかい頬に手が触れた。

男の子にしては白い肌に赤みのある頬。二重の大きい目に細い身体。運動してるからだろう、足にちょうどいい筋肉がついて綺麗な足でシユツと細い。だからあんなにも、女の子が隼人に惚れたり憧れたり、ファンクラブをつくってしまうほど、人気があるんだ。私は贅沢なのがも。隼人に触れてはだめだと思っていても、心が頭よりも早く反射的に隼人に触ろうと手を伸ばしている。

指は熱をもつて、心臓が忙しくて激しい音を奏でる。鼓動の音が聞こえるんじやないかって不安になつて、胸をおさえて隼人を見ずに俯けた。

「意地悪し過ぎちゃつた。星野さんは僕に触らなくていいよ。その代わり、僕が星野さんに触れるから」

驚いて顔を上げた。身を固まらせて自分の身を守れと、簡単に触らせると頭が働く。でも、私は隼人に触れてほしいと思っている

し、棗にも同じ思いを抱いている。隼人は好きじゃないよ。ただ…
スキンシップだから。

棗、ごめんね……。少しだけでいいから、私のわがままも聞いて下さい。

「隼人がそれでいいなら……。隼人の思つように行動してほしい」

手招きをされて拒むはずもなく距離を縮める。近寄つてぶつかりそうになりながら目の前で立ち止まる、隼人の細い指が私の髪に絡まる。何度も何度も髪を絡めては撫でられる。

「大丈夫。棗とは少し喧嘩してるけど、星野さんが心配するほど深いことじやないよ。仲直りは難しいかもしれないけどね」

髪を撫でてくれた指がとまつて目を合わせた。

隼人は、私が近寄つてきたのは棗のことが知りたいからと思つているの？ 棗のことでこんなに私が触られても、つて？ 私は棗と隼人がどうなつたのか気になつて話題にしたけど、嫌がつてゐわけじやないよ。むしろ隼人に触れられて嬉しいよ。隼人に触れたいと思つてゐるのに。

背を向けて立つ隼人が離れていく気がして、気がついたら隼人の背中に頬を寄せて手を隼人の身体に縛つていた。

抱きつかれるなんて思つていなかつたらしく、隼人の身体は大きく跳ねて固まつたまま。私がどう思つてゐるのか知つてほしくてしたわけだけど……恥ずかしい！ でもここまで積極的になれたんだから、度胸だよ度胸！

手に力を込めて、今だけは離れないという意思表示。

「私、隼人に触れられて嬉しい。自分の意思で決めたから、嫌

がつてないんだよ？」

隼人がこっちを向いて俯いた。だから嘘だと思われないように、ずっと力を込めて抱きついていた。

すると背中に手がまわってきて、隼人の顔が私の頭のすぐそこにあつた。いわば、抱き合っているんだ私たち。冷静になつて離れようとしたけど、隼人の力に勝てるはずもなく、すっぽり腕の中。

「ありがとう。こんなふうに抱きしめられるなんて思えなかつた。幸せ者だね。僕は」

隼人は爽やか笑顔を浮かべると腕を緩めて少し距離が出来る。寂しいと思いながら、自分がなんであんな行動に出たのか分からぬ。隼人が離れていく気がしたら、ほつとけなかつた。

大胆すぎる……。私は一体なんてことを……。隼人ファンの全ての女の子を敵にまわしたようなもの。見られてないから、大丈夫だよね？ うんうん。

「嬉しいなあ。星野さんから抱きついてくるなんて。これじゃあ我慢出来そうにないかも」

幸せそうに微笑んでいる隼人になにも言えず、ただ俯いていると隼人は私の頭を撫でて安心を与えてくれた。

もう時間だから教室に戻つた方がいいと、そういう意味の声にも言葉にもあらわしていない仕草の優しさ。

「じゃあ……戻るね」

夏は爽やかな恋の季節。爽やかで冷ややかな風を受け止めながら、惑わされる。

夏で気温が上がるのと同時に、身体もあの人を考えて熱をもつ。太陽の暑さと共に熱く、爽やかな恋の訪れ。だから惑わされてるだけーー。

「星野さん。僕は待つているからね。例え、都合のいい男でもいいから、傍にいたいと思う」

待つのは……なにを？ 誰を？ 彼女を？ ……好きな人を？

どうしてそんなに優しい言葉を私に言うの。私じゃなくて、本当に伝えなければならない人がいるでしょう。でも、隼人に言うことが出来なくてそのまま教室に戻った。

「気付かない……つもりなのかな」

私って本当にばか。好きな人は棗だけだと思っているのに、隼人にも揺れている。隼人への思いは恋というには幼過ぎる。ただ、甘えられる場所。都合のいいところ。隼人を好きになってしまいそうで、少しこわい。

「大丈夫……。私にはあの人しかいないから。隼人は友達だから

この時は、ずっとこの穏やかな関係でいられると思つていたんだ。

次回は秋です。秋になつたら、書きたいと思っていた話があるの
で、それを書けるのが楽しみです

秋から冬にかけては甘酸っぱい、淡い恋愛になるかと思います。
今回のような甘い話は少なくなります。

でも、どこからが甘く、どこからが淡いのか分かりません……。
例えると「君と繋がる」や「あなただけに」みたいな感じにしたい
んですが、上手くいかない……とりあえず短編が書きたいのかもし
れません。

「口と筆です。書きたいなあ、と思つておられたお話なんですが、なんだか中途半端なできになつています。

秋は戸惑つ季節。熱い想いをしたのなら、今度は心を揺さぶられて。優しい君と元気な君に戸惑つて、心が揺れて——。

秋は体育祭シーズン。去年は散々だったけど、六組が一位になつて……記念写真を撮つた。今年はどうなるんだ？……。

「はい！ それでは各種目に出来る人を決めていきます。全員出でくださいね」

種目は何種類があるけど、一年は全部出ないといけない。例えば、障害物リレーでネット潜りをやる人と三輪車に乗る人……必ず全員が出ることになっている。去年なら、自分が出る種目の時とかに、出ない人がクラス席に座つて応援とかしてたのに。全員が出るから、応援はないかもなあ。

「なに出ようかな……」

種目は、障害物リレーに全員リレー、百メートルや八百メートルなどの変形するリレーに百足リレー、玉転がし。まあ……出るのは強制だけど、障害物リレーの何の障害物をクリアするのかは自由に決められる。誰かとかぶつたらジャンケンか譲るかどっちかだ。

「星野さんは何やる？ 私、玉転がしがいいな」

「んー。何しようかな。体力ないから負担の少ないものかな」

私は運動が得意じゃないので、出来ればこいついうものは運動部の人任せたい。実際に、運動が好きな人にとつたら体育祭なんて気合い入りまくりだろうし。

「そうかあ。じゃあ百メートルか一百メートルだね」

変形リレーのことか。一百メートルはグラウンド一周で百メートルは半周なんだよね。楽にしたいなら百メートルだろう。でも、百メートルは喘息の人や本当に走るのが苦手な人とした方がいいだろうから。

周りを見たら、みんな話し合っている。リレーが多いから八百メートルは運動部しかないよな……そんなことさえ思つてきた。運動部が多いこのクラスでも、八百メートルは嫌らしく、運動部なのに「俺は一百メートルにしどく」なんて声も。

「やだ！　運動部が八百メートルやらなくてどうするんだろう。誰か推薦しないと……」

清楚な女の子が困ったのか、オロオロと周囲を見渡して、ギャルの女の子となにやら目で会話している。ちよつぴり手話を交えていたけど、ギャルの女の子がグーサインを清楚な女の子に向けて、清楚な女の子は安心したのか息を軽く吐いた。

「はいはーい！　意見があるんですけどー」

ギャルの女の子が手を上げて、声を体育委員に聞こえるように大きく発した。体育委員の子はギャルの女の子に目線を移す。ギャル

の女の子はチラッと清楚な女の子を見てから高い声で言った。

「八百メートルとかは運動部がやるべきだと思うんですよねえ
ー！　普段走ってるわけだしー。そこで、大西くんを推薦します
ー！」

「はあーー？」

ギャルの女の子の発言でみんなの目は棗に向かられる。当の棗は不満な表情を隠さず「はあ？」ともう一回言った。

いきなりのことなので言った本人のギャルの女の子と清楚な女子以外のみんなは頭の中に疑問マークを浮かべていると思つ。私だつて、どうして棗が選ばれたのか分からぬ。

「なんで俺なんだよ？　運動部の奴なんてたくさんいるだろ」

「噂に聞いてるからかなあー！　槇野　隼人のライバルで、しかも男バスの次期エースなんぢやないかってえー。槇野　隼人とエースの座を取り合つているんでしょー？　なら大西くんかなあつてえー！」

ギャルの女の子が髪の毛をいじりながら言つ。毛先を指に絡めてほどく。そんなことを繰り返してから、教室を見ていき運動部の人を見つけては「あんたもね！」なんて言つてる。

「運動部の人なら体力があるから大丈夫ですよね？　文化系クラブや帰宅部の人には百メートルや二百メートルを譲つてくれませんか？」

黙つていた清楚な女の子が静かに言つた。運動部も最初は明らか

に嫌な表情をしてたけど、諦めて八百メートルを走ることになった。ちなみに私は百メートルになった。二百メートルに入るよう、言

われたのだけど他の子が入ったので百メートルになった。

そのあとも一人が仕切って、あつという間に終わつた。暇だから前の席の子と喋つたりして。

「ねえ。そういうば、星野さんつて彼氏とかいるの？」

キラキラ輝く目で見られる。彼氏？ いるわけないよー。中学に入った途端に付き合つ人とか増えたけど、私には縁がない話にな。

「いないよ。彼氏なんて出来ないよー」

「え！？ 嘘だあ！ 星野さんは槇野くんと付き合つてるんじゃないの！？」

「どこからそんな噂が……。大体、どうして隼人なんだろ？ 話すこともあるし、会うこともあるけど……それなら他の女の子にもしてるはず。私より可愛い女の子との噂の方が全然いいよね。否定しよう、この噂。

「違うよ。隼人は友達で、付き合つてるとかないよ。……でも、どうして隼人？」

「そりなんだ。んんーとね、槇野くんが女の子に話しかけることなんて滅多にないんだよ。まして、会いにきてくれるなんて……！」

羨まし過ぎだよー！」

「そりだつたんだ？ 隼人が話しかけることがない……それつて

苦手つてこと? でも、私とは話してくれてるし。理由は分から
ないけど、隼人は隼人でなにかあるんだわ。

「私が隼人と釣り合つはずないし。好きになつてくれることす
らないよ」

「冗談はだめだよ! 星野さんは可愛いから、すぐに彼氏な
んて出来ちゃうよ」

お世辞だあ……。私は全く可愛くないもん。美咲の方が可愛いし、
性格だつてのんびりしていて天然で守りたいって感じがするし。
私は苦笑しながら美咲を見た。変わりもなくボーッとしている。
なにしてるのかな? 考え事でもしてるのかな? 悩みなんて
なさそうなのに。

「では」の時間は終了とする。体育委員はのこれよ。打ち合わ
せがあるからな

「はい。一ヶ月もないですからね。体育祭まで。忙しくなるの
も仕方ないです」

先生と体育委員が話し合つてているのを横目で見ながら、みんなと
同じように帰る用意をする。今日は部活もないの、割と早く帰れ
るな……。

チャイムが鳴つて、同時に教室を出て行くみんな。教室にいるの
は、先生と私と棗……。あれ? 美咲は!?

「……一人とも、暇か?」

先生がそんなことを言つのはなにかさせる時。雑用係の時だ……。

いや、帰ったあとは暇だから今も暇だけ。美咲め……鞄だけ置いてどこに行つた！？

「まあ。今から部活ですから暇……ではないですね」

「それならなおさらだ。部活に行くついでにこれを運んどいてくれないか」

棚から小さい箱と大きな箱を引っ張り出す。小さい箱は軽そうだけど、大きい箱は結構重そう。

先生は「頼んだぞ」と言つと、早足で教室を出て行つた。教室が重い空気を漂わせる。とりあえずこれを運ばないといけないのに。

「なあ。これつてどこのに運べばいいんだ？」

「あー……聞きたれた……。なに入つてるの？」

「この箱」

小さい箱を開けてみると、中に入つていたのはなにやらカラフルなペン。その他にも大きく白い、丸まつた紙。一体なにに使うと言うのだろう。

大きな箱も開けてみると、釘やら木材やら……重いものばかり。

「体育祭の飾りかなんかか？ なら文化委員に届ければいいんじやねえの？」

「でも箱に書いてあるよ。グラウンド……に持つていけって

先生、最初からこき使わせる気満々でしたね。

大西は早速箱を持つと早々に歩く。私もあとを追いかけようとして箱を持ち上げて……気付く。私が持っているのは重い箱。つまり

は大きい箱を持っている。たいして棗は軽い方の箱を持っているのだと。普通、男の子が重い方を持つんじゃないの！？

重いし、箱が大きいから前が見えなくて進めないし……階段とかどうやって進めと？

「重い……。棗はもうグラウンドに運んだのかな……」

重いから、時々おろしてため息をつきながら休憩を挟む。時々ジロジロ見られているのは気のせいじゃない。早く運んで帰ろう。美咲を見つけ出して！

「う、わ……ー？」

階段で段を外し、落ちる……！　はずだつたけど、腕を掴まれてなんとか助かつたみたい……。

私は助けてくれた人の方を向いて、頭を下げた。

「遅いんだよ！　俺が重い方運ぶから、お前は軽い方を運べ」

前を隠していた箱が助けてくれた人の手に軽々とおさまり、代わりに私の手には棗が持つて行つたはずの、小さな箱が……。

前を見ると助けてくれた人であろう棗が背中を向けて階段を下りていた。重いのに、その重さを感じさせない足取り。やはり男の子だし、部活もやっているから力がつくのだろうか？

「待つててくれたの……？」

こんなに軽い箱なら、すぐにグラウンドに行けただろう。なのに私と同じ場所にいたのは……心配してくれたとか、待つてくれたとか私なりの分解をしてもいいのかな？

「本当に私はばかだ……」

不器用ながらの棗の優しさは私にとってはなによりの薬で、あんなに隼人のことも考えていたのに、すぐに頭の中は棗の色に変わる。隼人のことはやっぱり、友達として好きなんだ。隼人の優しさに甘えていただけだよ……私は。

田頭が熱くなるのを感じながら、グラウンドへ走り出した。棗に「ありがとう」と伝えたい。また顔を見たい。もう、重症なほどに棗が好きで。引き返せないくらい、棗に溺れている私。

「先生！ 運んできました」

グラウンドに着いて箱をおろす。棗はいない。部活に行つたのかな。今すぐ会いたいのに。

先生が箱をチェックしてから教室に戻つた。鞄を教室に置いていたし、美咲がいるかもしれないと思って。

「ココロ～！ 遅かつたねえ～！ どうしたのかずっと気になつていたんだから～」

美咲はニヤニヤしながら言つ。なにをしてたか知つてるような言い方をするから……棗のことをついつい話した。美咲は曖昧に相槌を打つと、目をキラキラと輝かせた。

「棗はさつきどこかに行つたよ～！ 多分上の階に行つてると思つけど～」

上？ 隼人になにかあつたのかな？ でも一人は喧嘩してるから……会いにいくのは確率低い。まさかとは思つけど、柴崎さん

？ 女バスだからバスケとの話も出来るし、途中まで一緒に行く
ことも出来る。最近、棗が柴崎さんと一緒にいるの、増えたと思う。
……見間違いならいいんだけど。

「いこよ。やつぱり明日話へ。部活の邪魔したら嫌だし」

本当は一人でいるのを見たくないだけ。だけど認めたくなくて、
自分の中にこんな感情があるなんて知りたくない、綺麗に言つた。
邪魔になるのは本当。でも、会いたいのに。
上の階を見たあとに、苦笑がもれたのは……気のせいなのか、分
からなかつた。

不器用な人ってどんな人なんだろう？ と思いました。
恋愛に関しては不器用、というのは奥手なんだ！ なんて考え
ながら今回の話をまとめてみました。この話に登場する人って、奥
手な人が多いよなあ、といまさらながら気きました。

今回、少し長めになっています。後輩ネタが浮かんでしまって、予定より長くなりました。

恋愛ではない話かもしません。話し合いたいな、軽い話です。

体育祭が明日になつて、部活も慌ただしい。一年生でも騒いでいて部活はいつもより賑やか。

部活の中で対抗リレーというものがあつて、三年の先輩……と二年の全員が出ることになつた。三年は強制でだけど、人数が少ないので一年も出て一年は出なくてもいいから、かなり嬉しいと言つていた。

「星野さんー。これあげる

部活の後輩の男の子がぞら用紙を渡してきた。最近よく、話しかけてくる男の子。

ぞら用紙を見ると、大仏の絵が描かれていた。しかも、かなり上手い。残念なのは大仏が上手いんだけど……あらゆるところに落書きがかかっているところ。

「返す！ ちゃんと部活に集中しなさい！」

「嫌だー！ それ、あげるつて言つたじゃんー。」

これもいつものこと。可愛いんだけど、私のことを先輩に見えないと言つて、さん付けしている。

背が低くて華奢な男の子で、まるで弟みたいでついつい甘やかしてしまつ。

「やつこえば、星野さんは知つてる？ あいつの好きな人

後輩がいきなり後ろを振り返つて、ぶつかりそうになる。この子

は背が低いから、ぶつかるとしても私のお腹くらいなんだけれど。

それより、あいつの好きな人って？　あいつって誰？

「ほらー　いつも星野さんにちょっかいかけてる、山田だよ！」

山田くん……。部活の後輩。よく話しかけてくれるから、私からも話しかけたりして。田が合つと、笑かしてくれたり。なんで山田くん？　今、座つて友達と話しているけど。

「山田くんの好きな人なんて知ってるわけないじゃん。もしかしてこの部活の中にいるとか？」

「当たり！　山田はな、好きな人がこの部活内にいんの！　誰だと思う？」

んー……。山田くんの好み、分からないしな。山田くんからそんな話、聞いたことなかつたし。

美咲とか有利得そうだよね。可愛いし、よく話してるみたいだし。

「美咲でしょ。山田くんって美咲が好きだつたんだ」

「いや違つじー　山田は星野さんが好きいらじーからー。」

……は？　今なんて？　いや。聞こえてはいたけどもしかしたら私の聞き間違いかもしれない。

山田くんは、星の原が好きなんだ！　そんなとこ知らないけど、公園とかでありますだし。

「なあ！　山田は星野さんが好きなんだよなー！」

「はあー？ ち、違うしー。星とかは好きだけどー。」

山田くんがいつの間にかやってきていて、必死に否定。当たり前だよ。私のことが好きな人なんて聞いたことないし。一年になつてから。私のことを好きになつてくれたら、まず「旦大丈夫？」とか聞いちやうしね……。

「気にしないで下さい！ 星野先輩もこいつを叱つて下さいよー。」

「なんでだよー。本当にことを言つただけだろー。照れでんのかよ、山田くん？」

ああ言えぱ」」「…………永遠に喧嘩が続くだけじゃん。

私は一人をほつといて、グラウンドを見た。バスケしてる、棗を見るのは久しぶりだ。運動部は秋だよなあ、やっぱり。

「先輩、本当に気にしないで下さいー。お、おれは好きな人とかいないんでー。」

「本気にしてないよー。あの子にも困つたものだよね。あとでちやんと言つておくから」

山田くんもいい迷惑だな。

ずっとグラウンドを見ていたからか、山田くんはそれ以上なにも言わずに去つていつた。その行動には感謝。棗のことが好きとか知られたくない。そのことを知つたら、棗はどんな表情をするのだろう……。どんな反応をしてどんな言葉を言つのだろー。今さら、なんて思うだろうか。

「星野さん！　これ、教えてほしいんですけど」

「あ、うん。」これはね……」んな感じで描いたらいいから

後輩に絵の見本を見せた。それを見た後輩は「ああ、なるほど」と納得したようで、スケッチブックを抱えたまま、本をひたすらに見ていた。

さすがにいつまでもグラウンドを見るわけにはいかないので、私も鉛筆を握り直して人物デッサンを描いた。

「……俺や、この前聞いたんだけど。あいつって付き合ひてるらしげ」

「それ本当かよ？　釣り合わねえって」

一年で付き合う人とかいたんだ。早いよなあ、付き合うとか。釣り合つのは、周りから見た目。付き合っている本人たちは気にしてないのかな？　本当に好きなら、周りなど見えない。周りなんて関係ない。

「お前は好きな子のタイプってなに？」

「えー？　そりゃあ可愛くて、白痴できる彼女だろ」

可愛い子が好きとかいうのはみんな同じなんだな……。可愛いから付き合う、そんな人を見たことがある。

好きじゃないけど、顔が好みだから付き合つているんだ、そう言ってた。好きでもないのに付き合えるのかな、普通。

「はあ？ 僕は好きな子がタイプだし！ まあ美人とかいたら付き合つてもいいかもな」

美人だから付き合つ？ 人それぞれだよな……。

棗は美人が好みじゃないって言つてたから、可愛らしい感じの子？ ほんわかしてる、優しげに微笑む子。

私は後輩が盛り上がつてているのに悪いと思いながら、美味に話しかけた。

「そういえば、付き合つとかあるけど……どこからが付き合つてるの？」

発言したら、すぐにその場が静まり返る。なにか変なこと言つてはないと……思う。付き合つてるとかの話だから。

後輩たちはびっくり顔で「知らないの！？」と言ひ田を向ける。

「そりやあ、告白とかしていい返事をもらつたら付き合つだろ。まあ……両思いなら付き合つてるんじゃない？」

「じゃあ、例えばだけ……。付き合つてないのに、一緒に帰つたり会つに行つたりしたら、どうゆう？」

後輩が考え込んでから、おちゃらけた笑いで「付き合つのも時間の問題じゃない？」と言つた。

そうかもしれない……でも、少しでも可能性があるのなら……棗に告白してみようかな。柴崎さんが告白するのかは予想が全くつかない。

付き合つのも、時間の問題か……。

「なんでそんなこと聞くの？ あ、星野さんつて付き合つて

「ば、ばか！ 付き合つてゐるわけない！」

なんで付き合つてるとか思つのー？ 私、付き合へるわけないし！ そもそもそんな相手いなーしー

「星野さん可愛このにーー！ 僕と付き合つてみる？」

「ばかだ。でも、付き合わなーの？ 同級生とかと？」

部活の後輩たち、みんな誰も付き合つてないじへへへへへ「彼女ほしーなー」なんて言つてこる。

なら、付き合えばいーのに。ノリで付き合つたりすることもあるだろうし。全く告白されないわけでもないと思つ。明るい性格だし、よべ暴れ回つてこむから、少しほ告白されるだらう。

「誰でもいいってわけじゃなこなどなー。好きな子じゃないと、本気で付き合えなーからさ」

「そつか。告白とかされたり、したりするだよ？」

後輩くんはケラケラ笑つと、隣にいる三田くんを見た。三田くんは気まずそうに目を逸す。

後輩は笑い終えるとお腹が痛いとつてこいるのか、お腹を抱えてい。

「告白なんでしたことないしー。されたのは小学五年か、小学四年の時

「つい最近だねー。どんな告白された？ 呼び出しがされた？」

するとまた、後輩はケラケラ笑う。面白くて仕方ないみたい。山田くんも知っているのか、少し口元を手で隠して、密かに笑っていた。

「あ、あれはつけた！ 机に手紙が入つて……友達に聞いたらラブレター、とか！」

「そこならまだいいけどなあ！ 差出人があいつだからな、面白かった！」

山田くんも声が震えているから、笑いをこらえているんだろうな。ラブレターをもらつたという、後輩も大笑いしてるし。どんだけ笑つてんの。

差出人の女の子だつて、こんなに面白がられたら嫌なんじゃないの？ 勇気を出して机の中に入れたのに。私がその女の子だつたら、きっと傷付く。告白したのに、笑われるなんて。

「そんなに笑つたら失礼だよ！ 女の子だつて、恥ずかしく思いながら書いたかもしれないのに！」

後輩と山田くんを叱ると、固まつていたけどすぐにはまた笑い出した。怒りそうになるのをおさえ、出来るだけ笑顔を作りながら問い合わせた。

「なんでそんなに笑うの？ なにがそんなに面白いの？」

聞いても、ずっと笑つたまま。なんで笑えるのか、不思議。必死

で、自分に想いを伝えてくれたのに。自分を好きになつてくれた人なのに。感謝とか、しないのかな。

「この様子だと、間違なく、女の子を振ったと思う。たとえ振られたとしても、泣きたいくらい辛くとも、好きな人に「ありがとう」と言われたら、この人を好きになつて良かつたと思うんじゃないかな。本当に、大好きだと……思えるんじゃないかな、勝手にそう思える。

「俺に告つたのは、あいつだよ！」

後輩が指をさした。え……部活内にいたの！？ で、でも……そんな素振りなかつたはずだけど！？

指の方向には、一年の女の子。長い艶のある髪に、きつちりと着た制服。まいにちスカートに、いつも笑顔を浮かべている顔。確かに、障害があるつて聞いてる。ノートに好きなアニメの絵をずっと描いてる、女の子。可愛いのかは……微妙です。

「あいつに告られたから、すぐに振つたし！ 顔からしてアウトだから！」

顔が好みじゃないから？ 確かにあの子は、可愛いとはいえないけど、この後輩が好きなのは薄々気付いてた。いつも傍に行こうと近寄つて、この後輩が来ない時は「あいつ、来ないのか？」なんて呟いている。後輩はその気持ちすら、否定してる。ただ、好きで、その想いを必死に伝えようとしてるだけなのに。「私は今も、好きなんだ」、そう伝えたいだけなのに。

「いいじゃん、付き合えば。似合つてるよ

「悪い冗談やめてくれよ！ 絶対嫌だから！ それに、俺は星野さんがいいかなー。ね、本気で俺と付き合わない？」

「からかうのはやめてね！　それと先輩だから。さん付けやめてよー」

なんで私に付き合ひとか言えるのだろう。やっぱり誰でもいいんだなあ、きっと。

後輩はニンマリと笑うと、低い声で、私の名を呼んだ。

「口口口先輩。これから先輩って言つたら、付き合ひてくれますか？」

「は、あ？　なに言つてるか分かんない！　からかう暇があるなら、絵も描いたら！」

いきなり、名前を呼ぶから。不意にも、少し恥ずかしくなった。後輩であろうと、男の子。男の子に名前を呼ばれるなんて、久しづりだから……。

でも、彼はチャラチャラした人だから。こんなふうに女の子を口説くんだろう。好きな人には、特に。

「星野さん！　じゃあ、どんな人が好み？」

「えつとね、かつこよくて優しくて背が高くて頭良くて運動出来る人！」

はい？　今、誰が言ったの？

後ろを振り返ると、同級生の子が一口一口しながらうつとつと語る。

後輩は突っ込んでいるから、その隙に離れた。そのまま、からかわれていたら、なんて言つたらやめてくれるか分からぬから。同

級生には、感謝です。

「お疲れ様～！　後輩くんも頑張るよねえ～」

「なにが？」

美咲の元に戻ると、満面の笑みで言われた。美咲は「あらあら～」と大袈裟に驚いてみせると、こつそり耳打ちしてくれた。

「後輩くんね、口口口が元気ないから元気づけようとしてたんだよ～！　だから、からかっただように言つてたけど、あれが後輩くんなりの優しさだからね～」

元気が、なかつた？　そんなこと、ないはず。いつも通りに笑つて、いつも以上に楽しんでる姿を見せていた、のに。柴崎さんのことを考えて、表情に出ていたのかな……。

心配してくれる、そんな人がいる……。またあとで、お礼を言おう。今は、このままでいたいから――。

次回は体育祭の様子を書けたらなあ、と思います。体育祭といつたら団結力！ クラスが熱くなる話を書きたいですが、鉢巻きもいいなあー、色どうしようかな、なんて関係ないところで悩んでます。

体育祭のことを書けました！ ですが、今回はふたつの恋物語を書いています。これでもしかしたら、話は予想出来るのではないでしょうか。

ついに、今日が体育祭。朝からずっとお祭騒ぎ。楽しいとは思つけど、その……緊張とかしないのかな……。たくさんの人を見られると思うと震えがとまらないよ……。

「ココロは緊張し過ぎだよ…… ほら、みんなを石だと思えば大丈夫だよ！」

肩を押してくれたのは……真琴。一年になつてからそんなに話したりしなくなつた。お互い、違うクラスのもあつたけど、真琴は私がいなくとも、大丈夫だから。

新しい友達や、信頼出来る人がすぐ出来ると思えたから。その証拠に、真琴はすこく変わつた。見た目とかじやなくて……性格が明るくなつた。雰囲気も前よりはずつと良い。新しいクラスで上手くやつてるんだろう。真琴は自分でちゃんと、変わつてゐる。私も変わりたいけれど……。

「い、石!…? 無理だよ! 動いてる石なんかないし……」

「問題そーしー?」

久しぶりに、真琴と話して一緒に笑えた。本当に変わつた……。私は……真琴の役に立てたかなあ……?

真琴は優しく笑うと「ココロは変わつたよね」と言つた。
私……変わつてないよ……?

「なんていうか、明るくなつたよ、ココロ。今が楽しくて仕方ないつて表情してる」

「真琴も……変わったね。生き生きしてるよ。本当に……良かつた……」

私は変わつてないけど、真琴が生き返つた表情をするから……安心したよ。前と同じく、一人で悩んで、一人で泣くことはないよね？ もう、苦しむことはないよね？ 真琴は……作り笑いをしなくてすむよね？

「今は大丈夫だよ。まだ女の子は怖いけど……今のクラスはいい人ばかりだから。精神的にも助かっているよ」

嘘を言つてる様にも見えなくて、私は真琴にただ、なにも出来なかつた。それでも、一緒に笑つてあげたりしたら、真琴は救われるんじゃないかなつて思うよ。そんな必要、ないかも知れないけど、一緒に笑つてあげたいんだ。

「うん。そろそろ、クラス席に座つた方がいいよ。友達、待つてると思つし」

「ありがとうございます。今は体育祭だから、ライバルだよ。負けないよ、私」

今はライバルだけど、体育祭が終わつたら、みんなは普通に友達に戻る。ライバル関係になるのは、この時くらいだ。美咲とは仲間だから、ライバル意識する必要はないんだけど、隼人や真琴、柴崎さんはライバルなんだ……。棗とは、同じ仲間。それだけで嬉しいと思うのは、好きだから？ 一緒にいたいと思っているから？ 中途半端な気持ちはどうに向かうんだろう？

「こひだつて、負けないからね？」

真琴は頷いたあとにクラス席に向かつて行った。

間も無く先生がやってきて、手には鉢巻きが握られている。赤色の、情熱的な鉢巻き。他のクラスも、緑色や白色の鉢巻き、水色などもあった。

鉢巻きが配られてつけようとしたら、裏になにかが書いてある。自分の……出席番号。それと、イニシャル……。

緊張もあるけど、それ以上に、嬉しい。私はこのクラスの一員なんだって、改めて思えた。みんなに迷惑をかけないよう、頑張らなくちゃ！

「みんな！　本気出してよ！　絶対に優勝するからー。」

「当たり前だ！　優勝出来るつて、必ず」

目指すは、優勝ーー。

それからすぐにプログラムの順番で、三年のなんとかリレー。そのあとに一年の騎馬戦だから、入場門に集合する。チラチラ見えるけど、六色の鉢巻きって綺麗。赤色でもいいと思つたのは本当だけど……白色とかでも可愛いな……。

「星野さん！　氣合入つてるね！」

いきなり声をかけられて、ビクリと肩が跳ねた。誰か分かるけど……不意打ちだよ。私を驚かせるために、背後から声をかけるなんて。

「隼人！　驚くから、驚かせないで。あ……隼人は、白色の鉢巻きなんだ」

「ごめん、そんなにびっくりするとは思わなかつたから。鉢巻き、似合つ?」

ひょっこりと私より高い隼人が隣に並んだ。それだけで……緊張するのは、体育祭のこともあるからだよね……。

緊張してのを知られたくなくて、目を合わさずに鉢巻きの話題を出した。似合つに……決まつてゐる。前を見る、横顔だけでこんなにかっこいいのに。周りの女の子、隼人を見てゐるのに。気付いているのかな?

「似合つよ。隼人はなんでも似合つから、羨ましいな」

「ありがとつ。星野さんも赤い鉢巻き、似合つてゐよ。可愛い、可愛い」

隼人は、お世辞が得意。女の子を喜ばせることばかり言つ。私は笑顔を作つて、隼人に笑いかけた。そうでもしなくちや、隼人にドキドキする自分がいるから。

「隼人はお世辞が上手いよね。本当に紳士だな」

なんとなく、空氣にたえられなくなつて言つただけ。それなのに、隼人は足をとめて、私のことを真顔で見る。見つめられただけでも、苦しいのに……そんな真剣な表情で見ないで。隼人のこと、好きになる——……。

「お世辞なんかじゃないよ。本当に、星野さんは可愛い。星野さんに惚れそんなんだからね、僕」

最後の方はニコリと笑つたから冗談なんだろうけど、真剣な表情で「可愛い」なんて言われて、嬉しくない女の子なんていないよ。隼人は、いつも心を揺さぶる。友達なのに、それ以外の想いがあふれそうなほどに……。

「そ、その……私、行くね！　友達が先に行つてて、遅れたらいろいろ言われるから」

「そつかあ。残念だけど、しょうがないことだもんね。お互いや頑張ろうね」

今は隼人から逃れたくて……逃げた。怖いんだ、私。棗以外に、誰かを好きになること。それが隼人だなんて、考えたくない。隼人には好きな人がいて、棗も言わなかつたけど、好きな人がいる。二人のうち、どっちかを好きになるんだつたら、私はどっちも選べない。どっちを好きになつても、辛い恋だつて分かつてるから……。私に振り向いてくれないのなんて……目に見えてる。

隼人はもてるから、今だつて女の子に話しかけられているみたいだし。隼人のことを好きになる前に、棗をもつと好きにならなくちやいけないのに。どうして……揺れてしまうんだろう……。

「ココロ～！　もうすぐ騎馬戦だけど大丈夫～？　ほんやりし過ぎ～」

美咲と合流したあと、すぐに言われた。三年のなんとかリレーも終盤だから、私たちの出番も近付く。だからかな、みんな気合い入ってる。棗も、なんだか熱血男子化してる。

私は深呼吸をして、笑顔で美咲に言った。「大丈夫だよ」つて。

騎馬戦が終わって、出番はまだだから、水を飲みに行つた。喉がかわいて、上手く話せない。時間だって、まだまだあるから。

「かつこよかつたじやん、棗！　さすがバスケのHースだよね！」

「それいうなら、柴崎も凛々しかつたぜ？　女バスのエースだもんな、お前は」

近くで声がして足をとめた。聞き間違いだよね？　一人が、いるわけない……。クラス席にいるはずだもん。でも……棗は座つた？　分からぬよ、棗……。

「それに、柴崎に見とれてる奴もいたよ。お前つて、おとなしくしどけば美人だけだ」

「なによ？　おとなしくつて！　棗こそ、そんなこと言つてさあ、私に見とれたりしたんじやないの？」

間違ない……一人だ。一人だけで、しかもこんな人がいな」ところで……なんでいるのかな。なんで会つてゐるの？　いけないと分かつていても、一人の会話が気になつて、その場で耳をすませた。

「どうだら？　見とれてたかな？　分かんないや」

「な、棗……。お願ひが、あるんだけど」

柴崎さんの顔は見えないけど、きつと俯いているんだろうな。声が、ひどく照れた声だった。私に向ける声とは違う、好きな人に向ける声だ。

それだけで耳を塞ぎたいのに、塞がないのは、一人が気になるからだ。こんな会話を聞いて、傷付くことくらい、分かっているのに。

「なんだよ、そんなに改まって？　変な」とはきかないからな

「棗の……鉢巻き、欲しい……。私のと、交換しよ……？」

鉢巻きの交換？　それは特別な意味があるんじやなかつたつけ？　柴崎さんはそれを知つてて、積極的になる。棗は……なんて言ひつの？　知つてているの？　鉢巻きの交換の意味……。お願い、断つて……。

「鉢巻き？　全然いいよ、そんなの。今は体育祭だから渡せないけど、体育祭が終わつたらやるよ」

「ありがとう！　棗のこと、本当に……。あ、私の鉢巻きもあげるけど、大事にしてよ？」

もう、聞いていられなかつた。ばかだ……私……。聞かなきや、よかつた……。水なんて、飲みに行かなくてよかつた……。どうして、私はいつもこんな想いをするのかなあ……？

クラス席に戻つて、話しかけられたりしても、曖昧に笑つて受け流すことしか出来なかつた。棗が少し距離をおいて柴崎さんと、別々に戻つてきた時は、辛かつた。みんなに気付かれないよう、柴崎さんとさつきみたいに会つて。私が入る隙なんてないよ……。

「ハハロ！ 次、出るんでしょう？ 一緒に行こうっ！」

「あ、うん……。忘れてたよ！」

無理して笑う。棗がこんなに私の中に入っていたなんて……信じられない。

柴崎さんが前に言った言葉、今なら分かるかも。棗は、さつと私を選ばない。柴崎さんの方にいくんだろう。そして、付き合つたりする。私はそれを、喜べるかな……？

あつという間に体育祭は終わつて、閉会式が終わり、帰る途中のこと。

隼人に、呼ばれた。しかも、裏門。わざわざ人のいないところに呼ばれるなんて。なにかした？

「体育祭、お疲れ様。んとね、单刀直入に言つよ。僕、星野さんの鉢巻き、欲しいんだよね」

「は、い……？」

鉢巻きが欲しい？ それはいいけど、その意味は……。ち、違う！ 隼人が私のことをそんなふうに思つはずないし！

「あ、迷惑だつたらいいよ。僕が一方的に欲しいだけだから」

「迷惑なんかじゃない。隼人になら……あげてもいいから」

鞆から赤色の鉢巻きを取り出して渡した。受け取ってくれた隼人は幸せそうに笑って、手に持っていた白い鉢巻きを私にくれた。

「星野さんのと交換。嬉しいなあ。去年したかったけど、クラス同じだつたし、同じ色の鉢巻きだつたからさ」

柴崎さんも……棗と同じことをした。二人も今頃、鉢巻きを交換してるのかな？　涙が……あふれる。

「ほ、星野さん！？　どうしたの？　なにか嫌なこと言つた！？」

返事も出来ずに、ただ俯いて涙を流した。呆れたかな、と思つたら抱き締められていて……私は隼人の腕の中で優しさに甘えて、ずっと泣いていた。

one sided love-21

交換（後書き）

これで今年の更新は最後になります。来年からも、蜜柑色を頑張つて完結出来るように努力致しますので、これからどうなるのかを楽しんでいただけたら幸いです。

遅れましたが、明けましておめでとうございます　　年が明け
てから初更新になります。

冬は風邪がひきやすい季節です。皆さんも『喉をつけて下さいね。

体育祭が終わって、すぐに冬が来た。隼人の腕の中で泣いた時は分からなかつたけど、隼人は泣きやむまで傍にいてくれた。友達と一緒に帰る約束をしてたのに、友達の約束を断つて、わざわざ家までおくつてくれた。

もう、私は大丈夫。棗のことは大好きだよ。でも、悲観的にみないようにする。まだ、誰のものでもない棗。だから私、諦めない。棗が誰かのものになるまで、ずっと……。

「寒いよね！　ああ……手袋してくれればよかつた」

「ほんとだね。いいじゃん、彼氏に貸してもらえば」

通学路で、騒ぎ合つている女の子を素通りしながら、学校へ向かう。寒いのもある。でも、学校に早く着いておきたい。それは前から変わつてない。

学校の中は外と比べてまだ温もりがある。暖房がついているのもあるだろ？

「おはよ。星野」

「おはよう棗。最近、寒くなつたね」

何気ない会話をかわしておぐ。棗と気まずくなるのは嫌。目が合つただけで嬉しい私に、話なんて出来ない……夢心地。

浮かれながら鞄をなおして、ウキウキと上の階へ行く。棗がいるということは、今日は朝練がないんだ。それなら隼人もいるはず。上について隼人の教室に行って、中を見渡す。後ろの方の席でな

にかをしている男の子がいる。背が高い細身な人。教室に入つてその人に話しかけた。

「おはよう隼人！　なにしてるの？」

「あ、おはよう星野さん。これはね、バスケノートだよ」

隼人が書くのをやめてきちんと挨拶してくれて笑いかけてくれた。このノートはバスケノート？　聞いたことがない名前。棗でもそんな話とかは出さなかつたのにな。バスケノートつて……なに？

「バスケノートつてなに？」

「部活で使つてるノートなんだけど、試合とかで先輩たちのプレーをメモしたり、感想を書いたり、今日はなんの練習をしたかとか、そんなことを書くノートだよ」

すごい……。バスケ部つてそんなノートあるんだ。棗が書いてるの、見たことないよ。家とかで書いているのかな？　隼人は学校で書いてるみたいだけど。

バスケノートというものを覗いてみた。ノートにはびっしり文字が詰まつていた。隼人の規則正しい文字があつて、隼人が書いたのはすぐに分かる。でも、量がすごい。作文みたいに文字が並んであつて、どんだけ試合を真剣に見ているんだとか、ちゃんと思ったことを書けているんだとか……ノートにあらわれている。見えないところで、努力してる人。隼人が棗と同じく、バスケ部のエースと呼ばれるのは……ちゃんと努力してるからなんだね。

「隼人は、頑張り屋さんだね。だからバスケが上手いんだ」

「こんなのは、頑張つてゐるうちに入らないよ。プロの選手は、比べられないくらい、努力してる。僕はもっと上手く、ならなくちゃ」

思い詰めた様子で、言つ隼人。なにがあつたのかな。こんなにこだわる隼人は初めて。そんなにバスケが好きなのかな？ 選手と比べるのは、夢だから？ 隼人に、誰かと比べてほしくないよ。

「隼人は頑張つてるよ！ いつも、みんなの知らない時に努力してる。隼人……誰かと比べないで……。自分らしく、隼人らしく、頑張つていけばいいと思うの」

隼人が見たことない、真剣な表情で私を見た。決意した目。色付いた頬。

色っぽい隼人と目が合わせられなくて、そっぽ向いた。今、その表情は反則だよ……。頑張つてる隼人を見たあとに、真面目な表情をしないで。ドキドキする……。

「ありがとう。星野さんは本当に優しいよ。僕のこと、そんなふうに言つてくれる人、今までいなかつたよ」

ポツリと最後に呴いた言葉は今にも消えそうなほど、儂くて。隼人にもいろいろあつたんだ。

今までのことで、なにかあつたのかな。隼人を認めてくれる人……いなかつたの？ どうして……そんな悲しい表情をするの。やめて、いつもと同じ笑顔を見せて……。

「星野さん、そんなに泣きそうな表情しないで。僕はそんな表情をしてほしいわけじゃないよ」

「は、隼人……。辛いことでも、あるの？　私より、隼人の方が泣きそうだよ！」

隼人の方が私より辛そうで、泣きそうで……。こんなに儂い隼人を見たのは初めてだよ。だから心配なんだよ。一人でなにか背負つてるんじやないかなって。

私よりも、優しい人。ずっと笑いかけてくれる人。だから私が……隼人に優しくして、笑いかけてあげられたら。

「いいよ。君だけになら教えてあげる。女の子に話したのは、星野さんが初めてだからね」

そう言つて笑う隼人はいつもより寂しい表情。心細くて、隼人に安心感を与えたくて、ただ隼人の手に触れた。前に、手を繋いだ時にただ優しく包んでくれた人。私が今度は、繋いで、包むよー。

「僕ね、気になつてた女の子がずっと前にいたんだ。その子といふと、楽しくて、毎日輝いてた。その子も、僕に好意を寄せてくれてね、僕たちは付き合つことになつた」

幸せな表情を浮かべながら話す隼人。二人は両思いだつたわけが付き合うまでいつたら、幸せなんだろうな。私は付き合つたこともないし。好きな人と付き合えて、嬉しくて仕方ないのかな。

「でもね、その子は、自慢したかったみたい。みんなに羨ましがられたいだけで、特別僕のことを想つてなかつた。僕と別れたあと、すぐに付き合つてたよ。他校のモデル風イケメンとね」

その子は……隼人が好きじゃないのに、付き合つてたの？　隼人の気持ちを知つてて？　利用して？

隼人はかつこいいし、優しいから、自慢出来るよ。ただ……自慢したいがために？ そんなの、あんまりだ。

「まあ、しょうがないんだけど。僕が一方的に好きなだけだから。その子に言われたよ。隼人よりも、いい人が出来たから、別れたいって。隼人は努力が足りないってね」

ひどいよ……。隼人は好きでいたのに、その気持ちを利用するなんて。隼人の努力、知つてたの？ どうして、隼人の頑張りを否定するの？ 結局は顔だつたの？

隼人は優しいから、受け入れたんだ。責めたり、冷たくしない。こんなに優しい人に想われていたのに。

「だから、学んだよ。自分の想いだけを押しつけちゃ、だめだよね。その子は転校したけど、今も変わらずにいることを願つてるよ。僕が好きになつたのは、ありのままの自由な姿だから」

「隼人は優しすぎるよ……。隼人には幸せになつてもらいたい……それに、隼人はすごく努力してる！ 私は、否定しない！」

隼人に元気をあげられるなら、なんでも出来るよ。そんな、作り笑いしないで。私は、隼人の努力、認めるよ。否定しない。隼人はクスクス笑うと、手を強く繋いできた。それだけで、安心するのは、どうしてかな？

「今は幸せだよ。新たに好きな人もいるしね。今的好きな人は……本当に好き。いつも支えられてるよ。これまでにないくらい、僕は本気。本気の恋つてこういうものなのかな」

好きな人か……。隼人を幸せに、過去なんて忘れられるくらい、

傍にいてくれたら。隼人のことを見てくれる人、たくさんいるけど、それは顔目当て？ みんなに羨ましがられたいから？ 隼人にそんなふうに想つて、好きだなんて言つのは……やめてほしい。今度こそ、隼人は好きな人と幸せになつてほしいよ。

「隼人のこと、ちゃんと見ててくれる人？ 幸せにしてくれる人？」

「うん。すごい見てくれる人だよ。傍にいてくれるだけで、話してくれるだけで、幸せだよ」

隼人にそこまで想われてる女の子が羨ましいな。私はそんなふうに、想われたことないよ。告白されたことだってあるけど、それは全部、数ヶ月したら終わる。すぐに私のことを好きじゃなくなる。すぐに他の人を好きになる。だから、男の子と付き合えずにいたのに。

「そつか。きっと隼人なら、大丈夫だよ。上手くいくよ」

「うーん、そこまで上手くいってないよ。その女の子は、違う人を想つているからね」

そういうえば、前にも同じことを言つてた。隼人……大丈夫。隼人が告白したら、すぐにいい返事がもらえるよ。でも、隼人はそれが欲しいわけじやなくて、女の子の心が欲しいんだね。

私は立ち上がり、隼人を廊下まで引っ張る。隼人はポカンとしとまま、されるがままだ。

「隼人、見てよ！ みんなね、隼人が好きなんだよ！ だから隼人は隼人らしく、そのままでいいと思う。じやなきや、隼人

の靴箱に恋文なんておかないよ

廊下にある、隼人の靴箱には、六、七枚くらいの恋文があつた。朝早くに来て、隼人に想いを寄せる女の子の誰かが、おいていったものだろう。

隼人はその恋文を見て、驚くと、恋文を一枚一枚目を通していく。時々、優しく困ったように笑いながら見ていた。

「ありがとう。僕、頑張るよ。必死に想いを伝えている人もたくさんいるし、僕も負けてられないね」

隼人が元通りになつたのでホツとしつつ、教室に戻つた。教室にはまだ棗しかいな様子。棗は静かに本を読んでいる。バスケノートとか、しなくていいのかな。隼人はあんなに頑張つているのに……。

「星野は隼人が好きなわけ？」

本を閉じて、いきなりそんなことを言つ。なんでそんなこと？私が好きなのは……棗なのに。棗はなにも言わない私に憐れを切らしたみたいで、顎で上の階を指した。

「いつも隼人に会いに行つてるもんな。そんなに好きななら付き合えば？　隼人もいい返事くれるだろ。特定の彼女、いないみたいだし」

嘘……。なんで友達のこと、そんなふうに言えるの？　ライバルだつて、あんなに楽しそうに笑つていたのに？　私は棗を睨み付けて、一言言つた。

「隼人はそんなに軽くない！」

そのまま教室を飛び出した。棗が分からぬ。分からぬよ。なんでそんなふうに思えるの？ どうして二人の関係は変わつてしまつたのかな……。私はただ、一人が前みたいに無邪気に笑つてほしくて……。

棗を変えたのは誰？ 私？ 隼人？ 柴崎さん……？
ごめんね、棗……。私……君が分からぬ。君が私を想う確率なんて、無理に近いんじゃないかつて。君は、誰が好きですか……？
もう、手を伸ばしても届かないのかなあ……？ 君が私から離れていく気がするよ。誰かのものになる……気がするよーー。

雑談ですが、学園ものを書いていたら、先輩と後輩の話が書きたくなりました！ 淡くて、切ない感じの……。ほのぼのさは「あなただけに」のような似た話かなあ、なんて勝手に想像しています。公開するのも、何年かあとになりそうです。

棗の出番、少ないです。ヒーローなのに、空気扱いになつてます。今回の話でやつと蜜柑色が出てきます。蜜柑色つてこんな色だったよなあ……なんて考えながら書きました。

気まずくなつて教室に戻れなかつた。棗がなんであんなことを言ったのか分からなくて……どうやつて話せばいいんだら?。頭が冷えていくのを感じて、いつたん教室に戻つた。棗はただ本を見てて私のことなんて無視してゐる。それはそれでいいんだけどね!

「棗ー!　おはよー!　会いたかつた!」

「柴崎ー?　やめろつて!　抱きつくなよー!」

柴崎さんが来たかと思つたら、堂々と教室に入つてきて、棗のお腹に手を回している。棗は嫌がる素振りを見せてるけど、顔を真つ赤にして、すゞく喜んで照れているじゃん!　なに、私たちはこんな関係なんです、アピールですか?　やめてよ、人前でイチャイチャするの!

「お取り込み中悪いんだけど、教室でイチャイチャするの、やめてくれないかな?　しかも人前で。イチャイチャしたいなら外でして下さいー」

私の言葉に柴崎さんはニヤリと満足顔で思いつきり棗の腕の中に飛び込んだ。棗の背中に手を添えて、棗のブレザーに頬を寄せる。棗も棗で柴崎さんの背中を優しく擦つている。だから……イチャイチャするんだつたら、外でしろつて言つたのに。

「なんで?　星野さんだつて随分イチャイチャしてゐるじゃない。いつも朝早くに来て、隼人とラブラブなの、見たんだからー。」

隼人？ ラブラブってなにが？ 特別なことはしていないよ？
そりゃあ、手を繋ぐとかはあるけど、ただ普通に話してるのでなに。

柴崎さんは棗の腕の中から顔を覗かせて笑った。

「とほけないでよ。星野さんから隼人に抱きついて、そのあと、隼人も星野さんに手を回して。抱き合つてたわよね。ああ、体育祭のときも鉢巻き交換してたし。おまけに隼人の腕の中で泣いてたじやん。よつほど嬉しかったんでしょ？」

「し、柴崎さん！？ な……なんでそれを？」

嘘……。見られてたの！？ その話は、棗の前でしないで！
誤解しないで、棗！ 私は隼人とどうにもなつてないよ！
抱き合つたのはいろいろあつたからで……。棗以外に好きな人なんて……いないよ！

「良かつたよな、星野。隼人に告白して、付き合えば？ そんなんじゃ、隼人ファンがイライラするだろ？ し、早くくつつけよ」
「おめでとう、星野さん。羨ましい、隼人と付き合えるなんて。手は出さないから安心してよ？ あんなに想いあつてるカツプル初めてー！」

なんで……そんなこと言うの！？ 柴崎さんは私の気持ち、知つてゐるのにー。隼人とはそんな関係じやないの、知つてるくせに！ 棗も棗だよ！ なんでそんなに隼人とくつつけようとするの！？ 私の想い……全く届いてなかつた？ 私の態度がはつきりしてないから？ 言葉に出してないから？

「こんなふうに、隼人と抱き合っていたよね？ ねえー、棗」

「……ん、柴崎」

棗がいつたん柴崎さんの手を解いて向かい合わせになる。顔の距離が近い……。やめて、そんなに近寄らないでよ……。棗も、柴崎さんを拒んでよー。

棗はゆっくり柴崎さんを抱き寄せ、柴崎さんの肩に顔を埋めた。柴崎さんも嫌がる気配なんてなくて、田を閉じて全身全霊で棗の存在を確かめてる。

田の前でこんなこと……しないで！

「やめて！ もうやめてよー。私に言いたい」とあるなら言えばいいじゃん！ なに、こんなことして？ 敗北感でも『えたいの！？ 私がどんな表情するのか見たいの！？』

すると柴崎さんは元々きつめの田をさらに険しくして、棗から離れると、キッと私を睨んで今にも頬をはたかれるんじゃないかなって思った。

棗は気を使つたのか、静かに教室を出て行く。棗が教室から出て、扉がしまるとき柴崎さんは棗には見せない、怒りに狂つた表情をした。

「こんな」とつてなに？ ただ、抱き合つただけよ。それに、星野さんには隼人がいるからいいよね？」

顔は笑つているのに田は笑つてない。……つうん、顔も笑つてない。笑顔を作つていてるもん。口調は怒つてゐるのに感じなかつたけど、声がとても低い。それだけで怒つてゐるのか分かる。でも、なんで柴崎さんが怒るの？ 私の方が怒りでおかしくなるよー。

「なんで柴崎さんが怒るのー? 柴崎さんは怒る理由がないじゃない!」

「そり? 怒つてないけど。ただ、星野さんのことは好きになれないなって思つただけ。だつて、フラフラしてて、棗と隼人で迷つて……拳句の果てにみんなを傷付ける。なら、私が棗を幸せにしてあげた方がよっぽどいいわよね」

「なに、言つて……。みんなを傷付ける? 棗を幸せにする? 柴崎さんはなにを知つてるの? なんでそんな自信満々な田で見るの? やめて、棗は私が幸せにするんだから……! 私は棗以外で幸せになんかなれないし、なるつもりもない。だから、棗は私とーー。」

「あ、ついでにいー」と教えてあげる。星野さんがフラフラしてて、棗に告白しようつと思つてる。まあ、決めるのは棗だけど、星野さんにも知つてもういたくて」

「告白……? 柴崎さんが棗に? そんな……待つて! 告白しないで! 棗が柴崎さんに告白されたら……! 私はなにも出来ないままだよ。」

柴崎さんは私の動揺を面白がつてからに追いつかれてかかる。

「決心が鈍らないうちに、伝えよつと思つてるんだよね。今すぐここでも言いたい。計画してて、明日には伝えるけどね」

「柴崎さんはなにがしたいの? わざわざ、そんな報告いらないよ……。どうせなら、私が知らない間に、告白してほしい。」

柴崎さんが自分の腕を静かに撫でる。愛しく思つてこる田だ。

「たとえ、振られてもいい。また、友達関係に戻つてもいい。棗に抱きしめられた温もりを覚えておければ、それでいいの。願わくばね、友達でも、振られても、棗の傍にいられたって」

柴崎さんは本当に棗が好きなのかな？ 私より、何倍も綺麗で美人でスタイル良くて……本当に似合ひ。もし、棗が柴崎さんの想いを受け止めたら……一人でいる時間も長くなるのかな？ 校内で一緒にいるのを見たりする？ ……朝、棗と話せる唯一のこの時間、もう……なくなるの？

「私ね、棗のことは諦めないから。最初は遊びだつたけど、今は違つ。本氣で棗が好きなの。もう、棗以外考えられない」

「…………」めんね、私、自分のことばかり考えてた。もう少しで、棗の気持ちなんて考えずに私の想いを押し付けるところだつたよ

のまま、私は棗に伝えていたら……押し付けていたに違いない。ばかすきて……たえられないよ。柴崎さんの方が棗を幸せに出来るよね。

棗が柴崎さんを選ばなかつたら……その時は、私の想いを棗に伝える。棗が柴崎さんを選んだら……分からぬ。今は全く考えられないよ。

「なに？ 感謝でもしてくれてるの？ 私はこれから棗に告白するの！」。棗はあんたを選ばないかもしれないのに？」

「そう、だけど……。正直、嫉妬はしてるよ。不安だつてある。私も棗が好きなのについて。でもね、今はまだ棗は誰のものでもない

から、なにも考えずにいられる。だから、あんまり悲観的にしてないよ」

棗が柴崎さんと付き合つたら、少しは気持ちが変わるかもしれないけど。私は付き合つてことどんなどか分からぬから……安心出来るのかも。

柴崎さんは怪しくニヤリと口元を上げて私をジロジロと見るとなにが面白いのか、声を上げて笑つた。なんでいきなり笑つてるんだろ……。しかも、この人の笑い方つて独特で癖があるから、耳が痛いんだよね……。

「本当に、面白い！　これは惹かれるのもなんとなく分かる気がするわあ」

「……？」

なにが面白いの？　ひかれるってなにが？　柴崎さんの言葉はなんだか分からぬことばかり。

白い目で見ていた私の視線に気付いた柴崎さんは、笑いを必死にこらえながら口を震わせながら開いた。

「隼人の気持ちがやつと分かつた。良かつたね、星野さん。棗に振られたら隼人がいるし」

「なんで隼人なの？　友達だよ、友達」

私が言つた言葉に相当驚いた柴崎さんはしばらくボーッとしていたけど、意識をはつきりさせるやいなや、私に突つ掛かってきた。なんでこんなに言われないといけないの、私。

「なに言つてんの！？ 隼人は星野さんが好きだからじゃん！」

「それは、なに。隼人は私じゃなくて、好きな人がいるんだよ。可愛い、一目ぼれするほどの子が」

柴崎さんは呆れた表情を私に向けて、最大のため息をついた。なんでそんな表情をされなきやいけないんだろう。

私は柴崎さんの様子を無視して廊下に目をやつた。棗はいないみたいで、人影ひとつもなかつた。

「隼人も大変ね……。鈍感な人に惚れると」

柴崎さんの、小さな小さな咳きを、聞こえないふりをした。

学校から帰つて、すぐにこたつに入つた。ああ……温まるなあ！ 鞄を部屋に置いて机の上に置いてある、青紫の素麺でもいれられるであろう皿に目を向けた。中には輝きを放つ、たくさんの蜜柑が入つてゐる。夕日の色によく似たそれは、見ただけでも美味しそう。こんな色を蜜柑色と言うのかな。蜜柑の色で蜜柑色、なんてそのままだ。

「うわ……甘い」

皮を剥いて食べると、甘い。匂いもほのかにするし、これは高くないのか、とかどうでもいいことが気になつた。

その甘さが気に入つて、口に運ぶスピードも気付かぬうちに上がつていた。甘すぎる、と思つほど甘いんだもん。甘いのが苦手な人はこの蜜柑、食べられないんじゃないの？

「ん……酸っぱい？」

甘いはずなのに、いつの間にか甘さよりも酸っぱさの方が勝つていて。口に運ぼうとした残りの蜜柑をギリギリのところでとめる。

なに、JRの駅つぱねー。此のせどり立つたー。

甘みは酸っぱい中で微かにして、酸っぱさと甘みがたたかって

「……あいつに似てる」

蜜柑の味はあいつを思い出させた。甘いのに、酸っぱい。酸っぱいけど、なんだかまだ甘くなりそうで。あの人も、そんな人。甘いはずなのに、距離がある。距離があるのに、甘くて優しい。手に届く人なのに……届かない。

「棗は蜜柑色…………？」

夕日色の部分は甘さ、喜び、期待。茶色が混ざった色は、苦しみ、悲しみ、痛み……。私の想いの全ては、蜜柑色でした。

君を想えは想うほど、色は濃いものになつていく。君は蜜柑色です。……蜜柑色の君。

一年生冬編、次回で終わりです。三年生編も考へてはいるんですが、どうしても甘くならない話ばかり。片思いがすこくキーワードになる予定です。そして、いろんな人の想いが交わります。隼人だったり千恵だったり、棗だったりと、三年生編になつてから動き出す予定です。

今回で一年生冬編が終わりです。サブタイトルはなににしようか迷いましたが、口口口にひとつでも乗にしても、考える時間なのかな、と思い、サブタイトルはそれにしました。三年生編はボチボチ考え中です。

朝、学校に来たら、棗がなにか考え込んでいた。顔を下にして、黙つたままで。挨拶しても全く気付いてない。なにがあつたの？

「棗、おはよう！　どうしたの？　ボーッとし過ぎだよ」

「……あ、おう。別になんでもねえよ」

嘘つき。ほんとに棗は嘘が下手。考え込んでいたのに、なにもないふりをするの。

棗が必死に隠そうとしているから、なにも気付いてないふりを私もするね？　棗から無理矢理聞き出したくない……。

「そういうえば、隼人んとこに行かなくていいのか？　あいつのことだからきつと待ってるぞ」

隼人のとこ。最近、棗は朝私が教室にいるとすぐにそう言つ。追い出したいのかな？　柴崎さんと一人きりになりたい……とか。私に邪魔する権利なんてないけど、一人きりにしたくないのが本音。私のわがままで一人の邪魔をしてはいけないのにね。

「もうすぐ行くよ。棗も隼人と早く仲を戻せばいいのに」

軽く言つた。一人はまだ仲が悪いから、早くもとに戻つてほしいという意味もこめて。

棗は黙り込んでなにも言わない。それで棗の返事は決まつてゐるかな。

諦めた私は教室を出ようと、棗の隣を通り過ぎた。

「隼人とは、今はまだ無理だけど……いつかは謝るつもりだ」

棗は聞こえないと思つて言つたんだろうけど、しっかりと私の耳に届いた。

一人とも……本当に仲が良い。同じことを言つてるんだもん。仲直りしたくて、でも素直になれなくて。私がお節介をやくわけにもいかないから、一人が自然にそつなるまで……待とう。

棗に出来るだけ微笑んで教室を出た。

階段を上がつていたら、柴崎さんとすれ違つた。振り返つてみるといつもより、おしゃれをしていた。髪の毛はいつもと違つて、ストレートじゃなく、緩いパーマがかかっている。

「あ、柴崎さん！」

柴崎さんに声をかけてみた。柴崎さんは私を見て、淡く笑う。なんだか……柴崎さん、緊張してる？ いつもの余裕がないよ……。おかしいな、なんか今日は棗も柴崎さんも変。今日つてなんかあつたかな？

「星野さん……隼人のどこに行くの？」

「うん。棗に言われちゃつて……。柴崎さんも棗のどこいへ？」

柴崎さんは黙つて頷いた。だからそんなに気合いが入つているの

かなあ？

私は「じゃあ」と言つて上の階に行つてした。だけど、「行けないのは、柴崎さんが私の腕を掴んでいるから。

「星野さん。なんでそんなに平氣なの？ 私、今から……棗に告白するんだよ？」

「さなり核心をついてきた柴崎さん。告白するからそんなに氣合い入つてるんだ。

柴崎さんは黙つて私を見るだけ。どんな反応するのか、なんて言うのか、試しているのかな。

正直、嫉妬してないつていつたら嘘になる。モヤモヤしてないつていつたら強がりになる。でもね、私は思つたんだ。好きな人を想うのは、みんな一緒じゃないかなつて。

「私も柴崎さんも、棗が好きなのは変わらないね。なら、私は諦めないから……それに、棗の隣にいるのは、棗が決めること。幸せなのは……あの人があの人を決める」ことだから、私にはどうにも出来ないから

強がつていてるの、分かるかな。棗の隣にはずっとといたい。友達でもいいから。でも、それは棗が望んでない。棗の隣にいる資格は、棗が決める。選ばれないかぎり、私は棗の傍にいれない。

柴崎さんは私の頬を思いつきり抓る。痛いけど……柴崎さんが泣き顔に見えて……思わず柴崎さんをギュッて抱きしめた。

「な、に……？ なにするの、星野さん……？」

「柴崎さん！ 私は柴崎さんがすうじい綺麗だと思つよ。棗とも……似合つてゐるし、サバサバしてゐるし……柴崎さん以上に綺麗な

人、学校にいないと思つ

柴崎さんは私より背が高いから、私が抱きついてるふうに見えるだろうな。違つてはいないんだけど。

柴崎さんの背中をポンポン叩いてあやしていると、柴崎さんがいきなり私の頬を叩いた。

「そんなこと……言わないで。私は綺麗じゃない。だつて……星野さんに棗をとられるのが怖くて……意地悪ばかりしてた。ごめんね……でも、星野さんも泣きやうじやん……」

「私は大丈夫！ 棗のところに行つて、早く告白してきてね！」

逃げる私は卑怯……。嫉妬してゐのを知られたくなくて、棗に告白する柴崎さんが羨ましくて……もう話せなかつた。あれ以上話したら、全部知られてしまつ気がして……。

隼人と話していくも、作り笑いしか出来なかつた。本当に、心から笑えなかつた。隼人は気付いていなくて、安心した。隼人は鋭いから、全てを見透かされた気がするから。棗のことが好きつていうのも、いつか隼人に知られる日がくるのかな。その時は……なんて言つてくれる？ 応援とか、してくれれるのかな。

今、棗はどうしているの？ 下にいるのに……会おうと思えば、会える距離なのに。とてつもなく、棗が遠く感じじる。寂しいとかそういうのじゃなくて、なんか……離れていく……？ ゴチャゴチャな感情。

隼人はすぐに手を伸ばせば触れられる。なのに、棗とはもう……触れられない気がして。おかしいかな、こんなに棗に触れられなくて不安になるの。

「星野さん。チャイム鳴つたよ?」

隼人が心配してくれた。でも……ごめんね。私、隼人を見てなかつたよ。棗を想像して隼人と会話していたよ。隼人の話、聞いてなかつたよ。私はどれだけダメなの……? どうして棗を好きになつたの? 今の気持ちを捨てられたら楽なのに。でも、捨てたくないって願う自分もいるんだ。

「星野さん。どうしたの、元気ないね?」

「べつ、に……なにもないよ! 苦手な教科が一時間目からあるなあつて思つて……」

隼人に心配をかけたくない。ひどい私も、隼人は優しく包んでくれるから。私は隼人の優しさに甘えてしまう。都合のいい、人になるだけ。そんなのは嫌。隼人からたくさん優しくされた分、私はその優しい気持ちをかえしたいよ。でも……今の私に優しい気持ちなんてもの、ないから。せめて……隼人に心配されたくないよ……。

「そう? それなら……お互い頑張りうね?」

「うん! 眠らないよう、頑張るよ!」

元気いっぱいに手を振った。結構上手く演じたかな? 隼人はいろんなことに鋭いから、騙せるとは思えないけど、きっと私が必死なのを分かってくれて、知らないふりをしてくれたんだ。ほんと優しい。

「だ、だから……! 付き合つてほしいの!」

「なに言つてんだよ？ 柴崎は美人だから彼氏いるだろ？ だいたい、俺を好きになるはずがないじゃん」

教室から声がして、ドアノブに触れた手を引っ込める。告白、だよね……。つっかりして入らなくて良かった。邪魔、したくないもん。

でもどうしよう……。このまま聞いていいわけないし……でも隠れる場所だつてないし。なにより、もうすぐみんな来る。私は廊下をふらりついていようか。

足を進めた時、焦った様子の柴崎の声が聞こえた。

「ほんとなの！ 私は本気で棗に惚れてるの。棗が私を利用してもいい。お願い、付き合つて……」

「…………。考え方でくれ」

棗の返事に希望が見えた柴崎さんは、うつすらと涙を浮かべながら棗に「ありがとう」と何度も咳いていた。棗に告白したのは……本気の相手は棗しかいないからだよね。柴崎さんは綺麗だから……男の子から寄つてくると思つ。柴崎さん……きっと、今まで好きになることがなかつたんじゃないかな。言い寄られて好きじゃないのに付き合つて……上手くいかないとか、理想と違つてたとか……その他もろもろ。

「私……振られてもいい。棗に、知つてもういたかつただけだからね。『ごめん、迷惑だつたら』ごめんね」

「……迷惑じゃねえつて。ありがとうな、俺のこと、好きになつてくれてさ。その気持ちを無駄にしないために、時間をかけて考える。待たせるけど、『ごめんな』」

「……にいたらダメ。盗み聞きしたらダメだよ。立ち去らなくちゃ。足を動かして、廊下の突き当たりに移動しなきや。」

私は教室に反対方向に行つて美咲や真琴が来るのを待つた。見ていけない……聞いてはいけない。二人の間になにがあつても、私にはどうすることも出来ないから。聞いたまま変に嫉妬しちゃうだろうし……あんなに汚い、醜い感情が嫉妬なんて……知りたくなかつた。恋は綺麗なだけじゃない。相手を好きになればなるほど、気持ちは強くなつて、嫉妬することも増えていく。不安になつたり、涙脆くなつたりいつもより気合いをいれたりして……。人が誰かを好きになる、恋は……みんなを変えてしまう。良い方向にも、悪い方向にも。恋は綺麗なだけじゃなくて、汚くて人を変えちゃうけど……それでも誰かを求めずにはいられない。愛しい人ほど、求めてしまう。……嫉妬で私は自分が嫌になる。こわくて、これ以上醜い感情で棗のことを思つてしまふの？　いや……だけど、どうしても棗を求めてしまつよ……。

「星野さん？」暗い表情してゐる。隼人になにか言われたりした？」「

会話が終わつたのか、柴崎さんがすぐ田の前にいた。機嫌が良いみたいで、棗と上手くいったんだろうな。考えると言つてた棗も、本当は決まつてゐるんだと思うよ。だから、きっと、柴崎さんは棗の特別になれる。笑顔で「良かつたね！」つて言えたら最高なんだけどな……。

「星野さん？　どうかしたの？　なにか、変なこと……あつたりした？」

不安げな表情でそんなことを聞くのは、棗との会話を聞かれてい

るかもしれないって思つてゐるからだろ? が。大丈夫、大丈夫。私は「なんでもないよ」ってなにもないふりしないと!」

「ううふ、特に。友達がいつもより遅いから、心配しちゃつて」

「そつ……。じゃ、私は戻るけど……あとは棗とゆつくり話したりしたら? みんな、いないから問題ないでしょ」

柴崎さんはなんで平氣で恋敵を応援するチャンスをくれるのだろう。棗と話したいのは柴崎さんでしょ? 棗も柴崎さんと話したいはずだよ。私にいま、棗と話す自信ない。上の空だと思つから……一人きりにするのが一番だよ。

「遠慮しておくれ。棗は私のとき、冷たいんだから」

後ろを向いて微笑んだ。上手く笑えたつて思えないから。柴崎さんはため息をついた、みたいで、ハアッて音がした。

「棗に告白した。でも、返事はもらえなかつたから……三年生になる、始業式までに考えてつて約束したの。……これを聞いてどうするかは、星野さん次第だから!」

柴崎さんは階段を早足で上つていつた。私……どうしようと? 出来るこことなり……言つてしまいたい。全ての想い、棗への想い。春までに、棗は返事をする。私はその時……ただ黙つて知らないふりをするしかないよ……。

三年生になつたらどんなことをするのかな、どんな行事があるのかなあ、なんて考へてます。中学三年生つてこつたら、「実験」ですね。勉強とか、進路、恋に悩んで、でもちゃんと自分なりに全てをきりと終わらせる、みたいな感じにしてこきたいです。

やつといじりまで進むことが出来ました。三年生は甘い話がそんなになくて、みんなの抱えている想いが交わっていきます。隼人や千恵は季節のここにいれよう、とか決めたんですが、棗は最後の最後までどんな気持ちだったのか、誰を想っていたのかなど明かしません。口コロは主人公なのでつねに明かしてますね。清純な子ついいですよね。

始業式はいつもドキドキする。新しいクラス、いつもと違つ光景。これから発表されるクラスが……中学生最後の一年間を過ごすクラス。やっぱり、雰囲気が良いところがいい。馴染みやすいところがいいなあ。

「うわあ……。私たち、同じクラスになれるかな……」

真琴が元気をなくす。真琴はまだ女の子が苦手なんだろうな。高校も、男子校に行きたいと言つていた。行けないけど、真琴が本気でそれを望んでいる。三年生は進路。今はまだ、行きたい高校とかないから目標もないまま。美咲は小学校の頃からの夢があつて、夢を叶えるために、専門学校に行こうと考えているらしい。

千恵は……どうなんだろ。もつ、しばらく会つてない。会いたいのに、距離が遠い。長い休みがないと会えないのが……辛い。高校も一緒に通えないし、もしかしたら、もつと離れちゃうかもしれない。それが、怖い。

「ココロ～！ 真琴～！ 見てよクラス表～！」

美咲が遠いところから手をブンブン振つてる。クラス表……美咲はもう見たんだ。表情はよく分からぬけど、落ち込んでいる様子もない。美咲にとつて最高のクラスになれたのかなあ……。

「あー……ココロ、見てよー……私たち、同じクラスだよー！」

「ほ、ほんとー？ ビーー、ビーー。」

興奮してゐる私に、真琴はクスクス笑つて五組の方を指差した。目で表に書かれている名前を読んでいく。

「美咲！？」 み、美咲の名前、ある！ 美咲……五組！？
「わ、私の名前は……。もうちょっと下、かな？」 星野……だ
もん。最後の方か。

「あ……！ あつた！ 美咲も私も真琴も、三人一緒！
やつたあ！」

「奇跡……！」 三年生で三人一緒なんて！ 神様、ありがとう！
「今年……うつん、中学生の最後まで、最高の思い出を作ります！ 悔やまない、またこのクラスがいいなつて思える最高のクラスを……思い出を！」

「しかも、また大西と同じクラスだね。柴崎さんは違うみたいだし、二人は運命かもね！」

「棗も、一緒？」 柴崎さんは違う？ それは……嬉しいけど、少し複雑かな。近くにいられるけど……いつも棗を見れるけど、その分、棗が誰といふとか、誰を見てるとか……分かってしまう。好きなのに、切なくなる。好きな人が他の人を見るのってすごく辛いんだよ……？ 応援したいって言つても、結局応援出来ずに入るんだよ。近くで見れるのは嬉しいのと同時に、切ない。だから、棗とは同じクラスになつたのは、嬉しいのと複雑なのがまざつて「イヤゴチャ」。

「そういえば棗は見掛けないけど……どこにいるの？ まだ来てないのかな……。」

「キヨロキヨロしていると真琴も一緒になつて棗を捜してくれる。真琴は背が低いから……よく見えないとと思うんだけど……捜してくれて、ありがとう、真琴。」

「あ、あそこに大西いる！　口口口、話しこいきなよー。」

真琴が指差している方向を見ると友達と楽しく話している棗の姿。春休みの間に身長、伸びた？　髪の毛、切った？　……すげくいい表情をしてるよ、棗。吹っ切れた表情、してる。なにか良いことでもあつたのかな。

「惑う私に、真琴は腕をグイグイおして、行つてこい、の合図をする。うう……三年生だもんね。棗といられるのは、あと一年。短いんだ。だから、行動するしかないんだ。

「棗。おはよう！　また同じクラスだね」

「お？　星野か。おはよー！　また同じクラスかよ。まあ、またよろしくな」

友達と離れた隙に棗に話しかけた。私は思つていなかつた棗が、固まつた笑顔から、緩い笑顔に変わつていく。私の好きな、棗の笑顔。照れたようなはにかんだ表情に、赤い頬。大好き、棗……。好きだよ、好き……。言いたいよ。でも言えないよ。まだまだ臆病な私。いつか、棗に好きと言える日が来るのかな……。

「棗ー。ここにいたんだ？」

「うわー　柴崎！？　抱きつくなつてー！」

棗の背中から柴崎さんが現われて棗に抱きつぐ。ギュッと力一杯ではないけど、緩すぎるつてわけでもなくて。棗も棗で、なんだか拒んでないつて感じ。前より仲がいいつていうか……恋仲つていうか……。春休みに会つて、内緒で付き合つことになり、晴れて恋人

同士になりました！ とか？ 抱きつくるも、それとか……。

「誤解するなよ！ まだ付き合つてないからなー！」

「棗つてば！ 決めてるんでしょ？ 反事ー！」

返事……それは柴崎さんへの告白の返事だろ？ ちょうど今日までが返事を考へる時間。まだもうえてないってこと？ それとも、棗は今日決めるのかな。

私は春休みといつも長い、短い休みを利用して棗のことをずっと考へてた。時間があつてもなくとも、棗だけで。私は心がいっぱいになるんだよ。

「あ、ああ……。返事は一応、決まつてる」

曖昧な棗の返事。決まつてるとは言つてるけど、まだ迷つている棗。返事は私にはなんの関係もないから、深入り出来るはずもなく。私は、笑顔を棗に見せてなにも言わずに真琴の元へと戻つた。これくらいの強がり、したい。いつも私だけ、棗に負けてる。君に、溺れてる。

「口口口！ なんで棗にアピールしないのー？ あと一年、頑張つて棗を振り向かせよー！」

「ありがと、真琴。棗のこと、欲しいよ。でも……棗の気持ちを無視してまで、手に入れたくないよ」

たとえ、棗を無理矢理手に入れたとしても、すぐに棗は私から離れていってしまう。好きでもない女の子と一緒にいたいなんて思えないよね。手とか繋げないね。

私はそこまで出来ない。そんなことしたら、棗はきっと私を嫌いになるでしょう？ まして、離れていく棗をつなぎ止める方法なんてない。私はどっちにしろ、傷付くことしか出来ないの。なら、最後くらい、笑って、この人を好きになつて良かつた、って思つたいよ。だからね、私はしばらくの時間が必要です。棗のこと、振り向かせたい。振られてもいいから、想いを伝えたい。いつか……だけれど。

「もう一つ…… 可愛いよ、口々口ー。 いつのこと、嫁にこいー。」

「ま、真琴ー！ 嬉しい！ 真琴も可愛いー！」

会話を聞いていた人たちはなんと思ったのか、変な目付きで私と真琴を見る。友達のことを褒めまくる、上辺だけの友情だと笑うだろうか。周りにどう思われてもいいけど…… 少なくとも私は、真琴と上辺だけの友達だとは思わない。真琴は私の大切な友達。

「こちらー そこの一人、早く教室に行きなさい！ 遅刻するわよ」

「す、すいません！」

先生に怒られて浮かれていた私たちはすぐに走つて教室に行つた。さすがに遅刻、ギリギリだったから最後が私たち。みんなの目が、痛い。

クラスにはられた席の順番をみて、また、去年と一緒に席。隣は誰だろうな、なんて思いながら席についた。顔を見て「よろしく」とか言える自信ない。目が合つたりしたらなんて言えばいいのか分からなくなる。だから隣の人を見ずにいた。

「隣、よろしくね。星野さん」

柔らかな、聞いていて落ち着く声。なんとなく、この声で囁かれたら女の子は恋するんじゃないかな。「好きだ」とか言われたりしたら断る子、いる?「安心させて、優しさを含む声はずつと聞いていたいと思う。心が弱っている人なら、この声で甘い言葉を紡がれたら、甘えてしまうだろう。私もこの声好きだな。誰かに似てる声。誰だっけ……?」

「挨拶くらいしようよ。せっかく隣席なんだからわ」

「星野です、よろしく……え?」

パツチリ目が合つたのは……優しくて紳士的な、隼人。あれ?隼人って同じクラスだったの?よく見てなかつたから。仲良い人、集合したなあ。

隼人の隣席……やつぱり少し嬉しい。なんとか分からないけど、安心する。

「みんな、席着いてるか? 担任になるーー」

先生の登場です。男の先生だ……まだ若い先生だな。

長い話が嫌いな先生は、すぐに話を喋つて時間を早くしてくれた。生徒とかに人気がありそつ。今だつて、囮まれてるし。

「今日はゆっくり休めよ! 明日から授業があるんだから、

居眠りとかは絶対にするなよ」

「せんせー、先生は結婚とかしてるの?」

うわ、先生困ってるよ。女子生徒の相手は面倒なのかな。私はあんなに甘い声出せないし、可愛い仕草も出来ない。……気にしちゃだめ。私は私なんだもん。他の人と比べたらへこんじゃうだけ。気にするな、私。

「门口、帰るよー！ 早くー」

「あ、待つて！ すぐ行く」

駆け足で美咲に寄った。先生が言っていた通り、家に帰つて休みたい。春でポカポカしてるせいか、すごく眠たい。授業中、寝ないかな……。

「ふああ～。眠いな～」

美咲が眠い眠い、と呟く。これから部活のある人は眠くないのかな。バスケとかサッカーとか。私なら眠くて何度もあぐびをしちゃう。それに、最悪、寝ちゃうかもしれない。

美咲と話しながら帰っていると柴崎さんが門の前でニヤニヤしながら誰かを待っていた。

「柴崎さん？」

「な、棗！」

声をかけたらすぐに振り返つて私を見た。棗じゃないことが分かると、少しガツカリしているのが分かる。棗を待つているんだな……。返事をもらうため、なのか。

「嬉しい」ともあったの？　すいこ幸せオーラ出してるよ

「え……んーと、そつ？　とくこないけどね」

嘘、かな。なんで隠そつとするの？　私には知られたくないこと？　それって……。嫌な予感がグルグルと頭の中でもわる。考えたくないことだけ、有り得る話。

「棗と……付き合ひつこと、になつた……？」

声が震えた。動搖してるの丸分かりだよ。柴崎さんもなんとなく様子が変わった。言いにくそうに目を逸す。考えたくなかつた……でも、柴崎さんの態度が答えなんじやないか。私の勘はあたらないけど、今はあたつてゐる気がする。

「柴崎さん！　私、本当のことがしりたい！　嘘言われた
ら、倍傷つづから……」

「え……そ、その……？　なにを言つて——」

柴崎さんは言いかけた言葉をとめた。私の後ろをジッと見つめていたら、笑顔になつたり申し訳なそつな表情をしたり。いつたい、どうしたの……？

「柴崎！」

愛しい人の、声。聞きたくてたまらなくて、いつもその声に耳を傾けてた。名前を呼ばれる度に嬉しくて、彼の特別になりたいなんて欲を抱いた。

それが今、別人の名を呼んでいる……。

「棗……。遅かつた、ね？」

「まあな。んで、なんで星野とかいる？ まさか呼んだりしてないよな？」

なんだろ？……君を見ると苦しそよ。辛くて辛くてびくしそうもないよ。君のこと、好きだよ。好きで、好きで……もう惚れすぎて。いつも、見てるだけで良かつた。話すだけで嬉しかつたのに……。私はいつからこんなに弱く、醜い女の子になつたの？ こんな私、見られたくないよ……。

「棗……あの、場所、変えようか？」「ううじや……ね？」

「ん？ いいよ、ううじで。いつか広まるだろ？ し、隠す必要ないじやん」

笑つた。笑うのは好きなのに……棗の笑顔は私がいつも見てた。でも……棗のこと、好きな女の子はいる。私だけじゃない「誰か」も、棗を狙つっていた。それが今なんて……。

「柴崎、俺……お前に似合わない男だよ。かつこいいわけじゃないし、優しいわけでもない。けど……頑張つて努力するんで俺の傍にいてほしい、です……」

周りの音が、消えた。棗……棗……。柴崎さんと、付き合つたの？ 誰かのものになつたの？ いや、嫌……！ 棗だけは、本当に好きなのに……。想いを伝えられないまま、棗は誰かと幸せになるの？ 「好きな人が幸せなら、私も幸せ」という言葉があるけど……幸せになれないのは、私の心が狭いから？ 泪が出るよ

……棗。

「あー。 ハハロ、待つてよ~。」

もうなにも見たくない。なにも聞きたくない。ただ、涙をかわか
して、棗のことをすぐに忘れない。棗への恋心を……今、すぐに。

秉の選んだ返事、どうですか？　告白された時を思い出しながら書いてみました。私は誰かに告白したことはありません。だから、告白出来ることはすごいと思います。

辛いこともたくさんありますが、諦めたら終わりです。最後まで決して諦めないで下さい。人を好きになることは悪くありませんから。見たくないこともあります。でも、それを受け入れて、前に進んでいくしかないのです。一緒だから、少しずつ、自分のペースで進んでいきましょう。

「口が橐のことを諦めたいと思つとも、やいなあ、と思ひながら書きました。多分、彼女が彼を諦めようとするのはこれが最後です。泣くことはあつても、無理に忘れよつとはしない。自分の気持ちを大切にするのは大事なことだと思います。

棗のこと忘れないよ……好きになるなら、もっと楽しい恋をしてみたい。辛いだけの恋は……私にはたえられないのです。神様が本当にいるなら、私は棗を忘ないと願います。だから、お願ひ……棗への恋心を消して下さい……。

「口口口！　走るの速いよ～！　追いつくのに時間がかかったよ～」

美咲がすぐ傍で乱れた息を整える。走るつて……、そうだ、私、棗と柴崎さんが付き合うことになつて、それ以上見たくなくて……走つてここまで来たんだ。学校から八分くらいで着ける、小さなマントショット。なんでここに来たのかは私にも、よく分からぬ。落ち着けるから好きなのは好き……。

「でも、まさか目の前で返事するなんてね～。普通、人目を気にして、裏門とかで返事するでしょ～。こんなに可愛くて一途に大西のことを想つてる女の子がいるのにね～！」

美咲も少し怒つた口調で言つ。棗が柴崎さんに似合つたために頑張るつて……それはつまり、柴崎さんの彼氏だということ。似合つ彼氏になるから、付き合つてくれつてことだよね……。私、しばらく二人の顔、見たくないよ……。

「よしよし。大丈夫だよ、大西のことは忘れて。全く、大西もばかだよ～。大西が選んだのなら仕方ないけどね、あの時の大西は明らかに迷つた表情してたよ～。だから、ね？」

美咲の優しい気遣いが嬉しくて。嬉しい涙と苦しい涙がまた出て

くるんだ。

しばらく美咲の中で泣いたけど、美咲はなにも言わず、頭を撫でてくれたり、背中を擦ってくれた。

美咲は私が泣きやんだのを見て、静かに離れた。不安な私の目を確認してから、言った。

「『口口口、私がこんな』と『』のはおかしいけど……大西のことは諦めたらダメだよ」

「なん、で？」

「棗のことを諦めたいのに？ 今なら、まだ諦められると思うの。棗には彼女が出来た。私が入る隙なんてないし、棗を忘れた方が私にとつて、とても助かること。辛い想いを抱えたまま、顔を見る勇気はないよ。」

「あのね、人を好きになることは大切なこと。忘れたいって思つて、簡単に忘れられないよ。すぐに忘れるのなら、その程度。口口口は、大西への想いはその程度だったの？」

「違う……。棗のこと、本気で好き……。忘れたく、ないよ……」

……

忘れたくない、棗との思い出。よく考えれば、辛いことばかりじゃない。楽しいことだって、嬉しいことだってあった。私が、忘れてただけ……。

本当は、棗に会いたい。棗と話したい。棗の顔が見たい。……棗を諦めたくない。

「じゃあ、口口口はどうしながらやいけないのか分かるね。」大

西が付き合つてゐるからとか関係ないから、それによく並つよ。
失恋した女の子はきれいになるつて~」

私がしなきやいけないのは……棗に想いを伝えること。でも、私、まだ告白する勇気がないんだ。それに、棗は付き合つたばかりだから、告白しても振られるのは分かるの。どうせなら……進路がちゃんと決まったときとかに告白したいよ。今の私はまだだめだから……君に伝えるくらいは、似合ひう女の子になりたい。せめて振られるなら……素の私を、見てもらいたいから。

「うん。分かつたよ。私が棗に似合わないけど……告白のときくらいは、可愛くうつりたい」

「その調子だと、まだ告白しないんだねえ。でも、安心してね~！ 私も口口口のために協力するから~！ 計画立てる~？」

「計画……~？ そこまでしようとは思わないよ~。よくやる、『かけひき』ってやつ？ おしてもだめならひけつていう……積極的だつたり、急に冷たくなつたり。それで気を引くつむりは全くないから。

「遠慮しておきますよ！ 私は素のままで好きになつてもらいたいもん」

「口口口はそういう子だよね~。まあ、私も計画なんて立てないけど~。でも、前よりは応援するよ~！ 出来る限り、一人きりの時間とかもつくるし~」

「うーん……それは喜んでいいのかな？ 一人きりの時間なんて

……柴崎さんに悪い気がする。一応、カレカノだもん。ほら……ドロドロとかでよくある、「浮気したわね！？」とか「なんで一人でいるのよ！」のありがちなパターン。女の子とたまたま一人で話してただけで、それを付き合つてる彼女に見られる、っていうやつ。それで誤解をとこりとして話し合つんだけど、彼女は聞く耳もたずで結局別れちゃう……。そんなの、やだ！

「だめ！　私のせいで一人が別れるとかいやだ！　せつか付き合つているのに……」

「私、一人が別れるとか言つてないよ～？　ただ、大西と口口が話せるつて考えてただけで～」

なんだあ……。そういうことが。つて待つて！　棗と話しているの！？　柴崎さん、嫉妬するんじゃないの！？　私が棗のこと、好きなのを知ってるから警戒すると思つ。絶対に話すことなんて出来ないよ。

「例えばね～、大西が忘れ物をしてそれを届けるとか～。同じ班になつて係が一緒とか～！　同じクラスなのは口口なんだから、出来ることはいつぱいあるんだよ～」

そうかもしねない……でも、いいのかな？　それって人の彼氏を奪うのと同じなんじゃないの？　棗にも「なんだこいつ」とか思われてるのがこわいよ……。棗に嫌われるのがこわくてたまらない……。

「口口が嫌つていうなら、私はなにもしないし、応援だつてしない。むしろ邪魔する。大西のことを忘れてもらつために、他の男の子を紹介するし、大西とは絶対に話せないようにする。田だつ

て合わせないよう」。それでもいいの?」

「そ、れは! よくない! それじゃまじしなくても……」

美咲が真剣だから。本当にしそうな気がして。私はそこまでされたら、嫌でも美咲を遠ざけようとするかもしれない。
美咲が私のことを考えてしてくれることなんだろうけど……私は無理だよ……。

「じゃあ、遠慮しない。彼女がいるとか、そんなことは考えずに。自然体で、いつもと同じで。不自然な態度をとつたら、気をつかつての分かるでしょ。気をひこうと思われるかもしれないけど、他人に気をつかうことはないよ。ちゃんと、自分の想いに正直になるべきだよ」

私が、正直になつても……いいのかな? 粕が好きだという、心に素直になつていいいの? みんなに迷惑かけるかもしれないよ? 傷付けるかもしれないよ? それでも……いいの?

「名前、口口口でしょ! 名前の通りに、心に素直になりなよ」

「美咲……。うん、うん……正直になりたいけど……柴崎さんには誤解されないかなあ……? 粕が責められたりしないかなあ……?」

美咲はまたため息をついて、私を呆れた目で見る。なんでそんな目で見られるのか分からなくて、俯いた。

「そんなに考えなくていいの! 口口口は大西が好きなんで

しょ！ 片思いしてるんでしょ。なら、前と同じようにさ……大西を振り向かせようとか思えばいい。彼女がいるとか関係なくて、最終的に決めるのは大西だよ。だから……そんなに自分を責めなくていいから！」

棗が決める……。振り向かせる？ 棗が私に笑ってくれるの？

私は……柴崎さんと一緒にいる棗を……応援出来るの？ 出来ないのに……強がってどうするの……。

「そう、だね……。私は今まで、強がっていただけだよ……」

「分かったなら大丈夫～！ 明日からいつも通りにしないとダメだからね～？」

美咲がほんのり笑った。それは、安心した時の笑顔だつて知ってるよ？ いつも隣で励ましてくれたりしたから。何年、一緒にいると思つてるの。時々、喧嘩もするけど……やっぱり友達。

「美咲、ありがと……。最後まで頑張る……もづ、棗を諦めるとか言わない。好きだから……、いつか忘れるかもしれないけど、好きなときは……無理に忘れない。自然に誰かを好きになつていくものだから」

美咲は二ツ「コリ笑つて応援してくれた。そのとき、改めて思ったの。

たとえ、棗を想つて辛いことや悲しいことがあつても……最後まで諦めないつて。乗り越えられる、強い心をもつから。

今は棗の顔が見えるからいいけど……高校とか、大人になつたとき、棗のことは見えないだろう。いつまでも、棗と笑い合えることはない。そのときに、「初恋の人つて誰？」って聞かれたときに、「

「彼女がいた人だよ」って笑って、初恋のことを懐かしむように、いつか話せたら。「彼女がいて、辛かつたけど、後悔はないんだ。あの人を好きになつて良かった」って言えるように。私は君に、後悔しないようにしたい。あのとき、こうすればよかつた、あんなこと言わなきゃよかつたなんて思いたくないから。好きな人を振り向かそうと思つて、すぐに行動してたよつて。胸をはれるように。私は、君になにか出来る？ 出来るなら……私はしましよう。君のためにな、なんでもしよう。棗、棗……。好きな気持ちは変わらないよ……。大好きだから……。

「私、棗が好きだあ……。棗を想うだけで、あたたかくて切なくなる。やつぱり、恋つて分からぬ」

「そうかもね～。口口口、恋話とか好きじゃなかつたし、恋すら興味ないつて感じだつたもんね～。恋に冷めてた女の子が恋するなんて、本当にびっくり～」

そう思えば、私は中学に入るまで恋なんて興味なかつたな……。小学校のときとかに、友達同士で何人か集まつて恋話したり、修学旅行のときに寝たふりをして、夜遅くまで語り合つてたよね。私も参加させられて、適当に相槌をうつてたけど、そうすると「口口口は誰が好きなの？」と聞かれたものだ。もちろん、否定するのだけど。否定しても「隠さなくともいいじゃん！」ってお決まりパターンだつた。しつこいときは上手くごまかしたのは今でもすっかり覚えている。そんな私がまさか……恋できるなんてね。全く予想出来なかつたよ。

「初恋は一生に一回しかないからね～。大切にしなよ～」

「そうするつもりです」

二人、顔を見合させて笑い合つた。傷ついたとき、友達の大切さに改めて気付く。支えられてるのはいつも私で、私は少しも恩返しを出来てないけど……いつか、いつか支えられる側じゃなくて、支える側になるから。美咲がなにかに傷ついたり、悩んだりしたときはすぐに飛んでいくから。だから、もつと強くなるよ。いつか君を笑顔にさせるために。励ませるよう）。私ばかり頼つて甘えるのは悪いから。崩れそうなときは頼つて甘えてね。必ず、力になるから。

蜜柑色の君も、物語の半分が終わりました。最後の展開は決まっているんですが、本当にいいのかな……と迷っています。変更したら話が合わなくなるので、突き通しますが……若干、変わることもきつとあります。

もうすぐ、一月が終わりますね。一月に完結はまだ出来ないと思っています。完結は、だいたい三月かな、なんて思います。遅くても、四月の最初。それなのに、ノロノロな展開ですいません！なかなか自分の思った通りに進まなく、想像以上に悩みますが、それでも楽しいので、小説が書けてよかったですと思います。

美咲が応援してくれるから……私が棗を忘れてくないから、もう自分に嘘はつかない。それに、三年生だもん。棗と楽しく話せるのも、棗の笑顔を見れるのも……最後。来年の今さら、みんな離れ離れ。いつまでも悲観的に思っていたらだめなのを、美咲が教えてくれた。最後なんだから、後悔しないためにも行動した方がいい。そして、棗に想いを伝えられたらいい。それ以上、望んだら欲張りだよね……。

「棗ー！　『じめん、英語の教科書貸して！』

休み時間、柴崎さんが窓から顔を出した。棗と付き合つことになってから、このクラスに来るのも前より増えた。朝、学校に着くといつも一人で寄り添つているから、教室に中々入れなくて、隼人に会いにいって時間が経つのを待つて。部活だって一緒に行つてのも知つてるし、一緒に帰つてのも知つてる。棗が柴崎さんと付き合つていても、やつぱり見ちゃう。苦しくなるのを分かつていても……棗を捜してしまつ。

一人の様子を見て、周りからは「付き合つてる」という噂が流れているみたい。噂じゃなくて、本当に付き合つてているのに、なんで周りに言わないのかなって時々不思議に思う。ただ、柴崎さんのことを密かに想つていた男の子が嘆き悲しんでいるのを見たのは秘密だ。

「はい、少し汚いけど、落書きとかねえかい

「あつたらおかしいって！　受験生って自覚がないじゃん！　でも、棗が分かんないところがあつたら、教えるからね！」

クラスのみんなは、二人に釘付け。私も棗を見たけど、顔を窓に向けて、口の中に背を向けているのでどんな表情をしているのか分からない。彼女だから、柴崎さんにしか見せない表情とかあるんだろつなあ……。羨ましいや。

一人はしばらく、休み時間のギリギリまで話していたけれど、チヤイムがなる一分前くらいに柴崎さんは戻つていった。それをチャンスに、近くにいた女の子が棗に近づく。

「大西……あんたって、ほんとに柴崎と付き合ってんの？」

いきなりの質問にクラスが静かになる。棗がなんて言つのか、興味津々といった様子。私はもう……分かつていてるから。棗が柴崎さんと付き合つてゐる。だから棗が言つことは予想出来た。聞いてないふりをして、耳を傾けた。

「ああ、柴崎とは付き合つてゐるよ。それがどうかしたのか？」

少し……痛みを感じた。それを悟られたくなくて、顔を下にして隠した。棗が言うこと、分かつていてのにな……。棗から聞くと現実で、彼は柴崎さんのものなんだなつて自覚した。今までのは、きっと私の強がり。

棗がはつきりと宣言したから、みんなは騒ぎ立てる。男の子は嘆いていたけど……棗は気にとめてない。女の子は、仲が良いグループで騒ぎながら棗に質問攻めをしている。他のクラスにもすぐに広まるだろつ。いつこう、恋愛話とかは情報はやいから……。

「堂々と言つたね~。それがなんだつて話だけどさあ~、なんでこんな受験生のときに付き合おうとか思えるわけ~？」

隣に座っていた美咲がシャーペンを弄りながら呟いた。美咲は私が傷付くと思って言つてくれたんだと思う。美咲、いつもは意地悪なんだけど……根は優しいから、元気がなかつたりすると、慰めよりも、おもしろいことを言つて、笑わせようとしてくれる。だから……美咲も大好きだよ。

「やつぱり、まだ春だから自覚ないのかなあ。それとも、今 のうちに告つて、好きな人と同じ高校行こうとか？　あ、一か八かつてのもあるよね～」

美咲は……高校決めたのかな。好きな人と、同じにするのかな。彼氏とかいるはずだけどなあ……美咲つ。性格はのんびり屋で漫画が好きで……見た目は可愛い。美咲と私はよく雰囲気とか、外見が似てるって言われるけど、私は似てないと思う。私、美咲みたいに可愛くないもん。美咲は可愛いから、彼氏いるよね。はあ……いいな。

「私も、好きな人とかいないんだよね～。彼氏いる人、羨ましい～」

「い……！？　う、嘘だあ！　　美咲、彼氏いるでしょ！
好きな人いるんじゃないの！？」

つい興奮して、大声を出してしまった。みんなの、周りの目が痛い……。私は恥ずかしくて、笑顔も自然と引きつっているのもなんとなく分かった。でも……でも！　美咲は彼氏いないって言うし、好きな人もいないって言つんだもん！　驚くのも仕方ないよ。

「本当にいなか～。好きな人は、諦めたの～。もう、満足だしへ。彼氏は元々いないよ～」

諦めた……？ 私にいつも「諦めたらだめ」だと……言つていたのに？ なんで……諦めたの？ そんな悲しいこと、言わないで……。私も頑張るから……美咲も一緒に頑張ろうよ……？

「人の気持ちは誰かに決められるものじゃないから」。ココロが諦めるなつて言つても、私は全く好きじゃなくなつた。だから、意味ないよ？」

人の気持ちは変わる……それは仕方のないことなのは分かるけど寂しいよ。私がなにを言つてもだめだし、関わるのもだめだと思つ。でも……美咲が私を励ましてくれたのは、自分と重ねていたからなんじやないのかな？ 言い聞かせていたのかな？ 変だよね……私が悲しむなんて。私に、関係ないのに。

「そんな表情しないで。ココロが悲しいと……私も悲しくなるからう！」

ギュッと美咲は抱きつぐ。私より、背がちょっと高くなつた美咲。前は、私の方が高かつたのになあ……。成長、していく……。そう考えると少し寂しくなつた。みんな、成長して、こんなに集まりあうこともないんだ……。いつか、こんな日々も懐かしくなつて……大人になつて、再会したときに「変わつた」とか言うのかな。今より、顔つきも大人っぽくなつて、こんなに騒いだりしなくなる。やつぱり、寂しいな……。

私も、美咲を抱きしめた。今、このときをしつかりと覚えておきたくて……。

美咲は私から離れて机に座り直した。はにかんだ笑みと、照れた笑み。本当に、可愛い……。

「ハハロが可愛いんだよ～！　あ～、もう！　渡した
くない～」

「わ、渡すってなに～？　そんなつもつないんだけど～？」

渡すってなにを～？　それに、美咲の方が可愛いじゃん！
睨んでも、可愛いものは可愛いよねえ……。でも、そんなに睨ま
いでほしいかな。また抱きつきたくなるよー。

「ハハロにも、彼氏は出来るから～！　その前に、ハハロの
ことが好きな男の子、いるから～」

なにを根拠に？　私に好意を寄せる男の子なんていないよ。私、
おとなしいし、地味だし、男の子とそんなに話さないし。なんでそ
んな自信満々に言えるのか、分かんない。

「まあ、いいか～。今のは忘れていいよ～。いずれ分かるから
～。それより、千恵から連絡とかくる？」

はぐらかされた……。気にする必要はないけど、ほんの少し気に
なった。美咲の様子だと、教えてくれることはないだろ？　千恵
の連絡……。どうだり……最近、きてない気がする。

「きてないよ。忙しいんだと思ひ。千恵も向ひついで受験生なん
だし、勉強苦手だしね」

「ああ～！　そうかもねえ～。会えるのは夏休みかなあ、そ
れなら。夏休み……楽しみだね～」

夏休みか……多分、宿題多いだろ？　お母さん、勉強について

いろいろ言ひし。遊びたいけど……夏休みに勉強やらないと、危ない氣もする。どうしようかな……うー、迷う……。美咲に教えてもらう……？ でも、教えるのは苦手だつて言つてたなあ。ドリルとか買おうかな。うーん……今年は遊べないな。

「ねえ、ココロ～。夏休み……部活、あるといいよね～！出来れば、バスケ部と～」

「な、なんで？ 夏休みは部活、あると思つたけど……毎年あるし。大掃除させられるもん」

「あー。これから部活だよー。勉強と部活、難しいねえー」

時計を見る。まだ……五時間目の休み時間ですよ？ 六時間目あるし、掃除……まだ時間はたっぷりあるよ？ 部活のこと……

「あー。はやく、後輩たちに会いたいよ」

「なあに？」
後輩くんの中に、好きな男の子でもいるの？」

ただ、なんとなく思い付いただけで。本当はそんなこと、思わなかつた。からかうだけで終わると思っていたのに。

美咲は……顔を若干にやつかせた。え……まさか好きですパタ

「なんだそつなるのかなあ～？」 ただ、気に入つてゐただよ～。どうして結びつかないとするの～？」

「え、え……その……美咲、にやけてるよ！
よー？ 隠さなくても分かるよー！」

後輩くんが好きだなんて知らなかつたよ！ 確かに、美咲は後輩くんに話しかけてるけど……私が後輩くんと話してたら、まじつてくるけど！ それは嫉妬だつたんだあ……。私、美咲を応援するのに！

「口口口～！　私は本当に好き
変に妄想しないでよ～！　じゃないから～！」

「隠せなくともいいよ！
応援するからー。あ、なんなら
皆由ゆうみへ。」

「冗談で言つてみると美咲はプリッと横を向く。あ……拗ねちゃつた。からかい過ぎると美咲はこうなるんだよな。それが可愛いの、気付いてないのがまたいいんだよね。

「ごめんね美咲。美咲がつい、可愛くて……」

「可愛くないよ～！　私が可愛いんなら「口」はもつと可愛いよ～！　よく似てるって言われるし～！　私は似てるって言われて嬉しいけどね～。」口、クラスの男の子の話に出てたよ～。去年、冬くらいにね、クラスで一番可愛い女の子の話してて、星野口口口だつて言つてたもん～。クラスの中でアイドル歌手つくるな

ら、センターは星野で、その他の女の子は口口口の後ろで踊るのが仕事だつて～」

そんなこと、話していたの？ 私は全く可愛くないし、アイドルだつてなれない。モデルだつて、女優だつて、憧れたことはあるけど……私じゃ無理なんだろうなつて思つてた。歯並びがきれいなわけじやない。肌が白いわけじやない。会話が上手なわけでもない。だから……お世辞だよつて思う。

「それに～！ 後輩くんだつて言つてたよ～！ 星野先輩はきれいだつて～。素直に喜びなよ」

「んー。お世辞を、ありがと～？」

私じゃなくて、みんなきれいなんだよ。恋する女の子はきれいになるつて聞いたことがある。好きな人に可愛いと思われたくて、オシャレしたり、ダイエットしてみたり。みんな努力してる。だから、可愛くて、きれいなんだよ。

出来るだけ笑顔にしてみて、美咲に笑いかけた。

中途半端なところで切りました。次回は三年生夏編。でも、主に夏休みの話になるとと思います。宿題は多くて、それに加えて部活もたくさん。校庭とかで汗を流しながら部活に打ち込んでいる人って、かつこいいと思います。

夏。去年とは違つて、君の隣には彼女がいる。隣の彼女と一緒に部活をしながら汗を流して、笑い合つてゐるのかな——。

数ヶ月が過ぎて夏になつた。太陽がジリジリと照り付けて、肌もすっかり日焼け。サッカー部や野球部は私よりも焼けてるけど、中には驚くくらい、白い男の子もいる。男の子は、日焼けしてた方がかつこいいけどな……。

前の席の子からプリントを渡されて一枚取りながら後ろに渡す。もらつたプリントは、夏休みの過(こ)し方にについて。そり……明日から夏休み。

「分かつてこるのは思(おも)つが、お前たちとは受験生だ。夏休みをどう過(こ)すかで変わる。分からないとこからはドリルでも買って、ちゃんと分かるようにしろよ。じゃないと、勉強についていけなくなる」

先生がプリントを見ながら話す。先生も必死なんだね。生徒に、高校に受かつて欲しいから。

私はぼんやりしながら先生の話を聞いた。だつて、まだ受験生なんだという自覚がないんだ。行きたい高校も、目指している夢だつてない。なんとなく、で選んでいるだけ。本当に自分のしたいことがなくて。先生の話を、受け流した。

「あ～。先生の話、長かつたね～。高校なんて、まだ決まってないよ～。ほとんど、決めているのにね～」

「あれ？ 美咲……確か専門学校に行きたいって言つてたよね？ 夢を叶えたくて、行くんでしょ？」

帰り道、先生の高校の話をした。美咲はてっきり高校決まってると思っていたから……意外。私みたいに、夢がないわけでもないなら、なんで『決まってない』って言うのか分からない。私は、美咲に諦めてほしくないよ！

「そ、うなんだけね～。反対されたの～。公立に行けつて～。親に反対されたら……もう、仕方ないなあつて～」

クシャッて、美咲が泣き顔を見せた。ずっと、美咲は夢を追いかけていたのに……。小学校の頃から、ずっと……。いつも、私に言つてたね。

「絶対に夢は叶えるんだから～」

私、美咲の夢をずっと応援してきたよ。頑張ってる美咲を見てきたよ。だから、美咲が夢を叶えるために、してきた努力、知つてるよ。諦めないで……美咲。

「美咲、諦めないで。夢はこれで終わつたわけじゃないよ。高校に行つても、夢を追いかければいいんだと思う。夢、叶えるんでしょう？」

「本当に、口口口は優しいよね～。うん、そうだね～。悩むなんて、私らしくないよ～！ ちゃんと話してみる～。遊びじゃなってこと、親に話してないしねえ～」

口調で明るくいう美咲だけど、まだ落ち込んでいる。でも、さつきよりは元気になつたかな？ 美咲は落ち込んだらダメだもん。もし落ち込んだり、私が支える。美咲が私にしてくれたようにね。

「ココロはどうなの～？　高校、決まったの～？」

「まだだよ。やりたいこともなくて、夢もないんだ」

そう。夢もなくて、適当に高校選んで。なんとなく通う。それでいいのかなって、幸せかなあって考えてもいい案は浮かばないの。やりたいことがあつたら、もつと決まるのかな？

美咲も考える仕草をしたけど、なにも浮かばなかつたみたい。

「ココロ……ヘルパーとかになつたら～？　前に、働きたいつて言つてたよね～」

そういえば……そうだ。職業体験で老人ホームに行つて、話相手をしたり、お茶を入れたり、ドライヤーで髪の毛を乾かしてあげたりした。去年の……寒い時期だった。大変だったけど……ヘルパーさんになりたいって思つたんだよね。今も、諦めてはないけど……すっかり忘れてたよ。

「でもね、私がヘルパーさんになれたとしても、続けられる自信ないんだあ……」

それが本音。私、辛いこととか引きずるタイプだから……続けられるのかなって。なれたとしても、仕事がきつくて辞める人が多いって聞いた。うつ病になる人もいるんだって。それを聞いたら、私なんかが出来るのか不安になっちゃう……。

「大丈夫だよ～。ココロなら、大丈夫～！　それにさあ～、ココロが精神的にしんどくなつたら、私は駆け付けるよ～！　今と同じように励まして応援すると思う～」

「美咲、ありがとう」

不安じゃないって言つたら嘘だけど。心が軽くなつたのは、本當だよ。私は話すのが苦手で、言いたいことも言えなくて、聞きたいことも、はつきり聞けない。恥ずかしくて、感謝の言葉は言えないけど。今は笑顔でこうしか言えない。大人になつたら、今より堂々と出来るのかもしねえ。

「悩んでたら、相談くらいはしてね～？ 友達……だから～！」

美咲らしくないな、なんて思つて笑つた。『友達』とか言わないから。『信じてる』とかは言つんだけど、それは真剣な時だから。こんな帰り道で言つるのは意外で。どうしたのかな。

「な、なんで笑つてるの～？」、口々口が言わせたんだから～

「美咲……可愛い！ はあ……面白い～」

美咲は口を尖らせてムツとした表情を作つた。そんな表情でも、可愛いのは羨ましい。美咲が双子だつたらな……毎日ドタバタしてるんだろう。今でも、こんな調子だから。

「ごめんね。美咲、機嫌直して」

「も～！ なにも、謝つてほしいんじゃないよ～！」、口々口がどんな対応するか気になつただけで、予想通りだけぞ～

予想通りなら、今度は私が拗ねてみようか？ そう聞いたら笑うかな。美咲のことだから、笑いながら謝るね。別に謝つてほしいわけじゃないから、なにもしないし、なにも言わないけどね。

美咲はピタリと足を止めて、私に小さく手を振った。いつの間にか、分かれ道まで来ていたようだ。

「『『『口も、ちゃんと親と話すんだよ』』』 進路はそんなもんだから~」

「ん……分かってるよ。資料とか見てくるよ！ またね」

部活でまた会えるから、長々と話し合わない。それが私たち。それに、遊ぶことだって出来る。遊び過ぎはいけないけれど。

美咲と別れて、鞄を肩にかけ直す。うん。明日から、頑張りう！

真面目に、勉強するんだから！

「手紙、今日のうちに書いておこうかな？」

千恵から手紙は来てるのかな。いつ頃に来るのか、書いてくれたら分かりやすいけど、会えるだけで嬉しいから。……それに、いつ千恵が来ても大丈夫なように常に昼は家にいようと思うし。まあ……暇人ともいうだろうけど。

「『『『口！ 千恵ちゃんから手紙きてるわよ』』』

「え！ ほ、本当だあ！」

お母さんが玄関に立っていたので、すぐに靴を脱いで手紙を奪つて部屋に入つて手紙のシールをはがして広げてみる。千恵の綺麗な文字が並んでいた。

「ハハロ、元気ですか？」私は元気だよ。高校も決まったよ
ただ、油断はしていられないで、そっちに行くのは三日間
くらいになります。学校にも顔を出したいな、と思っているんだよ。
あ、部活の日とかぶっちゃつたらごめんね。だめな日があつたら、
連絡頂戴ね」

静かについた息は、すぐに消えた。私は明日から夏休み。連絡し
てもいいけど、千恵が今住んでるところに私が書いた手紙が千恵に
届くのは、一ヶ月という長い時間なんだよね。手紙を今出しても…
…届くのは、夏休みが半分以上終わつたときだよ。んー……どうし
よう。部活とかぶつたら、私も嫌だもん。千恵との時間が……千恵
に会いたいよー！

「ねえ、ハハロ……話があるんだけど、いいかしら？」

「おわあ！？」お、お母さん、いきなり来ないでよー！」

扉から顔をひょいりつ出す。も、もづ、びつくりさせないでよー！

わ、私……千恵からの手紙を読んだばつかりなんだからー。
千恵のこと、考える時間くらい、いいでしょ……。

お母さんはクスクス笑つて、「悪いわね」なんて言つけど、私は心
臓に悪過ぎて……胸に手をあてて、バクバク鳴る心臓が、静まるの
を待つた。

「は、話つてなー？」

お母さんが部屋に来たのは話があるからなんだよね？　こんな
とき、決まって嫌な予感しかしないんだよ……。現になんか緊張し
た雰囲気が漂つているもん。

「ハハロは進路考てるのかしら？　あなたも、受験生だか

「う……決めてるわよね？」

進路の話か……いつかはされると思つていただけど、終業式のあとにされるなんて。今日は、進路のことばかりだな……。去年からずっと言わってきたけど……毎回言わると、イライラする。心配するのは、分かるよ？　私の成績じや、ランクの高い高校に行けない。少し下げないといけないのも、分かってる。でも……。

「決めてないなら、公立に行きなさい。私立は絶対にダメよ！　私立に行かせるくらこなら……高校なんて行かせないからねー！」

私は誰かに決められたのは嫌だよ。自分でしっかり決めたいの。行きたい高校も、将来も。親になんでもかんでも決められるのはやめたいの。

お母さんの目を見て、しつかりと言えたか分からぬけど……お母さんは黙つたままで。不安になる。生意気なこと言つたかな？

「せつ。なら、好きにしなさい。でも、高校は公立にしなさい。それなら別に反対しないわ」

許してくれたのか分かんない、曖昧な言葉。どうこうこと、つて聞こうとしたら、お母さんは黙つて部屋を出でていった。はあ……あんなこと言つたけど、高校のことはよく知らない。資料、見たいけど資料だけで分かることは少ないし……。偏差値だつて知らない。先生に、相談しようか？　進路担当の先生……誰だつたかなあ？

そういうえば、美咲はどうなつたかな。親と話せたのかな？　納得してくれたらいいの。美咲が真剣なこと……伝わればいいな。ゆつくり目を閉じて……高校生の自分の姿を想像してみる。髪の毛は、長いのかな？　細身かな？　メイクとかして……オシ

ヤレするのかな？　今では想像出来ないことばかりだ。今の髪の毛は、長いわけじゃなく、鎖骨くらいで、ヘアアレンジは全くしない。いつも下ろしたままの髪。毛先がはねて、ボサボサ。アレンジしたいなあ、って思つても……出来ることは限られてるし。たまに……体育の時とかにひとつに結うだけ。

「ココロは、伸ばした方が可愛いよ！」

「つか……友達が言つてくれた。伸ばしてみようかな……。髪の毛を切つたのは、少し前だから……すぐには伸びないだろ? な……。そういうえば、ファッショソ誌とかも買ってないやあ。千恵に見せてもらつたことはあるけど……買おう、とまでは思わなかつた。今持つてる服だつて、オシャレじゃない。おかしいな……前までは興味なかつたのに。ファッショソ誌を買ひに……コンビニに向かう私はなに？　一緒にいられるの、最後だから、可愛くつづりたいとか……考へてるから？　棗に可愛く思われたいの……わがままかな？

「う……明日、バスケ部も部活あるんだ」

部活予定表を見て、ため息をはく。買つてきたばかりのファッショソ誌でヘアアレンジが載つてたから、明日試そうかなあ……なんて笑つた私は、どんな表情をしてただろ? ?

朝、早く起きて雑誌を見ながら髪型を変えてみた。いつもはねでいる毛先をスプレーとくしまつすぐにして、ゴムで横に括つて……上手く出来たとは思ひ。な、棗……今日会つかな？ 会つたら嬉しいけど……恥ずかしいなあ……。

「時間、まだあるや。……く、変じやないか、鏡見よひひとー。」

鏡で確認するのは、今日で何度だらうか。普段は髪型とか気にしないのに、バスケ部も今日いると知つてヘアアレンジする私は単純なのかも……。棗と会えるのすら、分からぬのにな。……うつん、だめだめ！ 気にしたらだめだよ！

「よしー 行つてくるねー。」

十分前に家を出た。九時までには美術室に着いてないといけないから……ギリギリだな。八分かかるつてことは一分前に着くのかな？ 遅刻したことはないので、焦つてないはず……。でも、足が早く進むのは、期待してるからなんだ……。

「おっはよーー！ あ、可愛いねー！ ピコロ、似合つてるよおーー！」

結局……登校の時は棗には会わなかつた。残念だな……仕方ないけど、見てほしいなつて思う。へアアレンジなんて、そんなにしたことないんだし……。友達に褒められて嬉しいよ。でもね……好きな人にも見て、可愛いって思われたい。褒め言葉をもらつたら……幸せすぎて倒れるかも！ そういうえば、棗はどんな髪型が好きか

な？　お団子？　ポニー テール？　ゆるふわ？　棗の好み
知りたい。はあ……私つていつからこんなに欲張りになつたの
かな。

「あ、おはよ星野さん。髪型変えた？」

後輩くん……聞かなくても分かつていいでしょ！　目がニヤニヤ笑つてるよ！　そんなに笑わなくてもいいじゃん……。私だつて、不器用だから綺麗に結えてないけど！　これでも精一杯したんだよ？　朝……何時に起きたと思つてるの。

「そつだね、似合わないよね。綺麗に纏められてないもんね」

「別に似合わないとが言つてないけどなー！　まあ、いいんじゃね？　俺は好きだけどな、この髪型」

な……！　褒められた！？　後輩くんが……褒めてくれた！

ええ！　し、しかもこの髪型が好きなんだ？　初めて知つたよ……後輩くんと、好みの話とかしないから……好きつて言われたの、初めて！　うわあ……な、なんか恥ずかしいな……。まるで、私が後輩くんのことが好きみたいじやない？　いや、好きなのは好きだけど、恋愛感情とは少し違うもの……なんていうんだろう？　恋愛感情に似てるものなんだけど、少し違う……。違う愛情？　幼い子供に向ける感じ。幼稚園児とか、低学年の……。うーん……弟に向ける家族愛なのかな。弟、いないから分からぬけど。可愛らしい、とは思つ。後輩くんは、私の弟？　ううん……私以外の人も、後輩くんを弟のように可愛がつてゐるもん。みんなにとつて、弟的存在。

「あー！　おはよー！　可愛いねえ、後輩くんたちは～

！　彼女とか、いないの？

「はよっす。男に可愛いなんて言つもんぢやないですよ？
これでも、一応は男なんですから！　てか、なんで彼女なんですか！？」

あー……私より大人っぽい女の子には、ちゃんと敬語なんだよね。
確かに私、童顔で……中三になつても、小学生に間違われるけど……
…少しさは大人っぽい顔立ちにならないかな？　親からも、友達からも「顔つき、幼い」って言われるし。友達も、身長高いし……雰囲気がクールだから、小学生に間違われることはないらしい。逆に私の雰囲気が「ふわふわしてる。天然」とか。意味が分からな……。

「え、先輩つて彼女いるの？　あたし先輩のこと狙つてたのにい！」

後輩の、中一とは思えない色気付いた香水をブンブン漂わせて後輩くんに近付く中一の女の子。少し前に入部してから、後輩くんを「先輩」と呼びながら追いかけまわしている。後輩くんが先輩になる姿を見るのは、慣れない。あんなに暴れ回っていた、小さな男子がねえ……。今も暴れてはいるんだけど。

「いや、いないって！　先輩こそ、彼氏いるんぢゃないですか？　受験とか、大丈夫なんですか？」

「さあ～？　どうでしょ～ね？　ま～、受験はなんとかなるよ～。私立も受けるから、ね～」

私、この場を離れよう。受験の話はついていけないのはもちろん、

後輩くんを狙つてる後輩ちゃんの目がこわいよ！ 肉食なんだ、きっと。後輩ちゃんが田をギラギラさせて目が語つてるよ！

「あたしの先輩をとるんじゃねえよ！ 先輩はあたしとの方が似合つてんだよ！」

そう、幻聴が聞こえるよ。まあ、後輩ちゃんが後輩くんを好きなのは見てて分かる。恋する女の子の瞳だもん……。時々、後輩くんに熱い視線をおくつているのも、知つてる。後輩くんは、相手にしてないみたいだけど、少しくらい気持ちに応えてあげてもいいんじゃないかな？ 容姿とかも可愛いから、褒めたりすれば飛び跳ねるほど喜ぶだろう。それに、一人は似合つている。後輩くんは、かつこいとまではいかないし、背だつて男の子にしては低い。可愛い感じ。なんか……弄りたくなる、後輩くん。そういうえば、後輩くんをこんなにガン見したことないかも。後輩ちゃんが惚れるのは……ん、微妙に分からぬ。

「ねえ、先輩！ あたし、先輩が好きなのよお！ だから先輩の彼女にしてえ？」

「いや、無理。そんな軽い気持ちで付き合えない

後輩くんらしくない、真面目な表情。後輩ちゃんは頬を膨らまして、腕にしがみついたり甘い声を出して後輩くんに必死にアピール。後輩くんの冷めた目に、気付かないのかな？ なんか……こんなに冷たい目をする後輩くん、見たことない。

「なんでえ！？ あたし、こんなに先輩が好きなのには！」

「ごめんな？ 俺、好きな女の子がいるんだ。好きでもない女とは、付き合えない

後輩くん……。一途なんだね。

後輩ちゃんはウルウル目を潤ませて、顔を手で覆つて泣き始めた。はつきり言われて……辛いね。後輩ちゃんは、あんなに好意を寄せてるのに、叶わない。好きで仕方なくとも……『届くことがない恋』つてある。言葉にすることも許されない想いだつて……。自分がどんなに相手を想つても、相手が自分を想つてくれなきゃ、意味ない？……私はね、そんなことないと思つ。相手が自分を想つてくれなくとも……どうやつたとしても、振り向いてくれなさそうでも、好きになつたらとまらなくて……相手の笑顔が見られたら嬉しくて。あの人恋してよかつたって笑えるようになれば……意味があるよ。そうじやなくても、好きになることは必ず意味があるから……。

「ひ、ひどいよお……！　あたしは、先輩に似合う女の子になるためにい……オシャレしたり……ダイエットしたりつ、女の子らしくしてみたり、先輩の隣に立つても恥ずかしくないために……頑張ったのにいつ……！」

後輩ちゃんも、好きな人に振り向いてもらおうつて、頑張つたんだね。頑張つたから、後輩ちゃんはそんなに可愛いんだね。細くて、髪の毛もクルクル巻いてて……後輩くんにはもつたいたい女の子。後輩くんが好きになれないのはなんでかな。

「本当に、『ごめん。強制され、簡単に誰かを好きになれないだろ？　お前が、俺に『好きになつて』とか言つても、正直……好きになれるか分からない』

「う……うええつ！　も、いいよお！　あたしの自己満だつたからあ！　あたしも、先輩のこと強制で好きになつたわけじゃないもん！　先輩が、いつも……あたしに笑つてくれるから、先輩が……優しくて、面白いからつ……大好きなんだよおつ！」

自分に想いを寄せてくれば、その人を好きになれるかは、違う。後輩くんと後輩ちゃんが付き合えれば、幸せなのに。でも……それじゃ、後輩ちゃんに失礼だ。好きでもない人と付き合つのは、相手にも自分にも、苦しいだけ。

「えつ、え……先輩に、似合つ女の子になるために、頑張るからあ……先輩も、あたしを少しば見てねえ……？ もちろん、先輩と先輩が好きな人の邪魔……しないから、お願ひ……」

「ん。分かったよ、ちゃんと見る。てか……そのままでも可愛いと思うけど? 泣くと可愛い顔が台無しだって」

後輩くんの言葉に、後輩ちゃんはまた泣き出した。一人にした方がいいから、黙つてその場を離れた。顧問の先生はいつも来る時間が遅いから、後輩ちゃんのことはなにも知られないはず。その間に……一人が恋仲にならないかな。

ボーッとしてそんなことを考えた。

部活は昼を過ぎたら終わり。なんだかんだで後輩ちゃんは後輩くんと一緒に帰つてた。後輩ちゃんの意外な一面が見れた気がする。美咲と帰ろうとして、声をかけたら、違う人が応えた。

「星野さん。時間あるかな

「は、はや、隼人！？」

ええ……なんで隼人が！？ 部活、終わったの？ 時間はあるけど……美咲がいるから。断ろう。そう思つて美咲に目をやつたら、いない。鞄もないし……帰つたな。いつも、行動はやいよ。

「うん、いいよ」

「なら、体育館裏でいい？ 話があるんだ」

おかしいな……。体育館裏はあんまり人が通らない場所。不良が集まる時もあるけど、それは授業があるとき。夏休みの今は、不良もいない。つまり、誰も通る人はいない。なんでそんなところに……？

体育館裏に着くと隼人が振り返つて私を見た。真剣に見つめられて、息をするのが苦しい。喉もカラカラしてきました……。

「気付いてるかもしねいけどさ……僕、星野さんが好きなんだ。付き合つて、くれない？」

え……？ 今、『付き合つて』って言つた？ 聞き間違い？ 幻聴？ 空耳？ 隼人が私に……ないない。きっと、これは冗談だ。私がどんな反応するか試しているんだ……。

「冗談はダメだよ。好きな人がいるなら、その人に言わないと」

去ろうと背を向けて足を一步進めたとき。隼人に後ろから抱きしめられた。私の首に隼人の細い腕がまわる。隼人がどんな表情をしてるか……分からないよ。本気、なの？ 隼人が言つたの、本気？ 確かめるために、隼人の腕に手を添えた。隼人の力が強まつて、顔をしかめた。

「星野さん、今日可愛いから……我慢出来なくなつた。会えればいいと思っていたのに」

息を吐く隼人。隼人の息が耳にかかる……くすぐつたい。でも、私は隼人に告白されても、どうしたら？　はつきり、自分の想いを告げる？　好きでもない人と付き合うのは失礼だよ、ね。

「ごめん……隼人……」

情けないくらい、自分でも呆れるほど、声が震えた。

「ごめん……ごめんね隼人……。私、隼人の気持ちを利用したくないよ。誰かを利用したくない。」

「僕じゃ、だめなの？ 粟しか無理なんだ？」

「なんで……隼人が？ 私が粟を好きなこと知ってるの？ 一部の人しか知らないのに？ まして、男の子に言つたりしてないのに。柴崎さんが言つたのかな？」

「星野さんを見たら分かるよ。ずっと、見てたんだからさ。星野さんは、いつも粟を見てたよね」

「ギュって、力が強まる。苦しい、苦しいよ……隼人……離して。こんなところ、誰かに見られたら、大変だよ。誤解されるよ？」

「ごめん……隼人の気持ちに応えること、出来ないよ……」

「泣かないでよ……。ごめん、僕もしつこいね。嫌な思いは、させたくないかったのになあ……。いいよ、応えなくて。僕たち友達だから」

「ごめん……ありがとう隼人。友達に戻れるの……ありがたいよ。隼人と氣まずくなるのは、嫌だから……。」

私は帰ろうと隼人の中から出て、門まで黙つて歩いた。いつも、隼人に振り返つて手を振つてたけど……それは今、出来ない。しちゃいけない。隼人の優しさにこれ以上甘えたらだめ。

「好きだよ……ココロ」

隼人の咳きに、知らないふりをするしかないの……。

＊＊＊

なにやつてるんだるう……今日、伝えるつもりはなかつたのに。いや、これから先も伝える気などなかつた。前……好きだつた女の子に振られたことを今でも引きずつているんだ。あれは、振られたというより捨てられた、かな。別れたのも、そうだし。

「隼人」

名前を呼ばれて顔を上げた。嘘だ……なんでいるんだ？ 引つ越したんじやないの？ 僕と別れて、他校の男と付き合つてたんじや……。

「千恵……」

「久しぶり、隼人。ココロに告つたんだね？ 振られたみたいだけど……大丈夫？」

元カノ……千恵。確か小学生のときにつき合つて、引っ越して……また中学生になつて再会した、前に好きだつた女の子。今的好きな人、星野ココロの友達。星野さんに会いに来たのか？

「隼人がココロを好きなのは知つてたよ？ バレバレだよ、あんなの！ 気付かなかつたココロがすごい」

「星野さんなら、門に向かつたよ。追いかけないの？」 星野
さんに会いに来たんだよね」

じゃないと、ここに来る意味がない。僕に会いに来るのは有り得ないし。振つたのは、千恵なんだから。僕のことを笑いにでも来たのかな。あの頃の僕は、千恵を好きで……引き止めるために必死だつた。

「隼人より、かつこいい彼氏が出来たの。別れてくれない？」

「千恵……僕は千恵が好きだよ……。千恵は……違うの？」

なんて、言い合つていたなあ。今は、千恵のことを好きだとは思わない。むしろ、好きなのは星野さんだ。あんなに可愛くて、素直で……笑つた表情がとても好きなんだ。可愛いのに、もっと可愛くなる。棗が羨ましくて、何回嫉妬しただらう。棗も、星野さんが好きなくせに、なかなか言わない。言えば付き合つことになるのに。あ……きっと、柴崎だな。柴崎と付き合つてゐらしくから、星野さんとは付き合えないのか。棗のことだから……星野さんを諦めようとしたが、他の女の子と付き合つて、星野さんを忘れないんだな……。二人は、互いに想い合つているのに、上手くいかない。いつそのこと、付き合つてくれれば……僕は、星野さんを諦められるのになあ。

「星野さん？」 ロロロって呼んでたじゃない。『好きだよ、ロロロ』って。隼人、そんなにロロロが好きなのね！ 少し……
ロロロに嫉妬するかも」

なに言つてゐるのかな。僕に、今さらなにを言えつていうの？ あの頃みたいに、ひたすら千恵を追いかけてた僕じゃない。もう、星野さんしか好きじゃないんだ。千恵の時よりも、激しく好きなんだ。会うと優しく笑つてくれて、話すと癒してくれる。落ち込むと

慰めてくれて、元気をくれる。僕は僕らしくすればいいと、言つてくれるんだ。千恵より、好きなんだよ。こんなに人を好きになれたのは初めてで。見ると、切なくなる。会うと嬉しくなる。笑顔を見ると苦しくなる。目が合うと、心臓がバクバク鳴つて、ぎこちなくしか笑えない。彼女のためなら、なんでも出来る。彼女が僕を好きになつてくれるなら、なんでも差し出す。こんな苦しく、愛しい想いは初めてなんだ……。

「隼人がココロを好きでもいいの。私ともう一度……付き合つてほしい」

「ごめん、それは出来ないよ。好きな女の子しか本気で付き合えないんだ。千恵と付き合う気はない」

千恵はポロポロ泣き始めて、僕はそこに立つてているだけ。慰めは好きな人だけに使いたい。友達を慰めたりするけど、女の子を慰めるのは苦手。しかも千恵。元力ノだから、慰めようと思わない。優しくして、誤解されても困るし……。ただ黙つてそれを見るしか出来ない。謝るのは、違う気がする。なんて言えばいいんだろう。女の子が泣いた姿は、何回も見てきた。僕に告白してきて、断ると目の前で泣かれた。泣く前に、走り去る子もいた。でも、僕はなにも言わずに……ただ泣きやむまで傍にいた。……それで満足してくれるなら。千恵は、満足なの？　傍にいて、慰めてもくれない男なんか。

「隼人……私ね、隼人が好き……。王子様な隼人を、独り占めしたかった。でも、付き合つたら違つた。それだけで……満足出来ずにいた。隼人が他の女の子に優しくしたり、笑いかける度に……嫉妬したの。隼人に嫌われることが……怖かった。醜い私を見て、隼人はどう思うんだろうって……」

僕も不安だつたよ。千恵が話す度に他の男の名前が出て。いつか、千恵は他の男のところに行くんだろうなつて。だから、千恵に好きになつてもらおうと頑張つた。他の男なんて、目に入らないように。今思えば……僕は必死過ぎた。なんであんなに千恵にしがみついたのかな。

「隼人を、愛してる！　隼人だけしか、愛せないよお……っ！」

千恵があの頃の僕と重なる。僕も、何回千恵に伝えただろう。

『千恵だけが好きなんだよ！』

何回伝えても、心に響かないことだつてある。学んだ僕は、成長出来たのか……それすら分からない。心が手に入らないと分かつていても、言葉にして、相手に伝えたり言つたりする僕ら。気付いたら、言つてしまつ。自分で言わないうように注意しなければ。でも、伝えられずにはいられない。今だつて、叫びたくて仕方ない。

「口口口が、世界で一番好き」

言いたいし、叫びたい。でも……言つたら星野さんが困るから。困らせたくないんだよ。振られても、諦められない。嫌われたく、ないんだ。

『ごめん、ごめんね千恵。それと……僕を愛してるって言つてぱいの思いを。いつか、言つてた女の子がいるんだ。』

『横野くん……謝るのはやめて……。謝るのなら、ありがとうつて言つてよ。たとえ、振られても……好きな人に「好きになつてくれてありがとう」って言わされたら、嬉しくなるんだよ』

謝るなら、感謝しよう。「ごめん、よりありがとう、だね。その心が少しでも、軽くなるのなら。僕を想い出して、再び笑えるようになるのなら。何度も、伝えよう。キミに、ありがとう。

「隼人は優しいから……私にそう言つてくれるんだね……。うん、分かった。隼人はココロが好きだから、邪魔しない。勝手に、好きでいさせてね」

一ツコリ笑つた千恵は、きれいだった。涙で潤んだ目も、彼女を飾るアクセサリーに見えた。泣き笑いの表情の彼女……前に知らなかつた、強がつてゐる表情。きれいな笑顔を見せてから、千恵は学校から去つた。星野さんに会いに行つたのだろう。夏休みが終わつたら……星野さんに言おうか。僕と千恵の関係。千恵に、迷惑がかかる? 星野さんは気をつかう、かな。でも、知つておいてほしいんだ。そして……棗と仲直りしたことも。柴崎と付き合つた棗は、僕に謝つてきた。それで、分かつた。棗が星野さんにしたこと。好きでもないのに、柴崎と付き合つてゐること。星野さんを傷付けたのを知つたとき、危うく棗を殴りそうになつた。僕には関係ないのに、許せなかつた。棗……ちゃんと星野さんに伝えてよ? 僕、応援するからさ……。星野さんの、幸せな笑顔が見たいんだ。キミの、眩しい笑顔が。僕が一目ぼれした、あの笑顔。大好きな、笑顔。

夏休みが終わつて、久々に星野さんの教室に来た。棗もいたけど、柴崎と話してゐるから邪魔したら柴崎に怒られるな。

「隼人……？ おはよう。どうしたの？」

星野さんが後ろに立っていた。確かに、あの状況で教室にいるのは辛いな。棗に手を振つてから、僕のクラスに星野さんを連れてきた。キヨトンとした彼女が可愛くて、口走りそうになる。いけない、いけない。

「隼人……棗と仲直りしたの？ 手、お互に振つてたよね！？」

「棗とは仲直りしたよ。少し前には。だから、僕たちに気をつかわないで。棗とは、前みたいなライバル関係だから」

星野さんが原因で喧嘩したのなんて知らないだろうね。棗も、星野さんをとられたくなくて、僕に嫉妬してたんだよ。だから、星野さんは自信を持つていいんだよ。希望はあるんだからさ。柴崎より、可愛いから。柴崎も美人だけど、星野さんはふんわりした雰囲気で癒される。柴崎にはない、雰囲気なんだ。

「あの……千恵から聞いた話なんだけどね……昔、千恵と隼人つて付き合つっていたの？」

「うん。ほら、僕が前話した、一方通行な想いだよ。元カノの話」

すると、星野さんは表情を曇らせる。なんでそんな表情するのか分からなくて、首を傾げていると、突然頭を下げた。僕じやなくて、星野さんが。どうして頭を下げるのか分からなくて……謝る星野さんの顔を無理矢理上にあげた。

「千恵とのことで謝らないで。話しあつたから……それに、千恵のことは恨んでないし、むしろ安心した。ああ、変わつてないなあつて」

星野さんに笑つてほしくて。思つた通りに言つたら、ホッとした表情をした星野さん。良かった……僕のことで、辛い思いはしてほしくない。星野さんが小さく笑つて、つられて笑つた。僕の好きな、柔らかい、初めて見たときの笑顔ではないけれど。ああ、やっぱり好きだなあつて思つた。

「私、進路決めたんだ。夏休みに、親とか友達とたくさん話して……行きたい高校、見つけた」

「良かったね！」

本当は。とても知りたいよ。星野さんが行く高校。でも、それじやあ僕も前に進めない。また、自分の気持ちを押し付けて、相手に縋るのは嫌なんだ。だから……聞かないでおくよ。僕は、ちゃんと前に進むから。あと、少し。少しでいいから……星野さんを好きでいさせてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162s/>

蜜柑色の君

2012年1月14日15時53分発行